

第三章 動物植物

第一節 鳴沢村の植物

一 鳴沢村の地形、地質

甲府盆地と富士山との間には御坂山脈がある。この山脈をつくっている地質は御坂層と呼ばれていて、今から二千万年も前の第三紀中新生の時代に海底火山として噴出堆積したものであり、化石も御坂山脈中からたくさん出ている。

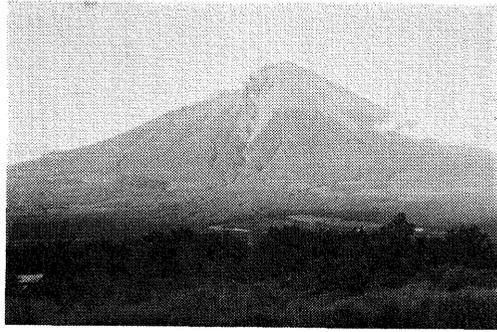
この御坂山脈や、八ヶ岳、茅ヶ岳、富士山等は長野県側の糸魚川から太平洋岸の静岡市方面にいたると思われる古い地質構造線にそっている。

植物分布を考える場合には、一般的には地質時代とか、年数等に関してまではそれほど厳密な考え方をする必要はないものと思われる。それは新しい植物種の分化に時間がかかることや、たとえ新しく分化があつたとしても、分布拡大とその同化、消滅がおこる可能性があるからである。

鳴沢村の行政区画は北側が足和田山塊の東西の稜線となり、南側は富士山頂の金明水付近になっている。

足和田山塊は東側の大田和(九三^ノノ)、集落から魔王神社、五湖台(一三五五^ノ)を経て東海自然歩道をたどり、紅葉台(一一六四・七^ノ)から鳴沢水穴入口付近の国道一三九号線に合流する。

富士山の北側には山中湖・河口湖・西湖・精進湖・本栖湖の富士五湖があり、富士山を背にして横たわるこれらの



富士豊茂から富士山大沢を望む

湖水は美しい。

これらの富士五湖の成因は、今から二千万年前に御坂山脈ができあがっていた。そこへ富士山の噴出があつて、富士山、御坂山脈と裾野に三ヶ月型の湖水ができ、この水は富士の北麓をとつて駿河湾に流れこんでいたという（富士をめぐる地質、昭和三十一・九・五）。この三ヶ月型の湖水は新しい噴出溶岩である富士山の猿橋溶岩流、鷹丸尾溶岩流、三島大宮溶岩流、青木ヶ原溶岩流等によつて現在の富士五湖が出現したといわれている。

火山地域で鳴沢村領になつてゐるのは富士山々頂の（白山岳）、金明水から大沢崩をへて大沢休泊所跡、ここから北西ならびに北側にまがつて疇塚と富士ヶ嶺の東側をとつて北側にすすみ、片蓋山の山頂付近から大室山（一四六八呎）の東側には神座風穴付薄銚穴及び眼鏡穴などがある。つづいて大室洞穴、本栖の東側には神座風穴付薄銚穴及び眼鏡穴などがある。つづいて大室洞穴、本栖の東側には神座風穴付薄銚穴及び眼鏡穴などがある。つづいて大室洞穴、本栖

二 鳴沢村の気候

風穴、大室洞穴、富士風穴付近を通過して鳴沢氷穴、富岳風穴付近で国道に連なる。

その地域の気候は、その緯度、海拔、季節風、地形、水陸の分布などによつて異なる。気候をその特徴によつて分類型をつくつてみると鳴沢村の場合は大局的にみると表日本型の中央高原性の気候地域に属している。

本県の周囲は南アルプス・八ヶ岳・秩父山塊・富士山等の高山によつて囲まれている。しかしながら裏日本とは異なり、冬における積雪量は少ない。夏は高温となり暑さが厳しく、冬は寒さが強く、空気は乾燥し、降水量は一般的には少ない。風は冬の北西からの季節風が強い。

鳴沢に近い精進での年平均気温は十・六度C、最高年平均気温は十五・四度C、年平均最低気温五・八度Cで年降水量は概略一九七一^リとなっている。河口湖では年平均気温一〇・七度C、年降水量一五五七^リである。

精進では年平均気温一〇・六度Cと上九一色や河口湖より多少低く、最高平均気温は一五・〇度C、最低平均気温五・八度C、年降水量は約一九八一^リとなっている。精進、富士ヶ嶺の方が上九一色よりも低温であり、年降水量は精進や富士ヶ嶺の方が朝霧高原という名が示すように雨量が多い。

富士ヶ嶺地域は太平洋岸の温暖で湿度の高い気流が富士山側の冷涼気象に接して水滴となり、上九一色側では朝夕、雲や霧を生じやすく、上九一色側では鳴沢村に比較して天気が悪いことが多い。

三 鳴沢村の植物分布

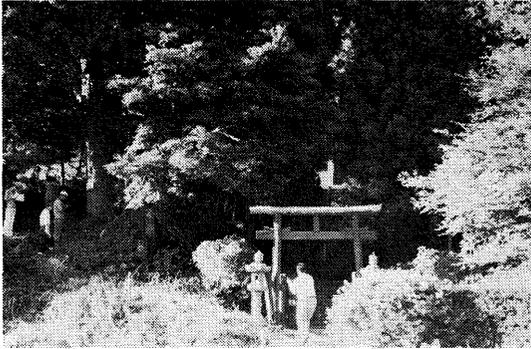
鳴沢村は、その占める面積は富士山頂の高山帯にまでわたっていて気候・地形・地質・土壌などの植物にとっての環境条件は多様で、変化に富んでいる。

前記したように、鳴沢村は一般的に内陸性の気候を示しているが、本県の南部地域同様湿度がやや高く、表日本型の気候を示していて、それぞれ、その環境に適応した植物の分布が見られる。

ここでは、このような気温、降水量などの気候的条件に関連をもって、分布している植物を気候的要素と呼ぶ。現在の日本列島は、第三紀時代をはじめとして、何回か、大陸からの半島状態になったことがあるといわれている。

現在の日本列島の植物分布ができあがるまでには、このような地史的条件も影響しているように思える。

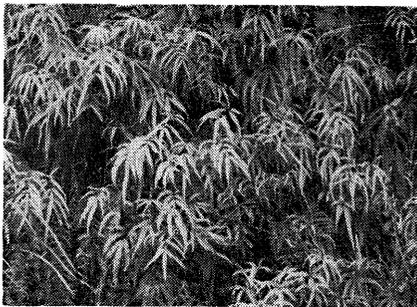
中央構造線とか、フォッサ・マグナ (Fossa Magna) などの、この地史に関連があつて分布していると思われる植物を、ここでは地史的要素と呼ぶ。



南部町井出八幡宮の暖帯林
(タブ、クスノキ、ヤブツバキ、カゴノキ等)



滝戸山のシラカシ林



オオバイノモトソウ (芦川溪谷)

富士山を中心にした火山地域は、生育植物にとって、新しい火山性裸地を提供し、他と異なった一つの物理化学的環境を提供し、種の分化、すなわち、新しい植物の出現にとって、一つの刺激的役割を果たした。このような、火山地域に関連があると思われる植物は、火山性の土壌的要因の影響をうけた植物で、これを石灰岩土壌地域の植物などとあわせてここでは土壌的要素と呼ぶ。

以上のような気候的、地史的、土壌的各要素のほかに、帰化植物といわれているものもある。これらのものの、そ

れぞれについて、以下多少詳しくふれてみたい。

(一) 気候的要素 (Climatic Elements)

山梨県は、最北端が八ヶ岳の主峯赤岳(二八九九呎)、南の端は富士川沿いの静岡県境にあたる富沢町であり、気温や降水量などは、本県の北と南の両地域ではだいぶ異なる。

一方、鳴沢村では北部の五湖台が海拔一三五五呎南方では富士山頂が三七七六呎となっている。したがって気候のところでもふれたように気候環境は村の南北によっても海拔差が大きいので大きく異なっている。

甲府地方気象台(一九七〇・『山梨県の気象』)の資料によると上九一色村・鳴沢村では前記のように内陸型の気候を示している。

年平均気温一五度Cに近い地域ではタブ、クスノキなどの暖帯林が神社や仏閣の境内などに見うけられるが、鳴沢

村ではそれらの林はめだたない。

また、本県の年平均気温一三度C付近では、シラカシ、アラカシ、ウラジロガシなどの常緑広葉樹のカシ林が見られるが、年平均気温八度C以下の地域ではブナ林が形成されるのが普通であり鳴沢村内に關係する片蓋山、大室山、弓射塚、長尾山等ではブナが見られる。

吉岡邦二博士の言によると、このブナ林の形成地域の限界は、ブナの若芽が、晩霜によつていたみやすいことに關係しているということである。そういわれてみれば、本県北部の八ヶ岳や金峯山甲斐駒などの内陸地では、この晩霜があるためか、ブナ林の形成は少なく、かわつてそこに晩霜に強いウラジロモミや

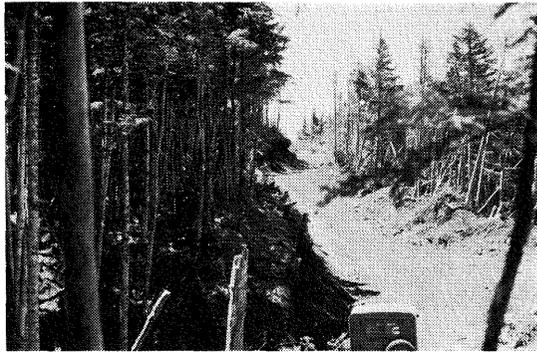


オオシラビソの葉

ツガ等がめだつているのは興味深い。晩霜の少ない青木ヶ原の大室山、片蓋山、弓射塚、長尾山などには立派なブナ林がめだつている。

海拔二〇〇〇〜二三〇〇呎の小御岳神社、御庭、奥庭等の場所を中心にして、コメツガ・カラマツ等の分布が見うけられる。低海拔地の鳴沢村にはそれが少ないがカラマツの植林は目立つ。

ツガは、岩石地においては、適応力が強く、他の樹種に優先して、その分布頻度が多くなつていて、青木ヶ原溶岩流上にはこの林がめだつ。



富士スバルライン工事中の景観



五合目のカラマツ林



秩父のブナ帯



片蓋山のブナ林

一般的には二〇〇〇呷付近でめだつコメツガも二三〇〇〇〜二五〇〇呷付近では少なくなり、シラベ、オオシラビソ林がめだつようになる。山梨県内の二五〇〇〜三〇〇〇呷の富士山を除く高山頂には、ハイマツと小型の高山草木本が見られるようになる。このようなコメツガやシラベ、オオシラビソ、ハイマツなどの林が鳴沢村にも見られるがハイマツは分布しない。このような植物の垂直分布的变化は必ずしも、標高だけにしたがうものではなくて、それぞれの地域や山岳における他の条件によってもその特徴がみられる。

暖帯林なども海沿いの地域であれば、クスノキ、シイノキ、クロマツ、ウバメガシとかイブキなどが、一般的にはめだつようになる。

伊豆半島の真鶴岬（まなづるみさき）のクスノキやクロマツを主とする原生林、伊豆下田のウバメガシ林、同じく下田町白浜のイブキ林などはそのよい例である。

シイの分布に關しては吉岡邦二博士は、仙台付近のシイ林を調査した結果、年平均気温一二度C、一月の平均気温二度Cを少し超し、寒量指数でマイナス五度Cの場所であるとしている。本県の場合は、寒量指数が影響して、寒いため、シイの分布が少なく、富沢町などの一部にのみその分布が限られているのではないかと考えられる。

山梨県に分布するカシ属や冬でも葉を落とさない常緑のものとしては、平地では、シラカシ、各河川の沿岸などでは、アラカシ、ウラジロガシ、神社や人家の周辺などでは、ツクバネガシやアカガシ、シラカシなどがあらわれるが、鳴沢村ではほとんどカシ属をはじめとする常緑のものの林は少ない。

① シラカシ

シラカシ林の、山梨県における半自生分布地は、茅ヶ岳山麓の須玉町正覚寺付近以南でおもな所在地としては甲府北山山麓、須玉町若神子、韮崎市武田八幡、櫛形山山麓の増穂町最勝寺境内、身延山妙石坊境内、大月市岩殿山麓浅利、富士川七ツ釜、市川大門町弓削（ゆげ）神社、三珠町熊野神社、境川村滝戸山麓や長坂町竜岸寺などに、その著しいシラカシの自然林や植栽林がある。

このシラカシは、カシの中でも一番耐寒性があるものである。また年平均気温一三度C、海拔で五〇〇呎付近の場所に至るまでこの自然分布が見うけられる。鳴沢村ではカシ属の常緑のものは見うけられない。自然植生でのシラカシ林は中道町側には見受けられるが鳴沢村にはほとんどそれが見られない。

② アラカシ

山梨県内におけるアラカシ林は、シラカシが平坦の肥沃地に多いのに対して、岩石地や崩壊性の各河川の沿岸等にめだち、山梨県内のおもな分布地としては、富士川の下流域などをあげることができる。

相模川の上流域での分布を、もつと細かく記すと道志山脈の東西に流れこんでいる道志川、秋山川や桂川などの沿岸や、大月地域などにめだつて多い。国指定の文化財として有名な猿橋（さるはし）付近や、富士川流域ではその支流である富士川の七ツ釜とか下部温泉、韮崎市の穂坂町日の城（ひのしろ）などにこの著しい林が見うけられる。

アラカシの分布地の年平均気温は、シラカシ同様、ほぼ一三度C程度で、シラカシと異なるのはアラカシが各河川沿岸の崩壊地にめだつことである。

③ ブナ林とウラジロモミ林

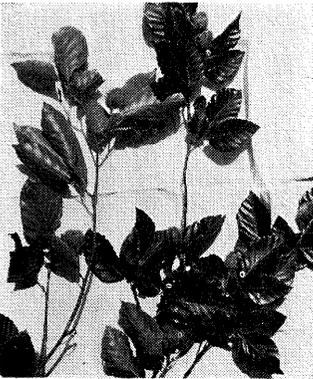
ブナは、イヌブナ、イヌシデ、シラカンバ、クマシデ、クリ、サワシバなどとともに温帯林での代表樹種である。

山梨県内でのブナ林は南アルプス夜叉神峠、ドノコヤ峠、富士見山、足馴峠、十枚山、月夜の段、貫ヶ岳、富士山麓精進登山道、山中湖畔、不動坂、平野、みさき、長池、三国山、都留市の御正体山（みしょうたいさん）、大菩薩峠などにこの著しい林がある。秩父側の金峰山麓などや南アルプス北部などにもブナは見うけられるが、この場合には、まれで著しい林は見られない。これらの秩父側や南アルプス北部などのブナ帯ではブナにかわってウラジロモミが海拔一五〇〇〜二〇〇〇呎程度の地域に目立ってくる。このウラジロモミ林は内陸性気候地域でブナとおきかわって分布しているように考えられる。

ブナ林、カラマツ林は鳴沢村の場合、富士山麓、富士山裾野、富士ヶ嶺、片蓋山、大室山、竜ヶ岳、精進登山道等にめだち、その海拔は一〇〇〇〜一七〇〇呎にかけて分布していて、この林にはウスゲタマブキ、カニコウモリ、テバコモミジガサ、コメツガ、ツガ、カラマツ、シラカンバ、ブナ、ベニバナツクバネウツギ、オオカメノキ、トウゴクミツバツツジ、サラサドウダンツツジ、ウスバサイシン、フタバアオイ、クマシデ、ヨグソミネバリ、ミヤマエン



鳴沢のシラカンバ林

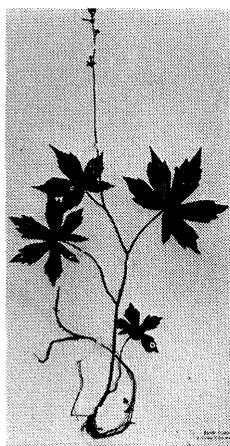


ブナの葉

レイソウ、ツクバネ、ツバメオモト、スズタケ、ウラジロモミ、ニシキウツギ、フジサンシキウツギ、ヒメマイズルソウ、クサタチバナ、ツルシキミなどが見うけられる。また、ブナ林に出てく



テバコモミジ (大室山)



テバコモミジガサ (東赤石岳)

る林には、二次林でシラカンパーレンゲツツジ群落、溪谷沿いにシオジミヤマクマワラビ林、岩石地ではツガミツバツツジ林、裏日本のブナーチシマザサ林に対応して、表日本型のブナーズタケ林をはじめとするものが見られる。

(1) 地史的要素 (Geological History Elements)

山梨県は、フォッサ・マグナの通過地域にあたり、地質が四十層群で古く、西側には、海拔三〇〇〇呎以上の海抜をもつ北岳、仙丈ヶ岳、農鳥岳、西農鳥岳や花崗岩からなる高海拔の駒ヶ岳、鳳凰山などの南アルプス地域が横たわっている。

東側には、同じように古い地質や花崗岩からなる甲武信岳、国師岳、朝日岳や、花崗岩からできている金峰山、瑞牆山(みづがきやま)等がある。これらの地域が秩父山塊地域である。

この両者は、東西に対立しているが、この二つの地域の間にはフォッサ・マグナ地域がある。

この南アルプスと秩父、すなわち赤石山脈と関東山地とは、元来は一連のものであったが、第三紀時代におこったフォッサ・マグナによって東西の二つに分けられ、その中間の地域は、大きな海峡になったものである。

南アルプスと秩父の山並みとの中間地帯は、フォッサ・マグナ断層の通過地域であるため地殻が弱く、いくつかの

現存するような火山の噴出をみた。それが八ヶ岳、茅ヶ岳、甲府北山、富士山や、県外では愛鷹山（あしたかやま）、天城山、大島をはじめとする伊豆七島などである。このような地球の歴史にかかわりつつ形成された本県の地域や山岳は、それなりの特徴のある植物分布を形成している。

中央構造線にそう古い地質からなる南アルプスや秩父の山なみを中心にして、テバコモミジガサ、イワユキノシタ、ヒメシヤラなどをはじめとする一群の植物が、九州・四国方面から、本州中部へと続いた分布をしている。この分布型をするものをテバコモミジ型と呼ぶ。

鳳凰山麓とか、八ヶ岳山麓などには、ザゼンソウをはじめとするアジア大陸北部系のもが見られる。これをザゼンソウ型と呼ぶ。

フォッサ・マグナの溝は、植物にとって、異質の生態環境を提供し、主として、この溝だけにそって分布している植物がある。その好例が、ヒメスマイレサイシンとか、ハコネコメツツジ等であり、これをヒメスマイレサイシン型と呼ぶ。

高山頂は、第四紀氷期をはじめとする寒冷時代には、北方系の植物が旺盛な分布をしめた。その生き残り、すなわち名ごりとしての、遺存植物の宝庫に、高山頂はなっていることが多い。このような遺存的性格をもつものにクモイカグマ、キタダケソウ、チングルマなどがあり、これをキタダケソウ型と呼ぶ。以下それ等をはじめとするものについて簡単にふれる。

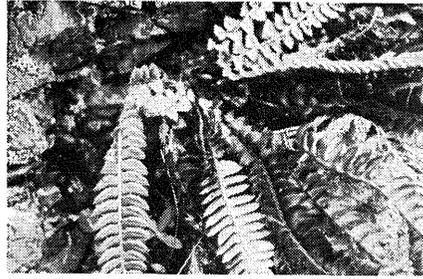
① テバコモミジガサ型

九州、四国から南アルプスにまで、続いている中央構造線にそって日本列島の表日本側に興味深い分布をするもの

小泉源一博士は、このような分布型をするものと、襲速紀山系（そはやきさんけい）にめだつて分布するところから、前原勘次郎の『南肥植物誌』（一九三二）の前言中で襲速紀要素と呼んだのである。

そして、この要素に入るものとして、タバコモミジガサ、イワザクラ、モチツツジ、ヒコサンヒメシヤラ、イヨフウロ、コハクウンボク、マルバノキなどを中部支那要素や玖摩関東要素（くまかんとうようそ）などと対立させて記録している。

村、犬ヶ岳、四国手箱山、石槌山、筒上山、紀伊半島大台ヶ原山、本州中部伊豆天城山、遠笠山、浄蓮の滝付近、段戸山、三ツ峠、富士山、樽峠、国師岳、雁坂峠、雲取山などで、日本列島上で割合に古い地層とされている中央構造線の地域に沿ってタバコモミジガサの分布は見られる。



クモイカグマ（白根北岳）



タカネヨモギ（富士山5合目）



キバナシャクナゲ（金峰山）

に、タバコモミジガサ、イワユキノシタ、イワナンテン、ヨコグラーノキをはじめとする一群のものがある。この分布型が、タバコモミジガサ型である。

タバコモミジガサの日本列島上でのおもな分布地は、九州岩戸

小泉源一博士のいう襲速紀要素のものには、その分布の東限が、ほぼフォッサ・マグナの溝である山梨県の地域で終わっている植物がめだつ。

テバコモミジガサは、南アルプスに見うけられるし、それが、フォッサ・マグナによってきられ、しかも、かつて一連の地域であったと考えられている秩父側の国師岳、雁坂峠、小金沢などにも、この分布は見うけられる。

この秩父側にも、南アルプスとほぼ同一の四万十層群という古い地質から成り立っている地域が目につく。

西南方から分布が連続しているハクロバイは、四国の剣山をはじめとする地域に分布するが、それが、鳳凰山、北岳等の岩壁にもその分布が見られる。このような例は、西南日本に多いコイワザクラからの本県地域での新しい分化と想定できるクモイコザクラが、南アルプスや秩父側の乾徳山などに、その分布が見られるのも同様の分布型であり、これらのものもテバコモミジガサ型に入るものである。

このような、西南方から中央構造線にそって分布してきているものは、考え方によっては、裏日本型の分布をするものに対して、太平洋側に多いところから、単に表日本型だとして扱うこともできる。ここでは、これらの植物がフォッサ・マグナ以南の表日本にだけ分布することに着目して、地史的要素として扱う。この中央構造線の地域が、かつては、陸地化していた東支那海を経て、中国内部と陸続きであったことや、中国内部にテバコモミジガサ型のものとの近縁植物が見うけられることなどは、地史的要因とも関係がありつつ、分布を東へと拡大している植物群であると予想することができる。なお、裏日本型のものには、ミズバショウ、トガクシショウマ、ヤブツバキ、リュウキンカ（北巨摩郡大泉村産）、シラネアオイをはじめとするものが多い。

② ザゼンソウ型

秩父側の本県と長野県との県境に信州峠がある。ここには第二次世界大戦直後における筆者の調査によると、大陸

系のザゼンソウ型の代表であるザゼンソウの分布が見うけられた。しかし、残念なことに道路拡幅のため峠頂上ものがなくなってしまう。その後、筆者は鳳凰山麓の鳥居峠、八ヶ岳山麓美し森、長坂町深沢と長野県との県境である白州町国界付近や塩山市等でも、このザゼンソウの群落を観察することができた。

このザゼンソウの分布地は、日本では、北海道と本州に、国外ではアムールと樺太とから報告がある。日本での分布の「本州」というのは、主としてその分布地が日本海側の雪の多い地域である。

本県の周辺では、長野県側から多くの分布地が報告されているし、前記の信州峠をこした長野県側の川上村や野辺山方面にも、この大きな群落が見られる。

ザゼンソウに類似のものには本県の檜形町穂見神社に分布するヒメザゼンソウがあり、これは、長野県の富士見峠付近にも分布するが、これは国外では北朝鮮にだけ分布していて、日本でのザゼンソウからの新しい分化種であると思われることができる。

このザゼンソウの分布しているような場所では、鳳凰山麓の鳥居峠で見られるように、同時にオオヤマカタバミ、ハンドイ、チョウセンゴミシなどの分布もみられる。このような傾向は、秩父側の増富ラジウム鉱泉奥の金山沢や木賊峠などでも見られるがここにはザゼンソウの分布は見られない。

③ ヒメスミレサイシン型

スミレの一種であるヒメスミレサイシンは、裏日本側に分布するスミレサイシンに類縁であると考えられるものである。

本種の分布をみると、興味深いことに過去に存在したフォッサ・マグナの溝に沿ってだけ分布している。筆者の採集記録では、ヒメスミレサイシンは、その分布地として戸隠山、燕山、三才山、八ヶ岳、美ヶ原、釜無山、北岳、御

坂山脈の三ツ峠、黒岳や秩父側の十文字峠、増富ラジウム峽等をあげうる（植松春雄一九五一・一九六七）。このようなフォッサ・マグナの地域を分布本拠とするものを、前記のように、ヒメスマイレサイシン型と呼び、この型のものは、フォッサ・マグナの地域に発生起源をもつと考え得る植物群である。

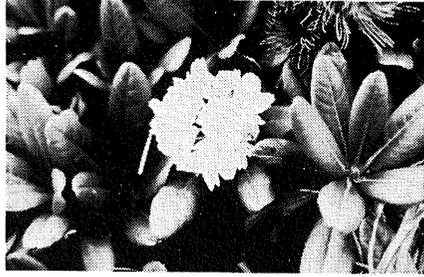
参考までに、研究機関でのヒメスマイレサイシンの所蔵品をあげてみると、東京大学には、八ヶ岳、毛無山、北岳、増富金山、鬼ヶ岳、御坂山、京都大学には、神宮寺山、八ヶ岳、東京科学博物館には、武石峠のものがあつた。

このような事實は、ヒメスマイレサイシンがこのフォッサ・マグナの地域において、その発生の起源をもつたであらうことが想定できる。前川文夫博士（一九四九）は、フォッサ・マグナは一種の種形成能力のあつたことにふれて、このフロラ地域をフォッサ・マグナ地域と呼んで一つの植物区をもうけている。このフォッサ・マグナ地域の西側は「南アルプス地域」、東側は「秩父山塊地域」となる。筆者は、この過去の地史との関係があると考え得る植物を、フォッサ・マグナ要素と呼んだ（植松春雄一九五一）。

このフォッサ・マグナ地域の植物研究の材料として、前川文夫博士（一九四九）はカンアオイ属を対象として、そのよい例を指摘しつつ、その研究をすすめてきた。筆者はヒメスマイレサイシンをフォッサ・マグナの地史に関係のあるものとしてとりあげ報告した（一九五一）。

このヒメスマイレサイシン型に入るものは、このほかにも、数多くのものがあつたと思われるが、その発生起源地域が、およそ南北にわたるせまい帯状の地域であつただけに、現在ではそのほとんどのものの分布は、その周辺へとひろがるか、近縁種と交雑してしまつてゐることが想像でき、その明確な指摘はむづかしい。

フォッサ・マグナの溝を中心にして、その分布を拡大しつつあるように思えるものに、オクヤマコウモリをはじめとするいくつかのものがあつたが、前記のごとくその明確な指摘がむづかしいのでここでは、ヒメスマイレサイシン型に



ハイマツとハクサンシャクナゲ（北岳）

関する基本的な考え方を記すにとどめておく。

④ キタダケソウ型

キタダケソウは山梨県の北岳（三一九二呎）にだけ分布する遺存種である（植松春雄一九六三）。キタダケソウ属は世界では、アルタイルから、東シベリアの高山にかけて数種が分布している。

旧日本領（一九四五）をも含めての地域の種では、樺太にカラフトミヤマイチゲ、北海道日高にヒダカソウ、朝鮮白頭山にヒダカソウと同種にもされたことのあるウメザキサバノオを産するというように、空間的にかげ離れた地域における、高山での縁種の分布が知られている。

キタダケソウは、日本列島が、アジア大陸と陸続きであった寒冷な時代に南下して遺存したと考えられるものであり、その点では、すでにふれた前川文夫博士（一九四九）のいわゆる「マキネシア」という考え方も関係のある地史型のものである。従って、広い意味では、前記のザゼンソウ型に入るともいえるが、それと異なる点は、ザゼンソウ型のはブナ帯やクリ帯上部の湿地性の低海拔地に分布し、しかも日本列島上に広く分布するのに対して、キタダケソウ型のは、ハイマツ帯に生じ、しかも北岳をはじめとする狭い地域にだけに固有分布していて、同属のものとの分布が、空間的に北海道、樺太、北朝鮮、シベリアというように遠くとんでいる。

キタダケソウ属のそれぞれは、当然のことであるが、その形質が、相互によく似ていて系統学上それほどかけはなれたものではない。このようなことからキタダケソウ属のものは、割合に新しい第三紀もしくは第四紀にかけての日

本列島が大陸と陸続きの寒冷気候時代（氷河時代）に、大陸から分布を拡大したものの遺存であると考えられる。

キタダケソウ属のものが、前記のように現在隔離分布状態におかれているのは、第三紀末以降、何回かの氷期ならびに間氷期がくりかえされているうちに、他地域までに分布していたものは、消滅し、暖気候になった現在では、特定の高山頂や寒冷地域にだけ遺存しているものと考えられる。

キタダケソウ型に入るものの好例としては、このほかにタカネマンテマ、キタダケヨモギ、ハゴロモグサ、センジヨウスゲ、コマクサ、ハイマツ、キバナシヤクナゲ、タカネヨモギ、クモイカグマや八ヶ岳の主峰赤岳にも分布するクロユリなどがある。このうちクロユリは、日本では、裏日本の高山の深雪地に多いが、これは東アジアだけでなく、北アメリカにもその分布が知られている点、他のものと異なる。

⑤ ホザキツキヌキソウ型

ケシヨウヤナギは、日本では北アルプスの上高地と北海道の日高をはじめとする一部にだけ分布し、国外では、東シベリア、オホーツク海沿岸と樺太にも分布するもので、国外のこれらのものは、日本のものと同一種である。

筆者は、山梨県にも深山が富士山をはじめとして、南アルプス、秩父などに多いので、このケシヨウヤナギが分布していないかと、長い間、調査をすすめてみたが、それが見当たらずむだであった。

このケシヨウヤナギは、富士山五合目とか、浅間山や北海道太平山などに分布するムラサキモメンズルや、橇形山や秩父の笛吹川沿岸などで、丸山尚敏氏や大菅文雄氏とか筆者植松らが確認したホザキツキヌキソウなどとともに、アジア大陸より洪積世から現在へかけての新しい時代になってから渡来分布したものの一群であるように考えられ、この分布型をもつものが、ホザキツキヌキソウ型である。

ムラサキモメンズルは、生存競争の少ない火山の裸地へ、またホザキツキヌキソウはこれまた、裸地のめだつ牧場

跡などにその分布が見られる。

これらのものが、どんな要因で渡来分布してきたのか明言することは難しい問題であるが、しいてそれを推測してみれば、日本列島が大陸からの陸続きもしくは、この両地域が、極めて狭い海をもって接近していた新しい時代に分布を拡大したものと考えられる。

ホザキツキヌキノソウは、形質上、長野県菅平方面に分布するツキヌキノソウに近縁のものである。

ケショウウヤナギは日本列島上での分布が、キタダケソウ属の分布に類似した地域に限定されているが、北岳にはこの分布が見られない。

(三) 土壌的要素

植物の環境条件としては、前記した地史的变化、気候変化のほかに、生育地における土壌のもつ物理化学的相異にもとづく条件も、大きく取りあげなければならない。

火山性裸地における溶岩、もしくはその風化した砂礫地には、植物の生育していない裸の土地が多い。そのため太陽光線の受給量が多く、夏季には高温となることが多いし、水はけもよすぎて乾燥気味となる。このような火山性裸地に適応したと考えられるものが、富士山やその周辺に多いフジザクラをはじめとするものであり、これをフジザクラ型と呼ぶ。この型のもものは鳴沢村の植物にも大きく関連するものである。

また、山梨県と長野県の県境付近には石灰岩の地域が見うけられるが、その大部分は長野県側である。白州町の国界橋付近では、珍しく本県側の大武川地区に石灰岩の露頭が見られる。

石灰岩地域は、岩石としての物理、化学的性質を植物に提供する。その著しい例として水にとけてアルカリ性となるという点など忘れてはならないことである。

清水建美博士の（一九六二—一九六三）研究では、このような石灰岩の地域では好塩基性植物、もしくは好石灰岩植物と呼ばれるものの分布が見られると報告している。

前記した大武川地区は、富士川の上流である釜無川に沿う地域で、この河原には、トダイアカバナの分布が見られるし、また石灰岩壁にはイチョウシダの分布も見られる。またその周辺にはヤマブキソウの分布も見られる。

これらのものは、筆者が好石灰岩植物もしくは石灰岩固有植物と呼称してきたもので、日本列島もしくは台湾においての分布地が主として石灰岩地域だけに限られているものにトダイアカバナがある。このようなものをトダイアカバナ型と呼ぶ。さらにこれらの二つの型のものについてふれる。

① フジザクラ型

フジザクラは、富士山、三ツ峠、夜叉神峠、鳳凰山、七面山とか八ヶ岳などの富士山を中心にした地域にめだつていて、本来は富士火山の地域で生まれたか、もしくはその地域に適応分化し、そこから周辺地域に向かって分布を拡大したものではないかと考えられる。

本県の地域は、フォッサ・マグナの溝の中にあり、そこは地殻が弱いため北から戸隠山、浅間山、八ヶ岳、富士山、受鷹山、天城山、伊豆大島、八丈島ほか伊豆諸島などの火山の噴出をみた。

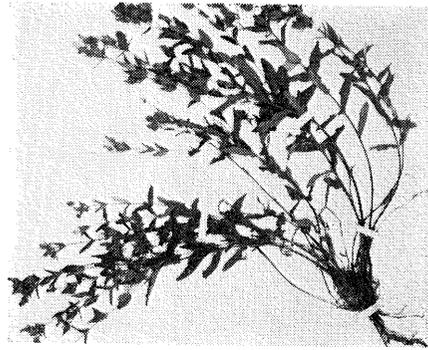
このような火山地域は、植物にとつての生態的環境が特殊で、種の分化に当たつて大きい意味をもつたものと考えられる。

特に富士山や浅間山などのような新しい火山の場合は、溶岩をはじめとする噴出物によつていったん従来からあつた植物はなくなり、その裸の土地の上に周辺から新しい植物が侵入分布したものと考えられる。このような裸地での土壌は、一般に乾燥しているし、太陽光線の吸収量も大きいので、夏は高温となり普通の植物では生育できなかった

ブトなどがそれに入る。

フジオトギリはオトギリソウに近縁のものであるが、それよりも丈が低く、高さ三十〜四十センチで叢生し、葉が細くてひ針型ないし線型を帯びた楕円形で、その長さは二〜四センチで先がややとがり、黒点が散在し、花柱は子房より長いという特徴をもつものである。

フジオトギリの分布は富士山地域のほか、三ツ峠、国師岳等からもその分布が報告されている。その主なる分布地は、富士山ならびにその周辺で、オトギリソウとの形質の差異が極めて微妙な相異にもとづくもの



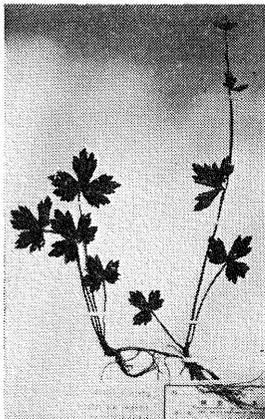
フジオトギリ (1200)

とも考えられる。

そのような場所に、適応変型して分布している植物は、火山性土壌において適応分化したものとみることができる。この分化の時間が、あまり経過していない場合には、このような植物は火山地域を中心にして割合に狭い分布のひろがり方をしているのが普通である。

分化してから長い時間を経過している場合には、近似のものとの交雑によって変化してしまいその指摘がむずかしくなる。このような火山性土壌の要素の代表的なものがフジザクラ(マメザクラ)である。

このほかにフジザクラ型に入るものとしては、前記してきたフジオトギリ、グンナイキンポウゲ、フジアカシヨウマ、ハコネコメツツジ、オオサワトリカ



グンナイキンポウゲ

である。

富士山の噴出が新しいだけに、このような土壌条件の場所で新しく分化したと思われるものは、その分化時期が新しくしかも短い期間しか経過していないだけに、フジオトギリはその母種と考えるオトギリソウからは、微妙な形質の相違によってしか区別できない。

このような点は、フジアカシウマ、ハコネコマツツジなどについてもおよそ同じようなことがいえる。

② トダイアカバナ型

日本列島の各地には、石灰岩からできあがっている地域がある。それは九州から本県の南アルプスにまでわたる中央構造線に沿う地域がその主体となる。それについてこの中央構造線にかつて接続していたものがフォッサ・マグナによって切断されたと考えられる本県の秩父側の地域と東北日本の北上山地などにも石灰岩地域がある。

いずれにしても、本県の場合は南アルプス北部白州町の大武川地区と秩父側の丹波山村の青岩・小袖両鍾乳洞付近に石灰岩の露頭や岩脈が見うけられる。



フジアカシウマ

前記した大武川地域（八〇〇頁）は、富士川の上流域にあたりここには石灰岩の著しい露頭がある。

石灰岩は水にとけると塩基性を示し、かたくて風化が行われにくく、たとえ風化した場合でも岩塊状となることが多い。したがって石灰岩地域は一般的には岩壁をなした裸地を形成し植物が侵入するにしても石灰岩の割れ目や、わずかな土壌上だけに限られている。特に斜面になった場所では水によって洗われるためにこの傾向が強い。



セイヨウタンポポ

石灰岩地域植物の研究については、すでに清水建美博士（一九六二〜一九六三）がくわしく報告をしているが、筆者はそれと違った独自の立場から石灰岩地域植物群をまとめている。

鳴沢村地域では石灰岩が見受けられないのでトダイアカバナについてはここではふれない。

（四） 帰化植物

久内清孝氏によると帰化植物とは、「何らかの人為的原因により渡来して分布を拡大、もしくは土着し、永続的もしくは、一時的に野生したものをいう。（一九四五）」と記しているが、どんな植物を帰化植物というかはむずかしい問題のよう

である。

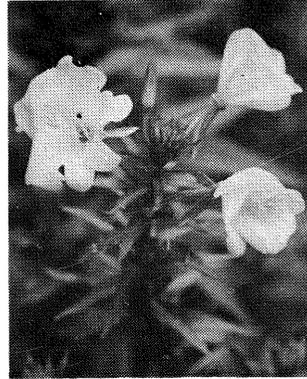
前川文夫博士によると、「内地への帰化植物の問題は、有史時代はもとより遠く石器時代にもあったと考えるべきである。」として、こうした有史以前に国外から入ってきた植物を史前帰化植物と呼んでいる（一九四三）。

ここでは主として、江戸時代もしくは、明治以降人為的に帰化してあたかも本来土着の植物であるがごとく野生しているものを帰化植物と呼ぶことにする。

この好例としては、アオユビ、アメリカアリタソウ、アメリカセンダングサ、アメリカフウロ、セイヨウタンポポ、アレチマツヨイグサ、ウマゴヤシ、オオイヌノフグリ、オオマツヨイグサ、オオニシキソウ、オニノゲシ、オランダミミナグサ、ゴウシユウアリタソウ、コニシキソウ、ソバカズラ、タチイヌノフグリ、ツメクサ、ノゲイトウ、ハキダメギク、ブタクサ、オオブタクサ、ヒメスイバ、ヒメムカシヨモギ、ヘラオオバコ、マメグンバイナズナ、ダ



オオマツヨイグサ (鳴沢村)



アレチマツヨイグサ (鳴沢村)

ンドボロギク、ベニバナボロギク、ハルジョオン、ムシトリナデシコ等々があり枚挙にいとまがない。

しかし、これらのものの多くは、一般的には低地に多いわけであるが、近ごろ各山岳に入る登山人口が急増したため、シロツメクサ、オオバコ、ヒメスイバやヒメジョン属等をはじめとする帰化植物が、各山岳の山麓や中腹から亜高山帯へかけて多数見られるようになってきた。

これらのものは、長い間にはその本来のものから変化してしまったり、あるいはずっと長い過去から分布している植物であると誤認されたりもやすい。

それだけにこうしたもののおおよその帰化年月日を記録しておくということが大切であると考えている。

(四) 各地域の植物

鳴沢村のフロラをいくつかの植物地域に区分することは、多少無理であるので、ここでは主だった地域の植物を出現する順に記してみる。

① 精進登山道付近

精進湖登山道の鳴沢村分のコース付近ではヒノキ、アカマツやミズナラのほかシロツメクサ、ヒメジョオン、ウツギ、ミズナラ、ヒロハツリバナ、オオバコ、クロモジ、シンガシラ、ホソエノウリハダカエデ、フジザクラ、ウリカエデ、リョウブ、コハウチワカエデ、コバノハナイカダ、ナンキンナナカマド、ツガ、ミツバアケビ、ノイバラ、



着生木の案内板

このほか、青木ヶ原では、リュウノウギク、ヤクシソウ、ノコンギク、フジセンニンソウ、アメリカセンダングサ、タマアジサイ、キンエノコロ、コオニユリ、ムラサキエノコロ、アキノキリンソウ、アケビ、ミツバアケビ、ツガのほか、ここではヒロハツリバナ、サルナシ、ウリカエデ、ホウノキ、ヒノキ、アカシデ、イヌシデ、サラシナシ

ヨウマ、ノリウツギ、ヤマウルシ、タラ、ミヤマガマズミ、ヤマブドウ、ミズキ、ナンテンハギ、ユウガギク、オトコヨウツメ、アセビ、コマユミ、イヌシデ、サルナシなどが見うけられた。

青木ヶ原を東西に横切る国道一三九号線はこのようにヒノキを主とする林であるが、途中に着生木もある。この親木はミズナラで、この一本の木に対してヒノキ、コバノトネリコ、ヒメコマツ、カスミザクラ、ソヨゴ、ヒロハツリバナ、ノコンギク、ホソエノアザミ、ナギナタコウジュなどの着生しているのが見うけられる。

しかし、この着生木は上九一色村との村境付近に存在するもので鳴沢村分というわけではない。

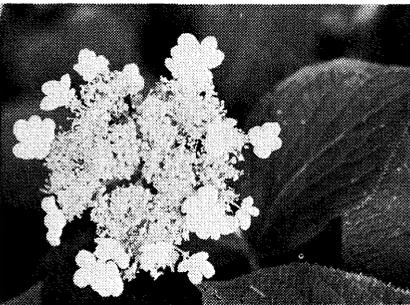
② 国道一三九号線沿い



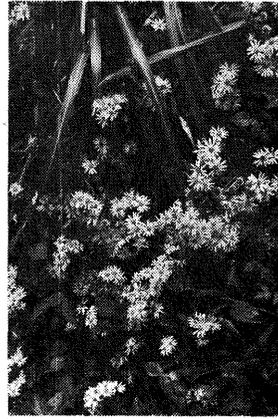
エゾタンポポ



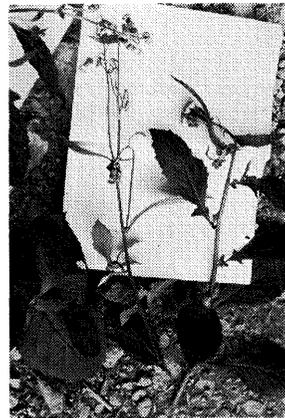
ヤマブラン



タマアジサイ



ノコンギク



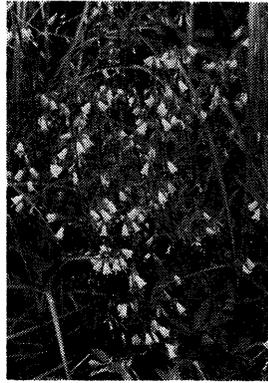
ベニバナボロギク

ここではツガ、ヒノキ、エンコウカエデ、カラマツ、クリ、ウツギ、マサキ、クロソヨゴ、ヒトツバカエデ、モミジ、ハグマ、カメバヒキオコシ、セイヨウノコギリソウ、ミヤマウラボシ、キンレイカ、マツムシソウ、オオバギボウ

ドリ、ミズナラなどが見られる。

③大室山付近

大室山付近の東側は鳴沢分に入る。ここではテリハノイバラ、カシワ、カラマツ、ホウノキ、オニウシノケグサ、ズミ、ニシキウツギ、フジサンシキウツギ、アカマツ、ヤブデマリ、モミ、ガマズミ(方言ヨシズ)アカソ、クリ、ススキ、カモガヤ、ウシノケグサ、イタドリ、キシヨウブ(逸出)、フランスギク、フジザクラ、フジイボタ、スズタ



ツリガネニンジン



オニユリ

シ、ミズナラ、シシウド、オヒョウ、チシマザクラ、レイジンソウ、ミツバツツジ、サラサドウダンツツジ、トチバニンジン、シヤクジョウソウ、ホツツジ、レンゲシヨウマ、ツガ、ヒノキ、ウスバサイシン、アセビ、ハクサンシヤクナゲ、ミヤマタタビ、シシガシラ、イヌヤマハツカ、ミツバツツジ、スギ、イモノキ、ネジキ、トウゴクミツバツツジ、ハウチワカエデ、キハギ、ヒメノガクヤス、ノコンギク、ツリガネニンジン、エゾタンポポ、ツガ林、サワラ、コミネカエデ、タチツボスミレ、マイズルソウ、ヒメマイズルソウ、イヌツゲ、ヒノキ、イワセソウ、アサノハカエデ、ウラゲハクサンシヤクナゲ、カクミノスノキ、ツルシキミ、カナムグラ、タマアジサイ、ベニバナボロギク、フジツリガネツツジ、クロソヨゴ、アカマツ、コナラ、ソヨゴ、ヒトツバカエデ、コミネカエデ、ヤマウルシ、アセビ、ヒメコ、イヌエンジュ、クマシラ、ダンコウバイ、ソヨゴ、イワイタチンダ、カスミザクラ、イタ

ケ、ヒメジョン、ヒメマイヅルソウ、ヒノキ、ヒロハツリバナ、ツガ、ヤブデマリ、ウリハダカエデ、アセビ、バツコヤナギ、ヒヨドリバナ、バライチゴ、クマイイチゴ、ミヤマアオダモ、コハウチワカエデ、コミネカエデ、アオハダ(方言ホシフジ)、ブナ(方言シロブナ)、イヌブナ(方言クロブナ)、ミズキ(方言ミズクサ)、イモノキ(方言イモツキ)、ミズメ(方言ミネバリ)、リョウブ(ギョウブ)、オオカメノキ(方言ヨスズ)、ウド、ホタルブクロ(方言ツリガネソウ)、ミヤマガマズミ(方言ヨスズ)、ミズナラ、モミジイチゴ、ミヤマベニシダ、ナンキンナナカマド(方言ライデン)、ツルシキミ(方言シキビ)、クロモジ(方言クロモジ)、クロソヨゴ(方言サカキ)、イモノキ、コシアブラ、コミネカエデ、イワデンダ、フジザクラ、ヒノキ、アセビ、イワセントウソウ、イワガラミ、キヌタソウ、スノキ(方言ナニハゼ、スイコキ)、ハナニガナなどが精進登山道の鳴沢分にはある。

大室山麓ではスズタケ、アカマツ、フジザクラ、オオバギボウシ、コブシ、ニシキウツギ、フサザクラ、カラマツ(植林)、大室山の山麓の北側には溶岩の露出している部分が見られる。このあたりではウツギ、フジサンベニウツギ、ミヤマガマズミ、タラノキ、フジイボタ、ホソバトリカブト、ミヤマクマワラビ、ミズヒキ、バイカウツギ、ミヤマエンレイソウ、ミヤマイタチシダ、などがあり、第二、第三の本栖風穴のある場所に出る。

このあたりではウツギ、オオカメノキ、ハンショウズル、トウキ、ヒメマイヅルソウ、ヒノキ、ミヤマアオダモ、クマシデ、ウスギヨウラクツツジ、ミヤマガマズミ、サワシバ、タニギキョウ、マイズルソウ、タチツボスミレ、アセビ、アクシバ、ツクバネソウ、ツルシキミ、キッコウハグマ、ベニバナイチヤクソウ、ムラサキハンショウズルなどがあり、やがて立派なブナ林のある場所となる。この林の中の植生としては、オオキヌタソウ、ギンリョウソウ、ヤマタイミンガサ、ツルアリドウシ、ツルシキミ、テバコモミジガサ、シコクスミレ、イワガラミ、サワグルミ、ブナ(目通り幹周約三呎)、タニギキョウ、オシダ、イヌガンソク、タケシマラン、ミヤマクロモジ、キヨタキンダ、ヤマタ



スズタケ

長尾山方面ではフジイバラ、エゾイボタ、キリンソウ、シモツケ、イタドリ、ジンヨウイチヤクソウ、ツバメオモト、ヒメノガリヤス、カニコウモリ、ミヤマワラビ、シラベ林、ヒメコマツ、アセビスズタケ、サビハナナカマド、イボタヒヨウタンボク、シロバナノヘビイチゴ、ギンリョウソウ、イワセントウソウ、マルバダケブキ、ミヤマウズラ、キソチドリ、ホザキイチヨウラン、カモメラン、ウラジロノキ、コフタバラン、アツモリソウ、ノビネチドリ、クモキリソウ、エゾスズラン、ギンラン、ササバギンラン、グンナイキンボウゲなどが目にとまる。

イミンガサ、ヤマボウシ、トウヒ、マユミ、スズタケ、フジイボタ、ウワミズザクラ、イタドリ、ヤマハタザオ、ヤマブドウ、ソヨゴ、クロソヨゴ、ミヤマベニシダ、ホソバトリカブト、ツガ、アセビ、アヤメ、サンショウバラ、アカマツなどが目立つた。

④ 国道一三九号線の西湖入口付近

アカマツ、リョウブ、ツガ、ミズキ、ムラサキツメクサ、コシアブラ、イタドリ、ミツバウツギ、リョウブ、ヒトツバカエデ、ミズナラ、ハリモミ、ヒロハツリバナ、ヒメヤブタバコ、ホソバコケシノブ、コウヤコケシノブ、ヤハズハンノキ、モミなどが見られる。

⑤ 片蓋山

片蓋山（かたふたやま）ではミヤマトリカブト、クリ、ミズキ、サワグルミ、カラマツ、アカマツ、ヒノキ、ガマズミ、アヤメ（多）、シラカンバ、キブシなどが目立つ。

⑥ 長尾山付近一四二四峠

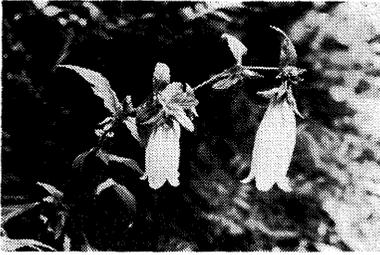
長尾山方面ではフジイバラ、エゾイボタ、キリンソウ、シモツケ、イタドリ、ジンヨウイチヤクソウ、ツバメオモト、ヒメノガリヤス、カニコウモリ、ミヤマワラビ、シラベ林、ヒメコマツ、アセビスズタケ、サビハナナカマド、イボタヒヨウタンボク、シロバナノヘビイチゴ、ギンリョウソウ、イワセントウソウ、マルバダケブキ、ミヤマウズラ、キソチドリ、ホザキイチヨウラン、カモメラン、ウラジロノキ、コフタバラン、アツモリソウ、ノビネチドリ、クモキリソウ、エゾスズラン、ギンラン、ササバギンラン、グンナイキンボウゲなどが目にとまる。

以上、鳴沢村を中心にした植物を芦川、精進湖、本栖湖、富士ヶ嶺の各地域にまで拡げてその植物についてふれてみた。ただし、この内容は、春夏秋冬の各季節について調査したので、文中に各地域が二重に報告されている場合もあるし、また、鳴沢村以外の隣接地植物にまで関連してふれてしまっている場合もあることをおことわりしておく。

⑦ 鳴沢村西部の魔王天神社付近

承和三年に開かれたというこの神社付近ではノブキ、ツリバナ、コクサギ、サラシナショウマ、イタドリ、クマワラビ、チョウジザクラ、スズタケ（方言、クマザサ）、テリハノイバラ、ヒノキ、モミ、ツガ、アキノキリンソウ、ホタルブクロなどがあり、その中でもこの付近にはモミの目通り三・五疋大のものが目にとまる。ヒノキでは二・四疋大のものを中心にして十本ほどの大木が見うけられる。

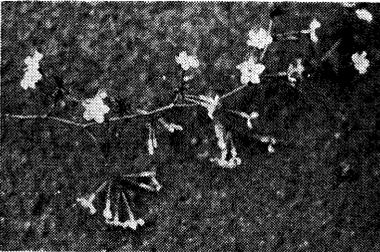
このほかエンレイソウ、ヤブレガサ、ヒナスマレなども見うけられる。



ホタルブクロ



フキ



チョウジザクラ



テリハノイバラ

⑧ 通玄寺（鳴沢部落）

水上（みずかみ）地区ではコヒガン（栽植）、フジザクラ、ミツバツツジなどが成沢山通玄寺付近に見うけられる。この寺は臨済宗妙心寺派であり寺の紋は九旺紋である。このほか周辺の植物では目通り二・一躰のイチイのほか栽培したものも多く、鉢植えのものも含めてここでは記してみる。ノキシノブ、ヒメノキシノブ、シラカンバ、アセビ、シキミ、チチブドウダン（栽植）などがある。特に鉢植えとして栽培しているものにイワシャジン（栽植）、フジゴヨウ、ツガ、キンロバイ（栽植）、イワヒバ、ナツツバキ、ニリンソウ、ホソバトリカブト、ウシハコベ、クサボタン、スギナ、タンポポ、イボタノキ、ツボスミレ、オオビランジ（栽植）、ヨウラクツツジ、ハウチワカエデ、イワチドリ（栽植）、ウチヨウラン、ヒメジヨウ、エビネ、エゾアオイスミレ、ミヤマカラマツ、キリンソウ、ニガイチゴ、コバナ

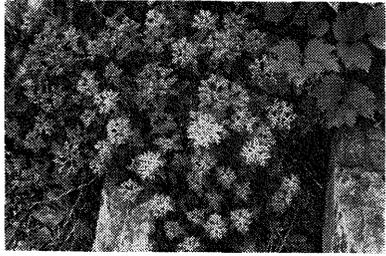
二八躰ほどの石段の上には小御岳権現がここにはあり、そこには目通り二・一躰に達するハリギリが見うけられる。



イタドリ



クマワラビ



キリンソウ



ニガイチゴ



ウシハコベ



ソバ (植栽)



クサボタン



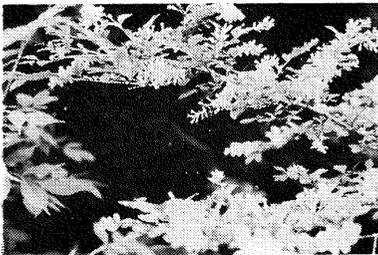
ヒイラギ



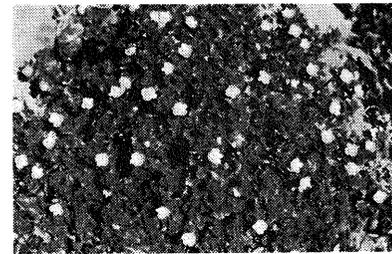
スギナとタンポポ



コバノガズミ



イボタノキ



オオイヌノフグリ

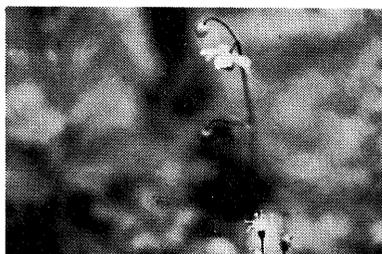
第三章 動植物



青木ヶ原のヒノキ林



ヒメジヨン



レンゲショウマ



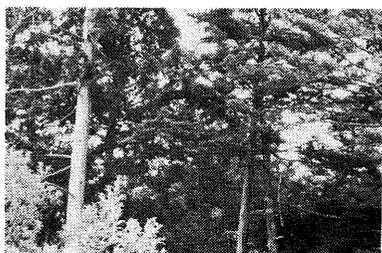
精進より青木ヶ原樹海を望む



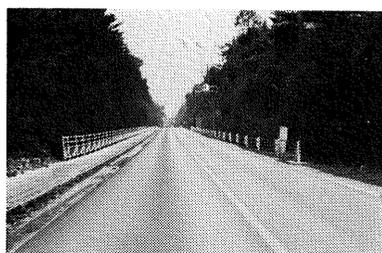
ウツギ



イヌシダ



ヒノキ林



青木ヶ原樹海



ツガ



レンゲシヨウマ



シャクジョウソウ

ガマズミ、イカリソウ、シュンラン、シロバナミツバツツジ、ウメモドキ、ソバ(栽植)、ヒイラギ(栽植)、ナツハゼ、ユキザサ、レンゲシヨウマ、イヌシヨウマ、イヌブナ、キブシ、ホウノキ、イヌシダ、ツリバナ、ツルマサキ、ヤブレガサ、マイヅルソウ、ヒメマイヅルソウ、モミジガサ、アカシヨウマやイチイ(目通り二〜三呎)、ケヤキ(目通り二〜四・五呎)の大木が目につく。また、ケヤキにはヤドリギが着生していた(一九八五)。

⑨春日神社(鳴沢部落)

この神社は足和田山の西南山麓に位置し、この祭神は天児屋根命(あめのこやねのみこと)で祭りは四月十五日である。

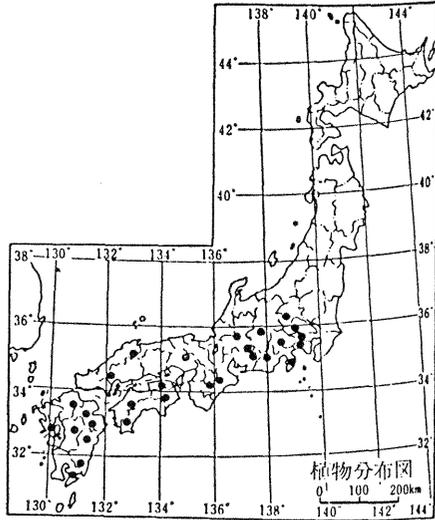
ここはこまかくは水上(みずかみ)地区であるが、源頼朝にかかわる伝説がある。

この境内林の中にはスギ(目通り二・四呎)、ヒノキ(目通り二・七呎)、モミ(目通り二・八呎)、ウバユリ、ヤマネ

地、耕作地の境界や防風林ともなり、また一面屋敷林となつていとも多い。
 この付近にはコデマリ、ヤマグルマ、レンギョウ、イチイ、バライチゴ、ヒメコマツ、ブナ、カンワ、オオモミジ、ヒノキ、モミなども見うけられる。

⑩八幡神社（大田和部落）

この神社は大田和部落の西側にあり、植物としてはコブシ、ヒノキ、スギ、オオモミジ、キササゲ（目通り九〇呎）、クロマツ（目通り二・四呎）や、トチノキなどがある。このトチノキは根回り三・五三呎、目通り二・七六呎、樹高二十五呎に達する割合に大きいものである。このほかタチツボスミレ、ヒナスミレ、トチバニンジン、ミズナラなども



シコクスミレの分布

コノメソウ、ツガ、ホツツジ、アケビ、ウメ（栽植）などが見られる。
 小林孝敏氏宅には目通り約四五呎ほどのシダレザクラが見られる。

⑩鳴沢村総合センター（鳴沢字境野）

この付近の各戸にはほとんどの家にイチイの栽植が見うけられ、この植物が元来鳴沢部落に自然分布していたものかどうかは栽植が多いだけで明確に記録することはむずかしい。
 多少の自然分布のあったものを寒気候や岩盤地域にも適応力のあるこのイチイが順に増殖され植樹するようになり現在にいたつたものとも考えられる。このイチイは現在では宅

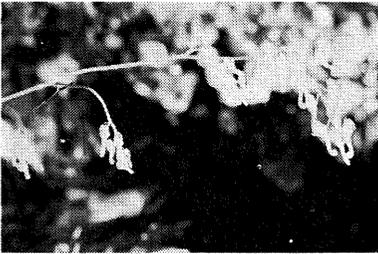
見うけられる。

⑫ 的場 (まとは大田和部落)

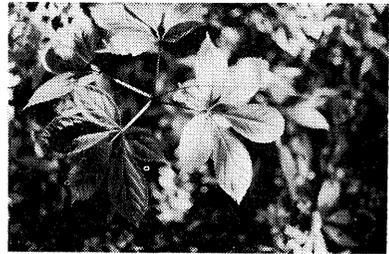
ここは新生代第三紀の御坂層の地域であるがこの付近では栽植したものも含めてレンギョウ(栽植)、コブシ、キスゲ、ケヤキ、ノコンギク、ヒノキ、フキ、カキドウシ、ナズナ、サラサドウダン、シシ



ミツバウツギ



レイジンソウ



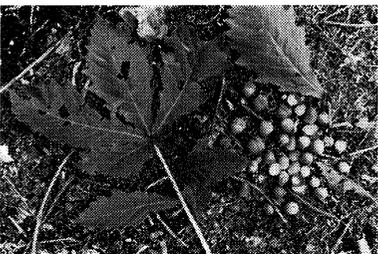
トチバニンジン



オオバギボウシ



サラサドウダンツツジ



ミズナラ



シシガシラ



精進湖より富士山を望む

ガシラ、ミツバウツギ、レイジンソウ、ヤマブキ、コナラ、ゲンノシヨウコ、オオバギボウシ、ハルシヨオン、アケビ、ケヤキ(約十本、目通り一・二〇畝大)などが見られる。

⑬ 大田和部落

鳴沢村大田和公民館のあたりでは赤花で八重のサトザクラの一種があり、これは目通りで一・五畝大の規模があり、その高さで二本の枝に分岐している。

渡辺寿美氏宅には目通り六〇坪ほどのチョウセンゴヨウがあり、その付近にはマメガキ(アマンドウ)の目通り四十五センチメートルほどのものが見られる。

⑭ 大嵐との境付近(大田和部落)

○鳴沢村の青木ヶ原溶岩流近くではミズナラ、ツガ、ヒノキ、モミ、クロモジ、ウグイスカグラ(ホウキ作りに使うという)、ツリバナ、モミジイチゴ、チゴユリ・タチツボスミレ、コバノガマズミ、アブラチャン、コゴメウツギ、ノダケ、ミツバアケビ、ヤマザクラ、カマツカ、フジザクラ、アケボノスミレ、ノジスミレ、ユキザサ、カラマツ(植林)、オオバコ、キンミズヒキ、クサボケ、ノイバラ、ススキ、ヨモギなどがある。

⑮ 三湖台付近(鳴沢部落)

三湖台からは精進、西湖、本栖の三湖がよくみえる。

三湖台から足和田山まではアカマツ、フジイバラ、ミズナラ、カラマツ、ヨモギ、キンミズヒキ、ノイバラ、ススキ、アケビ、マユミ、ノコンギク、アレチマツヨイグサ、イタドリ、クサボケ、チャケツイバラ、クリなどがある。

㉓ 紅葉合（一・一〇〇畝、鳴沢部落）

ここではアカマツ、コナラ、カナウツギ、マユミ、ミズキ、クサボケ、シシウド、フジザクラ、キブシ、バッコヤナギ、ススキ、ズミ、アケビ、イタドリ、イヌザクラ、ガマズミ、ヒカゲスゲ、エンレイソウ、アブラチャン、ツノハシバミ、ヤマザクラ、ウツギ、ヤマハンノキ、ヘビノボラズ、ミツバアケビ、シモツケ、タラ、ヘビノネコザ、アカマツ、ノイバラ、ヨモギなどがあり、ここは鳴沢区有地でもある。

㉔ 国道一三九号線ガード付近（鳴沢地区）

この付近ではヒメコマツ、ヒノキ、ツガ、ソヨゴ、クロソヨゴ、ヒロハツリバナなどが見られる。

㉕ 緑の休暇村付近（鳴沢地区）

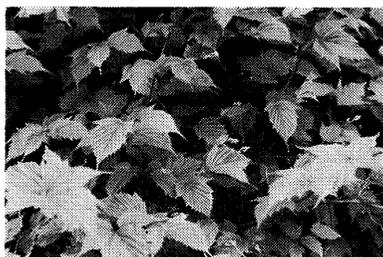
緑の休暇村付近ではアセビ、コケモモ（残存植物）、アセビ、ソヨゴ、ナガハグサ、アカマツ、カモガヤ、セイヨウタンポポ、イタドリ、ヒメジョオン、ミツバツツジ、フジザクラなどが見うけられる。

(六) 鳴沢村で注目すべき植物

鳴沢村において、その分布、形質等の点からみて注目すべき植物を以下紹介しておきたい。

① フジザクラ (*Prunus incisa* Thunb.) (バラ科)

フジザクラはもう一つの呼び名をマメザクラともいう。フジザクラという名称は本県の富士山に多いところから、マメザクラというのはマメのように小型のサクラであると



カナウツキ



シシウド



フジザクラ

ころからきたものである。

学名ではプルヌス・インキサ・ツンベルグ「プルヌス」はサクラ属を示し、「インキサ」はきれこみの意味で、葉のふちにのこぎりの歯のようなぎざぎざ、つまり鋸歯(ぎょし)が著しいことを示し、「ツンベルグ」はこの植物の命名者であるツンベルグという植物学者名を記録していることになる。

このツンベルグはカール・ベーター・ツンベルグのことである。

彼は博物学者で安永五年(一七七六)に江戸にやってきた人で植物分類学者であったリンネの高弟で、スウェーデンのウプサラ大学の教授となった人である。ツンベルグは寛政五年(一七九四)に『日本植物誌』を著しており、その中にこのフジザクラは公表

されている。

これの分布はご承知のように富士山麓の塩基性の溶岩上に旺盛な適応分布をしているもので「山梨県の花」に指定されている。

この制定は昭和二十九年三月二十二日で、NHK甲府放送局開局二十九周年記念事業として、県民による投票によってその選を競った結果、「山梨県の花」として全国に発表されたものである。

フジザクラは背の低いものは、わずか二〇〜三〇センチぐらいでもやさしい小型の白花を下向きにつけ、そのやさしい風情は県民に親しまれている。

フジザクラの発生過程をしいて推量してみると、葉の鋸歯や花の形質からして、高山に多いタカネザクラに近縁のものからの富士山ろくをはじめとする火山地域における新しい分化のように思える。フジザクラのような分化過程を

たどつたと思われるものには、フジオトギリ、フジアカシヨウマをはじめとするものがある。

フジザクラ群落で国指定天然記念物になっているものには富士吉田登山道の中の茶屋から大石茶屋の間のものがあ
り、これはレンゲツツジと混生していて、昭和三年三月三日に国の天然記念物として指定されたものである。

(2) フジオトギリ (*Hypericum fujiense*(Makino)Makino) (オトギリソウ科)

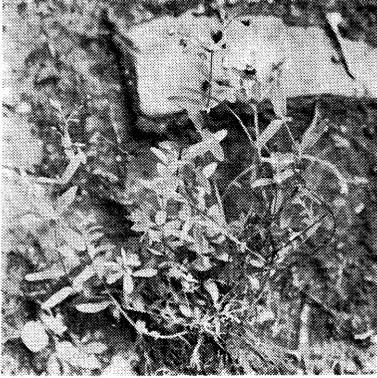
黄色く直径約二センチばかりの五弁花を開く、全草無毛の多年草で、高山や亜高山か温帯林のへりなどの日当たりのよい所に生える。花卉には、黒い透明の線がまじり、多数の雄しべと一個の雌しべがあり、花柱は五本にわかれ、子房よりわずかに長い。がく片はせまい長楕円形で、黒点と黒線がある。花は茎の先の方が少し枝分かれして数個咲く。葉は細長い楕円形で、長さ一・五〜三センチで柄がなく、半ば茎を抱き、黒点だけがある。茎は円く、根株から叢生し、高さ二〇〜三〇センチ、大きな株となるものである。

(3) フジベニウツギ (*Weigela fujiensis*(Makino)Nakai) (スイカズラ科)

ニシキウツギに似ているが、葉がやや細長くとり、葉の柄が短く、長さ一五ミリ、一見、柄がないように見える。花の色がさまざまあつて、はじめから濃い紅色のものが基本種で、はじめから淡紅色のフジベニウツギをはじめ白色、後に紅色に変わるフジニシキウツギ、白色で変化しないフジクリームウツギなどが区別される。

花期は五〜六月で分布は本州(丹沢山塊、富士周辺)である。

備考 株によって花の色に濃淡があるためサンシキウツギと名付けられたもの



フジオトギリ

頭花は筒形の花がたくさん集まった
もので紅紫色を帯び美しく、総苞が平
たい球形で幅七〜八センチ、総苞片が瓦状
にならんでそりかえり、約十列、内片
は先がとがり、外片及び中片は長楕円
形で幅六〜九ミリ、先がまがり、へりに
小さな針が列になって生え、毛がなく
革質で紫色をおびる。花冠は五裂し、

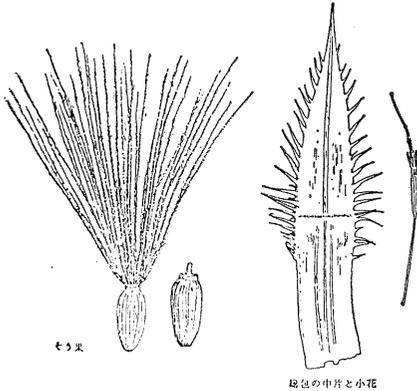


サンシキウツギ

である。

(4) フジアザミ (*Cirsium purpuratum* (Makino) Matsum.) (バラ科)

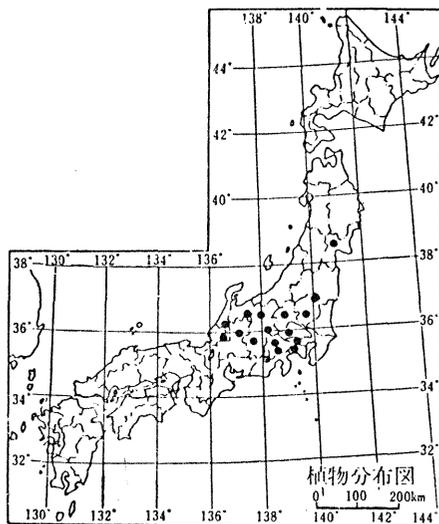
日本列島には約五十種の自生のアザミが分布するが、フジアザミはその中でも最も大きな花が咲く種類で、頭花の直径が九センチぐらいにまでなる。富士山に多いためフジアザミの名があるが、一八七四年(明治七年)に帝政ロシアの植物学者マキンモウィッチ (Maximowicz) が富士山の標本で記載命名したもので、関東地方及び中部地方の山中に生え、特に富士山ではヤマゴボウ、スバシリゴボウ、アザミゴボウ、フジゴボウなどと呼び、根を掘り取り、皮をはいたりしてきんぴらとして食べる。



フジアザミの果実



フジアザミ



フジアザミの分布

管形で長さ二十九〜三〇ミ、その果は狭く長さ四ミ、幅一・五ミばかり、冠毛はよごれた褐色で長さ二五〜二五〇ミ、もとの方が輪になって合一する。頭花は、柄、茎及び枝の頂に一個ずつ下向きに咲く。茎の上部の葉は次第に大きく柄がななく、半ば茎を抱きまたは、根生葉は大形で枝が長く、狭い楕円形羽状に中ほどまでさけ、幅三十センチ及び長さ三〜六センチの針があつて、両面に白いくも毛をかぶり、無毛となる。

茎は、高さ一拵以上になり、太くたて溝があつて白いくも毛をかぶり枝分かれして、茎部に葉を密に互生し、花時も根生葉が生きている。根が太くて、長くしかも深く砂れきの中に入っている。白花品をシロバナフジアザミと呼びこれは富

士山、箆坂峠、夜叉神峠などに目立つ。

花期八〜十月で分布は本州（宮城県以南、中部日本に多く加賀の白山周辺が分布の西限）の特産。似た種類にサワアザミがある。

(5) ウラジロヨウラク (*Menzieia multiflora* Makino) (ツツジ科)

白質に口の辺が紅紫色をおびる鐘形の花が垂れて咲く落葉低木、花冠は狭い鐘形で長さ一一・五センチ、先が少しせびまり、浅く五裂して雄しべが十本あり、花糸の下半分には長い開出する白い毛が密生し、花柱がまっすぐで一本、子房にはまばらに腺毛がある。がくは深く五裂し、裂片は線形で、長さ四〜八ミ、へりには腺毛がある。果実は直立

し、卵円形で長さ約五ミ、頂には一彗ばかりの枯れた花柱がついている。花序には短い軸があつて、長さ二〜三ミの細長い腺毛が密生し、柄がある花を傘形につける。前年伸びた枝の頂に花芽をつくり、葉芽はそのまわりに一〜三個あつて、小さい。葉は枝先に集まつて互生し、さかさ卵形、または、さかさ卵状の楕円形で長さ三〜五彗、裏面の表面やへりに荒い毛があつて、主脈上には伏せた長さ二ミばかりの平たいまばらな毛がある。輪生状に小枝を分かち、高さ二釐ぐらいになる。変異が著しく、特にがく裂片は短い。葉の形は楕円形または半円形で、がく片は長さ一〜三ミのものをツリガネツツジ（アズマツリガネツツジ）と呼び、また、花冠の紫色が濃く、がくの裂片が短く、へりや花の柄、葉の表面に腺にならない長い毛が密生する型をムラサキツリガネツツジと呼び、箱根山に産する。また、葉の表面に全く毛のない型が富士山を中心に見かけるが、これをフジツリガネツツジと呼んで区別する。

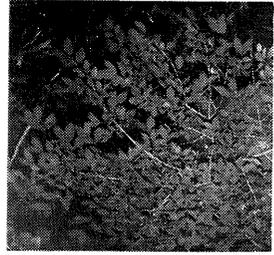
その他、花が黄色いキバナツリガネツツジがある。花期は五〜六月で分布は北海道、本州（ウラジロヨウラクは東北地方から中部地方まで、ツリガネツツジは東北地方の南部から近畿地方まで）である。

似た種類に花冠が四裂し、雄しべが八本あるゴヨウザンヨウラク及び九州産のヨウラクツツジ、ウスギヨウラクがある。

(6) **イホヒヨウタンボク** (*Lonicera demissa* Rehd.) (スイカズラ科)

淡黄色で長さ一三ミばかりの二唇形の花が二個並んでその年に伸びた枝の葉えぎに咲く落葉低木で、深山の樹林のへりに生える。

花冠は外面にやや長い毛があつて上唇が浅く四裂し、下方の一片は広い線形で長さ七ミリ前後、雄しべは花冠より少し短く、花糸の下部には花枝と共に短毛があつて、筒部が短く、長さ約三ミ、下方がふくれる。子房は双生し、腺点がある。小包は卵状円形で離生し、ほぼ子房と同長、包は線形で子房より二〜三倍長く、小包とともに長毛を密



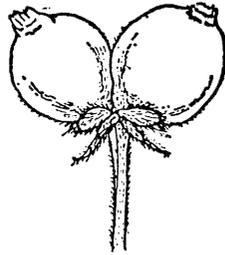
イボタヒョウタンボク

生する。花の柄は長さ一〜一・五疋、短毛と腺とがある。果実は双生し紅色に熟す。葉は柄が短く、狭いさかさ卵形で長さ二〜三疋、幅七〜一二ミ、先がにぶくとがり、もとの方がくさび形で、両面に伏せた短毛がやや密生し、裏面が多少白っぽい、脈の上に、開出する長毛が密生する。枝が細く密に枝分かれして繁り、高さ二疋ぐらいになる。

花期五〜六月、分布、本州中部(秩父から山梨、長野両県、大井川上流)の特産、

北上山系に分布する変種キタカミヒョウタンボク var. borealis Har& M. Kitchi は、葉の長さ三〜八疋、花冠の長さ一疋〜一・六疋ある。

似た種類に葉だけの場合は岩手県に産するヤブヒョウタンボク *L. linderitoides* Maxim. (花冠は紅紫色で五裂して唇形とならず雄しべが花外につき出て長さ十リ前後、タイプ標本は早池峰山産) に近く、その変種とも考えられている。高山帯に生えるコゴメヒョウタンボク var. *konoi* (Makino) Okuyama は八ヶ岳、立科山及び赤石山系に分布する。



果実

イボタヒョウタンボクの果実

(7) ヒメマイズルソウ *Maianthemum bifolium* (L.) F. W. Schrn. (ユリ科)

マイズルソウによく似ているが、葉がふつう、やや長目であって、葉縁の細胞がゆがんだ三角状の卵形または、やや毛状に長く、花の柄が糸状で細く、葉の裏面、花軸などに柱状の毛が散生する。深山の針葉樹林の下に生え富士山に目立つ。

(8) シロクスミレ (*Vioxa shikokiana* Makino (別名) ハコネスミレ) (スミレ科)



ショクスミレ



マイズルソウ

白色で唇弁に紫のすじがある無茎の多年草で、深山の樹林の下に生える。花弁は幅が狭く、側弁に毛がなく、距は円く極めて短く、長さ二〜三ミに過ぎない。花は葉より高い長い柄があつて普通一株に一花をつけ、根茎の頂から一〜二葉をのぼし、広い卵形で長さ二〜四葉、裏面の脈の上に毛が散生する。根茎がやや太く、細い地下茎が長く地中をはつて繁殖する。花期は四〜五月で分布は本州(関東地方の西南部から西)、四国、九州の特産。

似た種類としては、コミヤマスミレ、ヒメヤマスミレ、ヒメスミレサイシンなどがある。和名はそれぞれ最初の発見地、四国(高知県)及び箱根を記念した名で、はじめ別々の種類と考えられていたが、後に同一種であることがわかつた稀品である。

(9) **キスミレ**(別名⁽¹⁾いぢげきすみれ (*Viola orientalis* (Maxim.) Beck.) (スミレ科) 黄色い花が咲く多年草で、花弁は長さ一・三〜一・五葉、側弁に毛があつて、距が短く、さく果には毛がない。根生葉は長い柄があるが、茎の上部の葉が短く、普通三枚で、やや接近し、または一枚だけ離れてつく心臟状の卵形で、幅三〜四葉、茎は直立し高さ一葉〜一・五葉、葉や花の柄と共に紫色をおび、根茎は直立する。花期は四〜五月で、世界的分布は日本及び朝鮮半島、中国大陸にわたる大陸系の植物で、日本では産地がまれである。富士ヶ嶺を中心にした富士山麓にはこれが見られる。

似た種類としてのキバナノコバノツメは側弁に毛がある高山植物である。オオバキスミレは葉が大きく幅五〜一〇葉、北海道から本州の中部までの高山(北地では山麓など)に

生じ根茎がはう。その他、北海道の高山には葉が腎臓形で先が広く凹み、縁が深く切れこむシンヨウキスミレを産する。

(10) ヒナスミレ (*Viola takedana* Makino) (スミレ科)

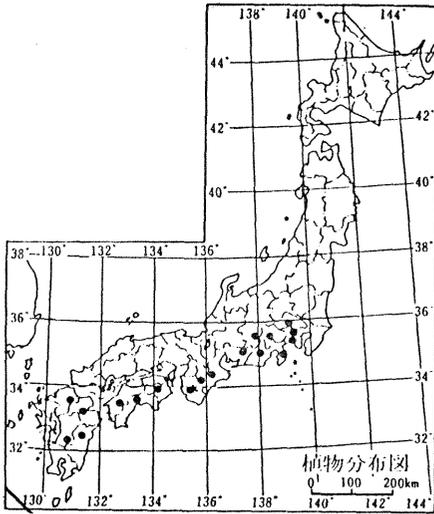
桜色の美しい花をつけるスミレで富士山麓に多い。花弁は長さ一三〜一五ミ、側弁には普通毛がなく、距は円筒形で長さ七ミ、さく果は長さ七〜八ミで毛がない。葉は細長い卵形で花の頃のものは長さ三〜六ミ、質がやや厚く、表面は淡緑色で裏面は紫色を帯びる。

フジスミレの一型とする見解がある。表面に美しい白斑が出るものをフィリヒナスミレと呼んで区別する。花期は四〜五月、分布は北海道から九州までである。似た種類のフジスミレは関東地方の北部に産し、葉は卵形で葉面の白斑が美しい。富士山に見られる。

(11) テバコモミジガサ (*Cacalia tebakaensis* (Makino)

Makino) (キク科)

筒状花からできた頭花が円錐花序に集まって咲く多年草で、山中のやや湿った樹木の下に生える。総包は筒形で五〜六個の小花を囲み、長さ六ミ、幅三ミばかり、狭い長楕円形で先がにぶくとがり、さく果は長さ約五ミ、頂に長さ五ミばかりの白い冠をもつ頭花には長さ一〜二ミの柄があつて、やや横向きに咲き、上部の葉は柄が短く、深く三〜五裂し、中部のものは手の平状に深く五〜七裂し、裂片は長楕円形で上半部に切れこみ状のあらいきよ歯がある。また、裏面の脈が著し



テバコモミジガサの分布



テバコモミジガサ



イヌブナ

し、雌花の柄はやや短く、新しい枝の葉えきにつき、果実は軟らかなとげがある。広い卵形のかくと（殻斗）に包まれ、熟して四裂し、三稜がある。長さ一五ミリのくりり色の果実が普通二個ずつ入っている。葉は互生し短枝では枝先に三枝前後やや接近してつき、柄が短く少し毛があり、うすい革質のゆがんだ卵形または菱状楕円形で長さ五〜八センチ、へりに波形のにぶいきよ歯があり、はじめ両面に長い毛があるが後に表面は滑らかとなり裏面の脈の上に少し毛が残り、側脈は七〜十一対ある。枝がよく茂り、樹皮は滑らかで灰白色をおび、白ブナの別名がある。幹は直立し高さ三〇センチ、直径一・五センチ以上になる。花期は四〜五月で果実は秋に熟す。分布は北海道の南部、本州、四国、九州の特産である。

似た種類にイヌブナがある。これの樹皮は暗灰色、葉は裏面に長い絹毛が多く側脈は一〇〜一四対、果実の柄が細

く、乾けば網状の脈まではっきりする。茎は高さ八センチなり、直立し白色の細長い地下茎をひいて繁殖する。花期は八〜十月で分布は本州（関東地方）である。大室山に多い。

(12) ブナ（別名シロブナ、ホンブナ、ソバグリ）

(*Fagus crenata* Bl.) (ブナ科)

深山に生える落葉高木で果実は食べられる。日本列島においては、用途が広い重要林木の一つである。雌雄同株で、雄花の穂は黄色で短い柄があつて、新しい枝の下方の葉えきから垂れさがり、かくは鐘形で浅く四〜八裂

長く三〜四疋あり、ブナより低い山地に生える。表日本のブナは葉が小型ゆえにコバブナとも呼ぶ。

(13) ヒメシヤラ (別名) サルナメリ (*Stewartia monadelphpha* Sieb. & Zucc.) (ツバキ科)

白い径二・五疋ばかりの五弁花が咲く落葉高木、花弁はさかさ卵形で長さ一・五疋、へりにぎざぎざがあつて、裏面には絹毛が密生し、多数の雄しべと柱頭が五裂する花柱があり、子房には白くて長い毛を密生し、かくは五片あつて卵形で、長さ約五ミ、果実は円く一疋ばかりくちばし状で五稜があり、種子はさかさ卵形で長さ約五ミ、狭い翼がある。

花の下に著しい緑色の二枚の包があつて、かく片より長く一〜一・五疋、花はその年伸びた枝の下方の葉えきから出て、柄の長さ一〜二疋、葉は卵状の楕円形で長さ四〜六疋、幅二〜三疋、先が鋭くとがり、へりには低いきよ歯がある。

裏面の脈えきの白い毛が著しい。枝が赤かつ色をおび、細くよく枝分かれし、木のはだがなめらかで赤黄色をおびている。高さ二〇疋以上になる。花期は六〜八月で、分布は本州(関東地方から西)四国、九州、済州島である。

似た種類のヒコサンヒメシヤラは花が大きく径三・五〜四疋、かく片は長さ約一五ミ、子房や果実は無毛。

(14) クロソヨコ (別名) ウシカバ (*Ilex Sagerokii* Maxim. var. *longipedunculata* (Maxim.) Makino) (モチノキ科)

白色の径五ミばかりの四〜五弁の花が咲くアカミノイヌツゲに似た常緑の小高木で、本州から西の山地に生え富士山麓青木ヶ原に多い。雌雄の株がちがい、雄花は三個ばかり集まって咲くが、雌花は一個で長さ二〜三疋の柄があり、果実は球形で径七ミばかり、柄がたれる。葉は革質の卵形楕円形にとがり長さ三〜四疋、幅二疋前後、上半部のへりには少数のきよ歯があつて、基部が円く表面に光沢がある。長さ五疋ばかりの柄がある。枝が細く密に枝分かれして、高さ四疋ぐらいになる。花期は六〜七月、分布は本州(東海地方より西)四国、九州である。

(16) ウラジロモミ (別名) ダケモミ、ニッコウモミ (Abies homolepis sieb. et Zucc.) (ツツ科)

青紫色の長楕円状柱形の球果が上向きにつくモミに似た常緑の高木で、一〇〇〇〜二〇〇〇呎の高山に生える。球果は柄がなく長さ八〜十二寸、径四寸、りん片は扇形で幅二〜二・五寸、包りんはややくさび形で先端は凸形をなし、へりに細かいきよ歯があつて長さ約一寸、外からはりん片にかくれて見えない。種子はくさび形で先端は凸形をなし、へりに細かにきよ歯があつて、長さ約一寸、外からはりん片にかくれて見えない。種子はくさび形で長さ八寸ばかり、葉は線形で長さ一・五〜二・五寸、幅二寸前後、裏面には白色をした二条の気孔帯があつて、球果をつける枝の葉は先が丸いか、少し若木のもののは先がとがる。冬芽は円錐形で樹脂をかぶり、若枝には毛がなく光沢があり、横枝が太く水平に開出し、樹冠は卵状となる。樹皮は灰かつ色を帯び、りん片状にさけ、高さ三〇呎、直径一呎、とぎに二層に及ぶ大木がある。

花期は五〜六月で(種子は十月に熟す)分布は本州(中部)および四国(高山)の特産である。似た種類にモミ、シラベなどがある。

(17) ハリモミ (別名) バラモミ、トラノオモミ Picea polita (Sieb. et Zucc.) Garr. (ツツ科)

緑色で後にかつ色に成熟する長さ七〜一二寸、径三・五寸の卵状楕円形の球果が枝先にたれる常緑の高木で、高度八〇〇〜一六〇〇呎の山中に生える。球果は柄がなく、りん片はさかさ卵状円形で長さ二寸、幅一・七寸あまり、密に瓦状にかさなり、先端部が反曲しない。種子は黒かつ色で長さ六寸、翼は長さ一三〜一五寸、種子の片面につく。葉は太い針状でかたく、ややわん曲し、先が鋭くとがり、長さ二寸前後、幅二〜二・五寸、断面は四角形で四面に気孔帯がある。一年生の枝は太く、黄かつ色をおび光沢があり毛がなく、冬芽は円錐形で樹脂におおわれ、著しくねばる。



マツハダ

枝がやや水平に開出し、円錐形と鐘形の樹冠をつくる。樹皮は灰かっ色で薄く、りん片状にはげ、幹は直立し高さ三〇呎直径一呎ぐらいになる。花期は六月（球果は十月に熟す）で分布は本州（東北地方の南部から西）、四国、九州の特産。富士山麓山中のハリモミの純林はその規模が大きいことで有名である。

ハリモミに似た種類にヒメバラモミ、マツハダ、ヤツガタケトウヒ、ヒメマツハダ、エゾマツ、トウヒ、マツハダ、シラネマツハダ、アカエゾマツなどがある。青木ヶ原にもハリモミが多い。

注目すべき植物としては、ムラサキモメンヅル、フジハタザオ、アオキガハラウサギシダ、フジテンニンソウ、タカネヨモギ、フガクスズムシソウ、グンナイキンポウゲ、フカギレホタルブクロなどについてもふれるべきであるが、それはまたの機会にゆずることとする。なお、この報告文作成にあたっては、奥山春季先生のご著書を利用させていただいたことを、末尾ながら記して感謝の意を表しておきたいと思う。

（植松 春雄）

第二節 鳴沢村のきのこ

はじめに

鳴沢村は北の足和田山から、南は雄大な富士山までの広い地域に位置するので、まさに日本のきのこの宝庫といわれている。だが日本では、きのこに関する研究が他の部門よりはだいぶ遅れているため、まだ和名のないものもたく

さんある。

このきのこは、いま健康食品として、私たちの食生活に深くかわりあいを持っているが、毒きのこで中毒する例も多くある。これらはちよつとした見分け方をおぼえることにより大半は防げるはずである。現在日本で知られている毒きのこは、三十数種類であるが、そのうち生命にかかわるような種は十種類余りである。最近はこの図鑑もたくさん書店にでているので、一家に一冊はそなえておきたいものである。

本文のリストは日本菌学会が富士北麓で、昭和五十六年十月六日と、同五十七年九月十七日の二回にわたり調査したものを主にしてあるが、調査の季節や場所を変えるとまだまだくさんの種類が見つかると思う。

本文を書くに当たり山梨県林業技術センター試験研究部の柴田尚氏には、特に貴重な資料やご助言をいただいた。和名や分類などについては、元日本菌学会会長の今関六也先生に大変ご多忙のところ、お目を通してアドバイスをいただいた。

鳴沢村産高等菌類（きのこ）

富士山の森林は、標高一千呎前後のアカマツ林、一千四百呎前後のシラカバ・ブナ林、二千呎前後のシラベ・コムツガ・カラマツ林、二千三百呎前後のカラマツ・ダケカンバ林に代表されている。これらの樹木の影響をうけて、そこに発生する高等菌類、いわゆるきのこの種類も豊富である。以下、村内でみられる主なきのこを発生地の樹種別に挙げる。

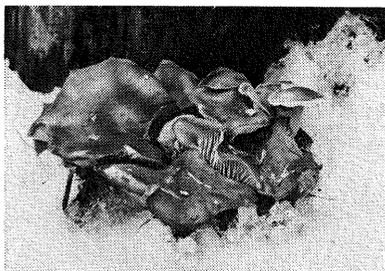
アカマツ林・オオサクラシメジ・ドクツルタケ・キシメジ・マツタケ・アイシメジ・キアブラシメジ・カワリハツ・ドクベニタケ・シロハツ・クロハツ・ハツタケ・ツチカブリモドキ・キチチタケ・オウギタケ・アミタケ・ウスタケなど。



モエギダケ



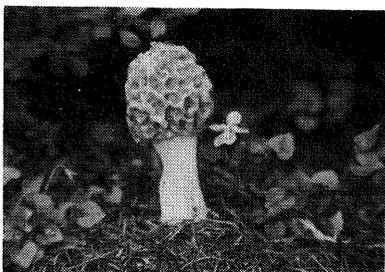
マツダケ



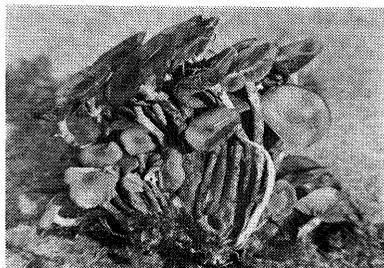
エノキダケ



チャナメツムタケ



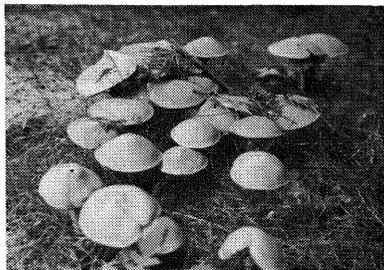
アミガサダケ



ナラタケ



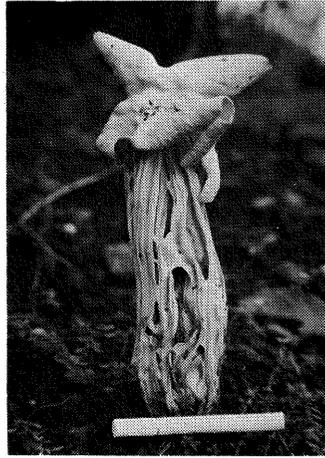
オオモミタケ



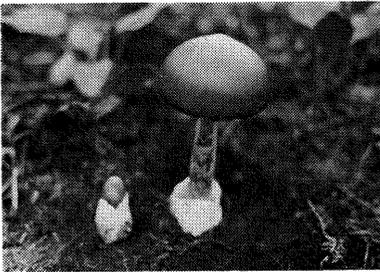
コガネタケ



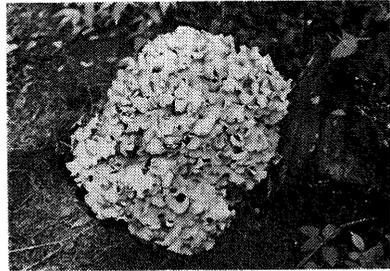
ササクレヒトヨタケ



ノボリリュウ



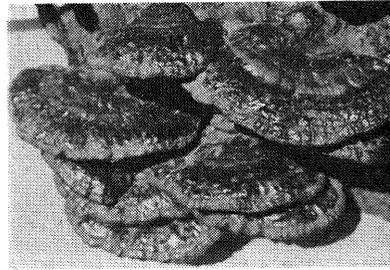
タマゴタケ



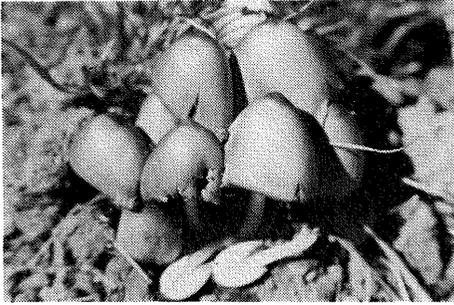
ハナビラタケ



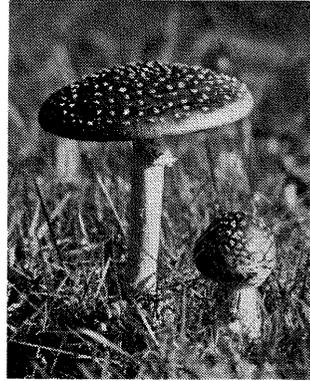
キイロスッポンダケ



ツガノマンネンダケ



ヒトヨタケ



ベニテングタケ

シラカバ林・ベニテングタケ・ヤマイグチなど。

ブナ林・ドクツルタケ・ツキヨタケ・ムキタケ・クリタケ・ニガクリタケ・ナメコ・ヌメリスギタケ・ツチカブリ・ヤマドリタケ・ヤマブシタケ・ブナハリタケなど。

シラベ林・ドクツルタケ・ベニテングタケ・アイシメジ・ヌメリササタケ・シヨウゲンジ・コゲイロハツタケ・カワリハツ・ドクベニタケ・チンオハツ・キチチタケ・カラマツベニハナイグチ・ウスタケ・フジウスタケ・ホウキタケなど。

カラマツ林・キヌメリガサ・オトメノカサ・ホテイシメジ・カラマツベニハナイグチ・アミハナイグチ・ハナイグチ・シロヌメリイグチ・カラマツチチタケなど。

ダケカンバ林・ヤマイグチ・カンバタケなどである。

村内でみられる主な毒きのこ

村内で多くみられる毒きのこは、カキシメジ・ツキヨタケ・ニガクリタケ・ドクツルタケなどである。これら以外にもハナホウキタケ・クサウラベニタケ・ベニテングタケ・テングタケなども比較的発生量が多い。また、フジウスタケのように、人によっては中毒を起こすきのこや、ホテイシメジ(地方名・ちょこたけ)・ヒトヨタケなどのようにアルコール類と一

緒に食べると中毒症状のみられるきのこもある。次に主な毒きのこを紹介する。

カキシメジ・秋にブナ林、雑木林、松の交じった雑木林などの林内地上に群生する。食用のチャナメツムタケ（地方名くりたけ、こみつかぶりなどと呼んでいる）と誤食される場合が多く、富士北麓地域での中毒例は多い。

両者を区別する要点は、カキシメジのヒダは白色で、古くなると褐色のシミがでるのに対し、チャナメツムタケのヒダは若いうちは白色だが、古くなると全体が一様に黄土色になる点である。カキシメジの中毒症状は激しい下痢とおう吐、腹痛・悪寒・脱力感などで、これらの症状が人によって数日間続くこともある。

ツキヨタケ・（地方名ひかり）は夏から秋にかけて主にブナの倒木や立ち枯れに、重なりあつて群生する。食用のムキタケ（地方名・かわふき・かわむぎ）に似ているが、見分け方は裂いてみれば、茎のつけ根に黒紫色のシミがある。これが他のきのこにはない一番の特徴である。また、夜にはヒダが光るので、地方名でひかりといわれている。中毒症状は激しいおう吐・下痢・腹痛・ときには幻覚症状もある。



ツキヨタケ

ニガクリタケ・晩春から秋にかけて各種の倒木や切り株上に群生する。食用のクリタケに似ているが、一切れをかんでみると、とてもにがいのですぐわかる。どんな毒きのこでも、これくらいなら全然毒にはならない。このきのこの毒性は猛毒で、激しいおう吐や下痢、悪寒、けいれんなどを併発、重症では死亡例もある。

ドクツルタケ・夏から秋雑木林や各種針葉樹林内の地上に発生する。これも猛毒で、色は白色で表面は絹のような光沢があり、根元にはやはり白いツボがあり、また、茎にもツボがある。テングタケ

第三章 動植物

の仲間でこのようなきのこは絶対に食べないことである。中毒症状は、食後四〜八時間ではじまり、激しい下痢やお
う吐のあと脱水症状になり、やがて死亡する。
きのこの地方名

和名	地名	方名	名
アカモミタケ	あかはつたけ、はつたけ		
アミガサタケ	みそぬすつと、みそたおし		
アミタケ	もし、あみじこう		
アミハナイグチ	からまつじこう		
イスマラサキシメジ	むらさきしめじ		
ウスタケ	らっぱたけ		
ウラベニホテイシメジ	だいこくしめじ、うすずみ		
エノキタケ	ゆきわり		
エブリコ	いぶぎこ		
オオサクラシメジ	みねごし、さくらじこう		
オオツガタケ	あぶらぼう		
オオモミタケ	さまつ		
カノシタ	ぬのびき		
カワラタケ	さるたけ		
キシメジ	きんしめじ、きいしめじ		
キツネノチャブクロ	ほこり、きつねのちゃんぶくろ、きつねのだんご		
キハツダケ	はつたけ		
キシメリガサ	こんきたけ、からまつたけ、からまつしめじ、ごみつかぶり		
クリタケ	あかんぼう、やまどり		

クロカワ
シモフリシメジ
シヨウゲンジ
シロハツ
シロヌメリガサ
タヌキノチャブクロ
チチアワタケ
チャナメツムタケ
ツキヨダケ
ツバアブラシメジ
ツチグリ
ナラタケ
ヌメリイグチ
ヌメリササタケ
ヌメリスギタケ
ハツタケ
ハナイグチ
ハナピラタケ
ヒラタケ
ブナハリタケ
ホウキタケ
ホテイシメジ
マスタケ
ムキタケ

くろっと、ゆのはな
しもっぷり
しろんぼう、おおつが、こむそう
ぬのびき
からまつじこう、しろじこう
たぬきのちゃんぶくろ、ほこり
あみじこう、うらむき
くりたけ、ごみつかぶり、いっぽんくりたけ
ひかり、くまべら
ぬめりんぼう、あめんぼう
きつねのだんご
あしなが、つつえ、つつい、つちい
じこうぼう、あみじこう、うらむき
ぬめりんぼう、あめんぼう
なめたけ、あぶらたけ
ろくしょうたけ
じこうぼう、からまつじこう、あみじこう、うらむき
かんなつくず、かみなりたけ
くるふさ、うすずみ
ねこじた
ねずみたけ
ちよこたけ、ぬのびき
むせった
かわふき

高等菌類目録

1、担子菌類

イ、膠質菌類

- アカキクラゲ
 - キクラゲ
 - ツノマタタケ
 - ニカワジ ヨウゴタケ
 - ニカワタケ
 - ニカワハリタケ
 - ニカワホウキタケ
 - ムカシオオミダレタケ
- 口、ヒダナシタケ類
- アオゾメタケ
 - アシグロタケ
 - アナタケ
 - アラゲカワラタケ
 - アラゲカワラタケモドキ
 - アンズタケ

不明	あおえ
〃	だるまたけ
〃	ふじたけ
〃	ゆうれい
〃	いとこまつ

カ

- ウスタケ
- ウツギノサルノコシカケ
- エゴノキタケ
- エブリコ
- オツネンタケモドキ
- カイガラタケ
- カイメンタケ
- カノシタ
- カペンタケ
- カレエダタケ
- カワラタケ
- カンバタケ
- キアシグロタケ
- キウロコタケ
- キチリメンタケ
- キホウキタケ
- キンイロアナタケ

サ

- クジラタケ
- クロカワ
- クロハリタケ
- クロラッパタケ
- ケアシホウキタケ
- ケロウジ
- ザイモクダケ
- サクラサルノコシカケ
- サジタケ
- サンゴハリタケ
- シシタケ
- シハイタケ
- シミガタセンベイダケ
- シミタケ
- シユタケ
- シロカイメンタケ
- シロカノシタ

タ

シロヒメホウキタケ
スミレウロコタケ
スリコギタケ
チウロコタケ
チウロコタケモドキ
チャウロコタケ
チャカイガラタケ
チャハリタケ
チャホウキタケ

ナ

ツガサルノコシカケ
ツリガネタケ
トキイロラッパタケ
トドマツオオウロコタケ
ナミダタケ
ニオイハリタケ
ニオイハリタケモドキ
ニクウスバタケ
ニセカイメンタケ
ニッケイタケ
ネンドタケ

ハ

ハナホウキタケ
ハナビラタケ
ヒイロタケ

ヒイロハリタケ
ビスケットタケ
ヒメシロアマミタケ
フジウスタケ
ブナハリタケ
ベッコウタケ
ヘビアマミタケ
ホウキタケ
マスタケ

マ

マツノウロコタケ
マツノカタワタケ
ミイロアマミタケ
ミヤベオオウロコタケ
ミヤマシロアマミタケ
モミサルノコシカケ
ヤキフタケ
ヤケイロタケ
ヤニタケ
ヤマブシタケ
レンガタケ

ヤ

八、ハラタケ類

ア
アイシメジ
アイタケ

アイバシロハツタケ
アカアザタケ
アカジコウ
アカタケ
アカチシオタケ
アカツムタケ
アカスマベニタケ
アカネタケ
アカハツ
アカハテンダケ
アカヒダササタケ
アカモミタケ
アカヤマタケ
アキヤマタケ
アケボノサクラシメジ
アケボノアワタケ
アシナガタケ
アシベニイグチ
アシボソクリタケ
アセタケ
アブラシメジ
アマタケ
アミタケ

イ

アミハナイグチ
イチヨウタケ
イッポンシメジ

イスエンボンタケ
イスマラサキシメジ

イロガワリ
イロガワリシロハツ

ウ

ウコンガサ
ウスキイロカワタケ

ウスズミチチタケ
ウスチャスメリガサ

ウズハツ
ウラベニイグチ

ウラベニイロガワリ
オウギタケ

オ

オオキツネタケ
オオキノハダトマヤタケ

オオキノポリイグチ
オオサクラシメジ

オオツガタケ
オオヒメノカサ

オオモミタケ
オオモリノカサタケ

カ

オキナクサハツ
オシロイシメジ
オチバタケ
オトメノカサ
オニイグチ

カキシメジ
カクミノシメジ
カサウラベニタケ
カブベニチャタケ

カヤタケ
カラハツタケ
カラマツチチタケ

カラマツベニハナイグチ
カレバタケ

カワリハツ
ガントケ
キアブラシメジ

キイロイグチ
キオオギタケ

キカラハツタケ
キサマツモドキ

キシメジ

キチチタケ
キツネタケ
キナメツムタケ
キヌハダトマヤタケ
キヌメリガサ
キノポリイグチ
キハツタケ
キララタケ

ク

クサハツ
クダアカゲシメジ
クリイロイグチ
クリイロカラカサタケ
クリイロムクエタケ
クリタケ
クロサカズキシメジ
クロチチタケ
クロハツ
クロハツモドキ
クロヤマイグチ
ケシロハツ
ケシロハツモドキ
コウジタケ

ケ

コ

コウジタケ

サ

コガネタケ
 コガネフウセンタケ
 コゲイロハツタケ
 コタマゴテングタケ
 コベニタケ
 コムラサキシメジ
 サクラシメジ
 サクラシメジモドキ
 サクラタケ
 ササクレヒトヨタケ
 ササタケ
 サマツモドキ
 ザラエノハラタケ
 シカタケ
 シモフリシメジ
 シモフリヌメリガサ
 シヤカシメジ
 ショウゲンジ
 シロオオハラタケ
 シロタマゴテングタケ
 シロタモギタケ
 シロトマヤタケ
 シロナメツムタケ

ス

シロヌメリイグチ
 シロヌメリガサ
 シロハツ
 シロモリノカサ
 シワカラカサタケ
 スエヒロタケ
 スギタケ
 スギタケモドキ
 スギヒラタケ
 スミゾメシメジ
 センボンイチメガサ
 タマゴタケ
 タマツキカレバタケ
 チシオタケ
 チシオハツ
 チチアワタケ
 チチタケ
 チヤオピフウセンタケ
 チヤツムタケ
 チヤナメツムタケ
 チヤヒメオニタケ
 チヤフウセンタケ
 ツエタケ

シ

チ

タセ

ツ

ト

ナ

ニ

ヌ

ツキヨタケ
 ツチカブリ
 ツチカブリモドキ
 ツノカラカサタケ
 ツバアブラシメジ
 ツルタケ
 ドクツルタケ
 ドクベニタケ
 トビチャチタケ
 ナナイロヌメリタケ
 ナメアシタケ
 ナメコ
 ナラタケ
 ナラタケモドキ
 ナライアシナガタケ
 ナオイキシメジ
 ナオイコベニタケ
 ナオイベニハツ
 ニガイグチ
 ニガクリタケ
 ニセマツカサシメジ
 スメリイグチ
 スメリササタケ

アシボソノボリリュウ

アミガサタケ

アラゲコベニチャワソタケ

オオチャワソタケ

オオミコブタケ

キチャワソタケ

キンチャワソタケ

クロサイワイタケ

ゴムタケモドキ

サナギタケ

サビコブタケ

シトネタケ

シャグマアミガサタケ

シロスズメノワン

ズキンタケ

タイシヤコブタケ

チャコブタケ

ナガエノチャワソタケ

ニマイガワキン

ノボリリュウ

ハンノキコブタケ

ヒイロチャワソタケ

ビヨウタケ

ベニサラタケ

ホテイタケ

モエギビヨウタケ

ロクショウグサレキン

参考文献

1、古川久彦・阿部恭久・根田仁編集による

富士山菌類目録 日本菌学会々報No.24

2、今関六也・本郷次雄 正・続原色日本菌

類図鑑 保育社

3、柴田尚 山梨のきのこ 山梨日日新聞社

4、柴田尚 富士山麓のきのこ 林試情報

No.10

5、依田正直 山梨県における菌類の分布と

生態(その一) 富士国立公園博物館研究報

告No.13

(平山重雄)

第三節 鳴沢村の動物

概説

富士の裾野といえはかつて源頼朝が「富士の巻狩」を展開した舞台であり、動物の宝庫として知られていた場所である。また、日本一の高さを誇る富士山は、広大な裾野をもつことでも他に類を見ないし、植生の豊かさでも随一である。それは海拔九百二十呎から三千七百七十六呎までの標高差や、想像を超えた広がりをもつ山ろくの至るところに、針葉樹林をはじめ、草本や広葉樹林が繁茂し、多種多様の植物群落が形成されていて、それらに依存して生活す

る動物群が、この地域に特有な生物社会を構成しているからである。

国道より北側にも青木ヶ原の原生林に続く紅葉台・足和田山がゆるやかに起伏し、西湖や河口湖に豊かな水を提供している。

本村はこの地域の中に八九・三九平方キロの土地を占有し人々は昔から動植物と共に調和を保ちながら暮らしてきた。また村内には鳴沢氷穴をはじめ、大室洞穴・神座風穴・蝙蝠穴・軽水洞穴など、たくさんの洞穴が点在し、この地域特有の動物のすみかとして利用されている。

このように、地形・植生の面からみて本村は動物の生息条件がそろっていて、他町村に比較すれば種類数、個体数ともに多く、鳥獣類だけでも約百五十種が確認されている。

しかし、冬季には気温がかなり低下するために一部のものは温暖な地方へ移動して生活し、四、五月ころにならなると戻ってこない。これは高冷地特有の現象で、本村に限ったことではない。今回の調査をより確かなものにするために、村内在住の狩猟家である渡辺一二三支部長・清水進・渡辺義光・三浦忍の各氏から、獣類の生息状況についての情報をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

各論

(一) 獣類 獣類はそのほとんどが夜行性である上に、大変警戒心が強く、感覚器官も鋭敏なため、日中確認することは大変困難である。従って調査にあたっては、聞きこみ調査をもとにして現地で足跡・ねぐら跡・食痕・角(つ)のこすり跡などを手がかりに調査をすすめてきた。

本村内に生息している獣類は、第一表に見られるように十四科二十七種にわたっている。

大型獣になると個体数が少ない上に行動圏も広いから、本村内に定住しているものは少なく、生息密度は低くな

る。ただし、高冷地の岩場などを好んで生活するカモシカなどは、近年保護活動がすすんだためにその数は増えつつある。以下本村内に生息している獣類について、種別ごとに記述してみたい。

(1) ツキノワグマ

生息区域は二合目から四合目にかけてが多く、餌を求めて広範囲に移動している。昭和六十年十二月にはハンター

に追われたクマが恩賜林の二十林班から二十五林班にかけて逃げまわったこともある。夏季には四合目あたりで生活していたものが、冬季になると餌不足のため村里近くまで移動してきて餌をあさる。厳寒期には冬眠に入るが、溶岩洞穴がいたるところにあるので、冬眠場所には事欠かない。数が少ないうえに猟期に捕らえられるものがあるので減りつつある。

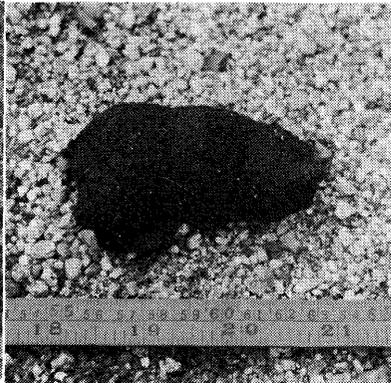
(2) イノシシ

クマと同様に生活圏が広く、一つの群れが八十平方キロをなわばりとしてることが知られている。ただし本村に生息するイノシシは、十一月から四月ころまでの期間は低温を避けて温暖な地方へ移動してしまうので周年すみついているものはいない。

昭和三十四〜三十五年頃にかけては大きな群れがいくつか住みついて、ジャガイモ畑を荒らし回ったので檻（おり）を仕掛けて捕獲したこともあった。その後狩猟人口が増えるに従い、個体数も減ってきている。現在では、長尾山から大室山にかけて数頭の群れが生息しているが、十月頃にな



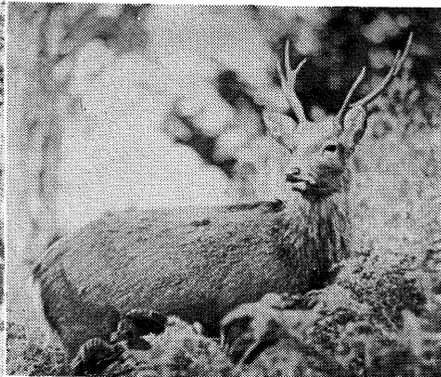
イノシシ



クマの糞



ニホンカモシカ



ホンシュウジカ

ると静岡県の方へ移動してしまう。

(3) ホンシュウジカ

本村の二合目から五合目にかけて生息しているが数は多くない。イノシシと同様に厳冬期になると片蓋山の南麓を通って、富士宮方面に移動してしまう。繁殖期には雌が仔をつれて山林内を徘徊するが、雄はこの群れには加わらず、雄同志の群れをつくって行動する。最近では別荘地の拡張、道路網の整備などによって人の流入が多くなってきたため個体数がかなり減ってきている。

(4) ニホンカモシカ

カモシカは天然記念物獣に指定され、保護されるようになってから、各地で増え続けている。本村においても同様で大室山をはじめ、片蓋山・弓射塚などの小山や、富士山の五合目あたりまで広く分布している。岐阜県などでは個体数が増えすぎて植林地に被害が出ているが、本村ではまだそうした状況にはなっていない。保護を受けているせいか、人を見てもあまり警戒しないので、悪質なハンターに狙われたら最後、その数はたちまち減ってしまう運命にある獣である。

(5) ホンドキツネ

キツネの分布範囲は広く、村落付近から亜高山帯にまで及んでいる。本

村では五湖台の南斜面に多くの巣穴があり、ここで繁殖しているものが村内各地を徘徊しているようである。熔岩地帯でも姿をあらわすが、繁殖のための巣穴は自力で掘って造るので、比較的軟かな土壌のある場所に限られている。大室山や片蓋山にも巣穴があり、少数が繁殖している。

キツネはこの地域でも増えてきているようで、目撃の機会が多くなっている。とは言え、夜行性だから日中見かけることは稀である。天神峠近くの林道で車にはねられて死んだキツネを見つけたことがあったが、夜間に車のヘッドライトで目が

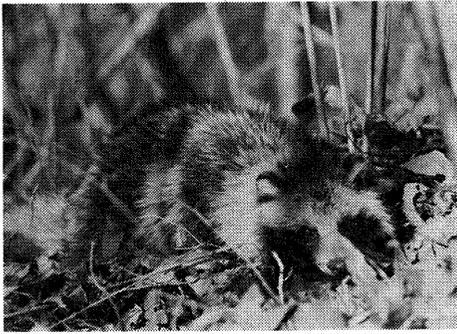
くらみ、方向を失って衝突したものらしい。

(6) ホンドタヌキ

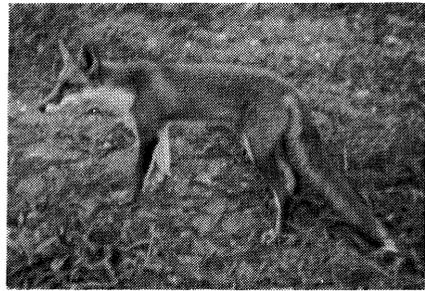
昔に比べて甲種狩猟免許（わな猟）を持つ

ている人が少なくなったこともあって、タヌキが増えてきたと言われているが、本村でもその傾向が見られる。

生息が確認されているのは屋坪付近と鳴沢村総合センター一帯で、ここではタヌキの糞（ふん）や巣穴も見つかっている。タヌキは一般に里山付近に分布し、日中は巣穴の中に潜んでいて、夜間から明け方にかけて活動するので目止まる機会は少ないが、人家近くまでやってきて残飯などをあさるものもいる。雑食性で何でもよく食うが、モロコシ畑で未熟のトウモロコシをかじって被害を与えることもある。



ホンドタヌキ



キツネ



イ タ チ

(7) キユウシユウノウサギ

富士山ろく一帯には、森林や草原が各地に広がって、ノウサギのかっこうな住みかとなっており、どこへ行ってもノウサギの糞がたくさん見られる。ここに住んでいるノウサギは、冬になっても毛の色が褐色のまま、白くないキユウシユウノウサギである。

日中は藪の中に潜んでいて、夜間活動するが、日中でも姿を見かけることもある。

(8) ホンドテン

テンには、冬になると毛が鮮やかな黄色になるキテン（東北産）と汚れた黄褐色になるステン（本州南西部産）の二種がある。本村ではステンが生息しているが、数があまり多くない上に夜間の行動が多いので、目にとまることはまれである。

テンの主食はノネズミ・イヌ・ムササビ・モモンガ、ウサギなどの獣類のほか・小鳥やカエル・ヘビ・トカゲなども捕食する。その他カキやサルナシ・マタタビなどの実も好んで食うようである。

ふつう低山から亜高山にかけて生活しているが、夏季には富士山頂まで足をのぼし、残飯に集まるネズミを捕らえるものもある。

(9) ニホンイタチ

本村の全域に住んでいるが特に人家付近に多く、ネズミ類を捕らえたり、池の中に入って魚を失敬したり、時として留守中のお勝手口まで忍んできておかずを持ち去ることもある。日中は穴の中や建物のすき間などに潜んでいて、夕方から活動するが、繁殖期の四月から五月にかけて

は、子育てのために昼夜の別なく餌を探しまわるようになる。

イタチには捕らえた獲物や集めた餌を蓄える習性があるらしく、自分の巢のまわりにたくさん魚をためておいた例も知られている。

日本には古くから住みついているニホンイタチのほかに中国や朝鮮から輸入されて繁殖したタイリクイタチの両方が分布しており、ニホンイタチはタイリクイタチに住みかを奪われつつあるようであるが、本村に生息しているイタチは、雌雄で体の大きさのちがうニホンイタチである。

(10) ホンドオコジョ

オコジョはイタチをまわり小さくしたくらいのもので、頭から背中にかけては茶褐色で、尾の先が黒く、胸から腹にかけて白い。冬になると、尾の先端を除いて真っ白になるのでイタチとの区別は容易にできる。

主に亜高山帯に生息していて、ネズミ類をはじめ、野鳥やノウサギなどを捕食している。

第一表 鳴沢村に生息する主な獣類

科	名	種	名	主な生息地域
ク	マ	ツキノ	ワグマ	富士山二合目から四合目
イ	ノシシ	イ	ノシシ	長尾山、大室山周辺
シ	カ	ホン	シユウジカ	富士山二合目から五合目
ウ	シ	ニ	ホンカモシカ	大室山、片蓋山、弓射塚、富士山五合目
イ	ヌ	ホン	ドキシツネ	五湖台周辺、大室山、片蓋山周辺
			ヌキ	屋坪周辺 五湖台南斜面

体が小さいのに大変獰猛(どうもう)で、自分より大きなノウサギでも、すばやく飛びかかって簡単に殺してしまふ。本村では主に県有林に生息しているが、数が少ない上に溶岩のすき間を敏捷に動きまわり人前に姿を見せることは少ない。

(11) ニホンアナグマ

俗にササグマとかムジナと呼んでいるが、マミと呼ぶ地方もある。タヌキによく似ているが、イタチ科の動物であり、肢(あし)には巢穴を掘るための長く頑丈な爪がある。

本村では主に大田和地区に生息しており、山の斜面に穴を掘って潜んでいる。タスキと同様に夜間活動し、小動物や果実を求めて徘徊する。時として人家付近にもやってきて、残飯をあさることもある。数は大変少ない。

(12) ムササビ

昔に比べて社寺林が減り、巨木が少なくなったために、ほとんど見られなくなった動物である。リスの仲間であるが四肢の間に皮ふがひろがってできた飛膜があり、これを使って空中を滑空する。日本では最高百八十呎飛んだという記録もある。餌は植物質が主で、若芽や若葉、木の実、果実などを好んで食うが、昆虫などの動物質をも餌にする。本村では春日神社付近や大田和水源地一帯に出没することが知られているが、数が少ないうえに夜行性であるため、人目にふれる機会は大変少ない。

(13) ホンシユウモモンガ

体の大きさがムササビよりさらに小さく、頭から胴まで二十センチくらいである。飛膜も狭く滑空距離もムササビに比べるとはるかに短い。ムササビを大晩(おおばん)と言うとき、モモンガは小晩と呼ばれる。

山地の森林に住み、木の枝上やうろに巣をつくって子どもを育てる。日中は巣の中で眠っていて夜になると活動を



コウモリ



ホンドリス

はじめ、木から木へと飛び移りながら木の实や堅果をあさる。本村では五湖台付近で生息が確認されているが、樹海のなかでも少数が繁殖している。

(14) ホンドリス

本村内では、林のあるところでは大抵リスが住みついている。最近、天敵である猛禽類が減ったこともあって、昔よりは個体数が増えてきている。

リスは三月から四月にかけて高い木の枝に小枝を集めてボール型の巣をつくり、内部に杉の皮などを綿状にしたものをつめて産座にする。一腹で三〜五匹の子を産み、五月ころになると子は巣を離れて生活しはじめる。

リスはシマリスと違って冬眠しないので、冬も餌を求めて林の中を移り歩き、地上に落ちた木の实などを採しまわる。

(15) コウモリ

本村内にはジラゴンノの蝙蝠穴（こうもりあな）をはじめ、神座風穴・軽水洞穴・氷穴・めがね洞穴など、数多くの風穴・洞穴があり、かつてはたくさんのコウモリが生息していた。古い記録によれば洞窟性、森林性のコウモリが二科十三種類あげられているが、現在ではほんの数が確認されているだけである。このようにコウモリ類が減った理由は、観光開発や、別荘地、ゴルフ場の造成などにより、多くの人が生息場所に立ち入るようになったからである。

筆者は前述した洞穴や風穴をつぶさに調査して回ったが、コウモリの生息が確

認されたのは神座風穴だけで、他の洞穴では一頭も発見できなかった。また確認された種類はウサギコウモリとキクガシラコウモリの二種であり、個体数も三頭にすぎなかった。

ウサギコウモリは耳がウサギのように長くそれをいつもピクピク動かしている。昼間は洞穴や樹洞の中で眠っていて夕方になると穴から飛び出して活動をはじめめる。餌は夜活動をする蛾（が）や、ガガンボ、甲虫などで、空中を飛びながらこれを捕食する。

十～十一月に交尾し、翌年の六月ころに子を産む。秋になると間もなく冬眠の準備に入り、洞窟や木のうろに入つて単独で冬眠にはいる。

本村では神座風穴で生息を確認したほか、富士山五合目あたりまでの森林中に生息していることが知られている。

キクガシラコウモリは、顔の真ん中にある鼻葉が菊の花に似ているところからその名がつけられたようである。このコウモリは空中を飛ぶときに他のコウモリのように高く飛ばず、せいぜい地上二～三層のところしか飛ばない。それは彼らの餌となる虫の生息場所と関係があるらしく、時には地上の草に止まることもある。このコウモリを捕らえようとする場合には、水たまりのある地上に霞網を張っておけば引つかかってくる。

(10) ヤマネ

ヤマネはリスを小さくしたような獣で、背中に一条の黒い縞（しま）が見られる。主に樹上生活をしているが、時として地上におりることもある。日中は樹の洞やリスの古巣、建物の隙間などで眠っていて、夜になると活動を始める。餌はドングリやクリ・ナラ・ブナの実などで、時に若芽や樹皮などのほか昆虫やカタツムリも捕食する。

本村では、ほぼ全域に生息しており、冬になると小鳥用の巣箱や別荘の建物の隙間、山小屋の物置きなどに入って



ヤ マ ネ

冬眠する。

(17) モグラ

本州に住むモグラ類にはモグラ属のコモグラ、アズマモグラ、コウベモグラの3種がある。この他にヒミズ亜科に属するヒミズモグラまで加えると5種になるが、富士山周辺にはミズラモグラ属のフジミズラモグラという原始的な種類も生息しているというから、本村などはモグラの分布上興味深い地域である。

このなかで比較的良好に見られる種類は、ヒメヒミズとホンシユウヒミズで、登山道などに死骸がころがっているのを何度か目撃した。モグラ属のコモグラやアズマモグラは、数の上では多いのだが捕らえることが困難なので、どちらの種類であるかを判定するのがむずかしい。

モグラは地中に長いトンネルを掘り、土中にあるミミズや昆虫を捕食しているが、その量は年間十八〜三十六キロになるといわれている。掘った土を地表に押しあげて造られたものをモグラ塚と呼んでいる。

(18) ネズミ類

ネズミ類には種類が多くイエネズミの仲間、ハツカネズミ属、アカネズミ属、カヤネズミ属、ハタネズミ属、カゲネズミ属、ヤチネズミ属などがあり、そのほとんどがどの地域にも生息している。

したがってその地域のネズミ類を詳しく調べるには、トラップをたくさん仕掛けて、かかったものを特定していく必要がある。そのためには、かなり長期間にわたっての調査が必要になってくる。今回の調査では、そこまで詳しく実施する余裕がなかったので、文献によって調査をすすめた。

鳴沢、大田和林道の鳥類(黒田)

種	類	鳴 沢 林 道		大田和	計	
		1969	1969	1969		
		4.25	12.28	11.26		
		晴	晴	晴		
		14:48~	8:30~	9:15~	296分	
		123分	113分	60分		
ヒ	ガ	ラ	35	8	27	70
コ	ガ	ラ	11	7	20	38
エ	ナ	ガラ	10	21	7	38
シ	ジュウ	カラ	6	7	2	15
ス	ズ	メ		10		10
カ	ワ	ヒ		10		10
ア	カ	ハラ	9			9
カ	ケ	ス	5	2	1	8
ヤ	マ	ガラ	5	2		7
ウ	グ	イス	7			7
ミ	ソ	ザイ	4	1	2	7
キ	ク	イダ		6		6
セ	ン	ダイムシ	6			6
ア	カ	ゲ	4	2		6
ア	オ	ジ	5			5
メ	シ	ロ	5			5
ゴ	ジュウ	カラ	4	1		5
ツ	グ	ミ		2	3	5
ウ		ソ		2	2	4
カ	シ	ダ		4		4
ホ	オ	ジ		4		4
ヒ	ヨ	ド		4		4
ベ	ニ	マ		2		2
モ		ズ	2			2
ア	オ	ゲ	2			2
ホル	シ	ガラ			1	1
ル	リ	ビ		1		1
コ	ゲ	ラ	1			1
キ		ジ	1			1
個種	体	数	132	56	65	293
	類		18	19	9	29
	No./h		64.20	29.40	64.80	59.16

今泉吉晴氏が、昭和四十三年から五カ年間にわたって青木ヶ原で行った調査によれば、ここに生息している小型哺乳類には、アカネズミをはじめ、ヒメネズミ、カゲネズミ、トガリネズミなどが生息していることが明らかになっている。

二 鳥類 富士山ろくは、古くから日本屈指の野鳥の宝庫として知られ、国内はもとより、国外の研究者からも注目されてきた場所である。この場所で最初に鳥類の調査をしたのはブラキストンとプライヤーであり、一八八〇年(明治十三年)であった。その後も多くの学者によって調査がなされてきたが、一九六六年(昭和四十一年)から一九

第三章 動植物

緑の休暇村（ジラゴンノ）周辺における鳥類（4年継続）

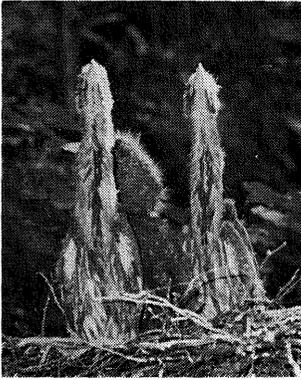
年月日 天候 時間 種名		1983 7. 2	1984 6. 30	1985 7. 1	1986 7. 2
		くもり	くもり	くもり	晴
		5:20~6:20	5:30~6:40	5:30~6:30	5:30~6:30
1	ホ オ ジ ロ	○	○	○	○
2	キ セ キ レ イ	○	○	○	○
3	カ ワ ラ ヒ ワ	○		○	
4	コ ガ ラ	○	○	○	○
5	ノ ジ コ	○			
6	ウ グ イ ス	○	○	○	○
7	ア カ ハ ラ	○	○	○	○
8	カ ツ コ ウ	○	○	○	
9	ホ ト ト ギ ス	○		○	
10	カ ケ ス	○	○		
11	コ ゲ ラ	○	○	○	
12	ア カ ゲ ラ	○			
13	シ ジ ユ ウ カ ラ	○	○	○	○
14	ヒ ヨ ド リ	○	○	○	○
15	キ ジ バ ト	○			○
16	ヒ ガ ラ	○	○	○	○
17	センダイムシクイ	○	○	○	○
18	ヤマ ガ ラ	○			
19	ミ ソ サ ザ イ	○	○	○	
20	ス ズ メ		○	○	○
21	ハシブトガラス		○		○
22	ヤ ブ サ メ			○	○
23	ジ ユ ウ イ チ				○
24	サンシ ヨウクイ				○
25	エ ナ ガ			○	○
26	コ ル リ		○	○	○
27	イ ワ ツ バ メ				○
28	セグロセキレイ				○
29	イ カ ル		○		
30	ト ラ ツ グ ミ		○		
31	ト ビ		○		
種 類 数 計		19種	19	18	19

○ 確認されたものを示す。

六九年（昭和四十四年）にかけて、富士急行株式会社が富士山総合学術調査を実施し、野鳥調査においてもこれまではなかった大規模の継続的な研究調査を行い、この期間中に十四目四十一科百二十種の鳥類を確認している。この中で本村地内で実施された鳥類調査の一例を見ると前ページの表のようである。

この表から本村内にも多種類の鳥類が生息していたことがわかる。しかし近年本村内で行われている開発の影響で、鳥類の生息環境も徐々に変化してきているので、鳥類の種類数や個体数が減ってきているのではないかと心配する声もある。そこで筆者は、本村地内の同一場所で、同じ季節に四年間の継続調査を試み、鳥類の種類数がどう変化したかを調査してみた。その結果は前ページの表のようであった。

これらの表からわかるように、本村内では通常二十種程度の鳥類を観察することができるとのこと。また夏鳥では約三十種の鳥類が生息していることなどが明らかになった。さらに季節や場所を変えて行った調査結果を加えてみると本村内でも富士急行株式会社調査に近い鳥類が見られることが判明した。以下これらの種類について科別に分布状況や生息について述べる。



ミゾゴイ

(1) サギ科の鳥

日本には18種が生息しているが、本村ではミゾゴイとゴイサギの二種が見られる。

ミゾゴイは夏鳥として五月下旬ころ南の国から渡ってきて、谷川沿いの森林中に住みつき、樹枝上に営巣して雛を育てる。明け方に人がうなるような低い声で「ブオー・ブオー」と鳴く。餌は主にサワガニやカエルなどの小動物で、夜間活動する。地元では俗にイブと呼んでいる。



ゴイサギ

ゴイサギはいつも集団生活をしている鳥で小さなものは五〜六羽、大きなものになると数百羽もの群れをつくる。日中は水辺に近い森林中に潜み、夕方から活動を始め、河川や沼などで魚やカエル、ザリガニなどを捕食する。時に人家の庭先で飼っているコイや金魚などを失敬したり、ネズミやトカゲ、カナヘビなどの小動物まで襲って食うという悪食でもある。

繁殖期になると、百〜二百羽くらいの群れとなり、集団営巣をして雛を育てる。

これはコロニーと呼ばれるが、これができたサギ山では、サギの糞のために木が枯れたり、鳴き交う声がやかましいなどの理由で、山の持ち主から追い出されることが多く、大抵は一年で他の場所に移っていく。本村内でサギ山ができたという記録はまだない。

(2) ガン・カモ科の鳥

ガン・カモ類は、そのほとんどが冬鳥として十月ころ北国から渡来してくるが、オンドリやカルガモは渡りをしないで日本で繁殖する鳥である。日本に渡ってくるガン・カモ類は四十五種類いるが、いずれも湖沼や低地の大きな河川に限られている。こうした環境のない本村では、ガン・カモ類の渡来は見られず、渡りをしないオンドリが少数生息しているに過ぎない。

オンドリは別名「木ガモ」と呼ばれていて日本各地の山林中で繁殖する。普通は水辺に近い林や、少し離れた森林の樹洞中に営巣し地上から四〜十メートルの高さの樹洞を利用するものが多い。四月下旬から七月にかけて、産卵育雛をし、成長した雛は樹洞から地上に飛び下りて水辺までたどりつく。本村内で繁殖したものは冬季には上野原町の大野貯水池などに移動して越冬するものが多い。

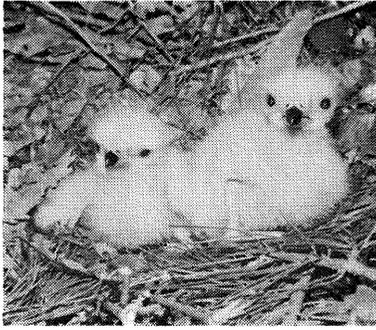
(3) ワシタカ科の鳥

かつて富士山ろくはワシタカ類の生息地として世界的にも有名であったが、近年の急激な開発によってその数が激減し、現在では一部の地域を除いて、姿を見ることもまれになってきた。これに加えて禁鳥であるこの鳥を密猟し、剝製として飾り物にする風潮が後を絶たないために種数によつては絶滅に追いやられているものもある。したがつて生息地の細かな記述はこのような状況を助長することに連なる心配もあるので概要に止めておきたい。

ハチクマは夏鳥として五月ころ南国から渡来する。標高五百呺から千五百呺くらいの山林に住みつき、樹枝上に小枝を積み重ねて巣をつくり、産座にナラヤクリなどの青葉を敷く。このタカはジバチの幼虫や蛹をはじめ、ミツバチ・アシナガバチなどの幼虫も好んで食う習性があるためハチクマの名がつけられた。もちろん他のタカのようにカエルやヘビ、小鳥類なども捕食するが、中型獣などは襲うことがない。数は大変少なく、本村内では数番(つがい)が見られる程度にすぎない。

トビはワシタカ類中最も数が多く、どこにでもたくさん住んでいる。山深い森林よりはむしろ集落に近い所に集中しており、繁殖期以外は群れでいることが多い。上昇気流に乗って大空を旋回し、地上に獲物を見つけると急降下して鋭い爪でこれを捕らえ、樹上に運んでから引きさいて食う。餌は主にネズミ類・カエル・ヘビなどであるが、死肉も好んで食うし、時には昆虫類も捕食する。本村では全域に分布していて、数も多い。

オオタカは夏は低山帯から高山帯にかけて生息しているが、冬になると平地にも姿を見せ、小鳥類などを襲って生活するようになる。日本に住むタカの名



ハチクマのひな

かでは気も荒く、人が育雛中の巢に近づくと襲ってくることもある。飛ぶ力が強いので遠くまで獲物を探しに行き、ノウサギやキジなどの大型の鳥獣を捕らえて巢に持ち帰ることもある。巢は高い木の枝上に枝を積み重ねて、外徑七十センチくらいの大きなものをつくる。数は少なく単独で行動することが多いため、目撃の機会は極めて少ない。

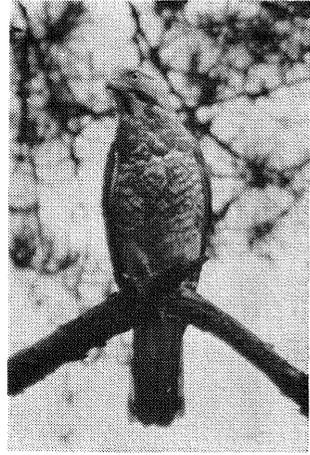
ツミはワシタカ科のなかでは最も小型で、ハトくらいの大きさである。夏は亜高山帯や低山の広葉樹林に生息し、小鳥類やネズミ類、昆虫などを捕食している。巢は地上五呎から十呎くらいの樹枝上に枝を重ねて皿型にし、産座にヒノキなどの青葉を敷くことが多い。敏捷な動きをするので注意して見ていないと気づかないこともある。

ハイタカはツミを少し大きくしたくらいで形や色彩はツミによく似ているので、遠くから識別することがむずかしいタカである。

夏は亜高山から高山まで広い範囲にわたって移動するものが多く、標高二千五百呎あたりでも飛翔しているものを見かける。巢はカラマツやスギ林などの樹枝上に細い枝を積み重ねて淡青色の地に赤褐色の斑のある卵を四〜五個産む。ハイタカの餌は主に小鳥類であり、シジュウカラやエナガ、コガラなどの多い針葉樹林中で狩りをする事が多い。本村では少数が生息している。

ノスリは山地のアカマツ林や雑木林に生息する留鳥で、他のタカ類に比べると顔や喉・胸から腹にかけてかなり白っぽく見えるから、一見して区別できる。また上空を旋回している時はトビに似ているが、尾の形が角型ではなく円みをもっているから間違えることはない。鳴き声はピーーまたはピーョーとやさしい声で、飛んでいる時に鳴くことが多い。

五月〜六月にかけて、樹枝上に営巢し、産座には青葉の小枝を敷く。餌はネズミ類をはじめ小鳥・カエル・ヘビなどで、獲物を見つけると空中から急降下してこれを捕らえる。地方によっては「まぐそったか」と呼んでいるが



これは体の色からきている名前であろう。本村内にも数番が住んでいる。

バ　サンバは五月ころ南の国から渡って来て低山に住みつくタカである。本村では標高が高いためか、住みついて営巣する個体は確認されていないが、餌を求めて飛来するものがわずかに見られる。

サ　クマタカは高山や深い山に生息する大型のタカで、大変数が少なく、絶滅が心配されている一種である。富士山周辺では数番が繁殖していることが知られているが、いずれも近づき難い場所である。

夏には高山帯にも出現しホンガラスやオコジョなどを襲うこともあるが、冬になると平地にも飛来し、カモなどを捕らえることが多い。他にキジ・ヤマドリ・ウサギなど、かなり大きな動物を捕食する。

(4) ハヤブサ科の鳥

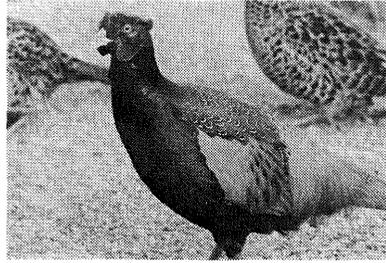
チヨウゲンボウは夏の間には高冷地にも姿を現し、冬になると温かな地方に漂行するタカで、かつては人間が近づけない断崖に営巣していたが、近年になって市街地のビルでも繁殖するようになった。本村での繁殖は確認されていないが、夏季に狩りのため飛来するものがある。

餌はネズミや小鳥類、昆虫類などで、空中で停空飛翔（ホバリング）をしながら獲物を探していることもある。

(5) キジ科の鳥

本村ではキジ・ヤマドリ・コジュケイの三種が生息している。

キジは平地から標高千二百呎の山地や高原の草原・農耕地・雑木林などに住みついている。針葉樹林や広葉樹の密



キジ

林中には少なく、開けた場所に多い。狩猟鳥であることと、キツネなどに捕食されるものが多いため、野生のキジは年ごとに減っているが、養殖キジが放鳥されて絶滅だけはまぬがれている。本村では山ろくの畑やスキ原で声が聞かれる。

ヤマドリもキジと同じくらしいの標高地に住んでいるが、針葉樹の密林やシダ類の密生する暗い林にも生息している。昼間は森林中の草むらの中や、山頂や山腹の藪の中に潜んでおり、植物の若芽や種子・果実などをついばんだり休息したりしている。

外敵が近づくと大きな羽音を立てて舞いあがり一気に滑翔して遠くへ飛び去ることが多い。本村では山林・原野に生息しているが、キツネなどに捕食されるものも多く、減りつつある鳥である。

コジュケイは、昭和初期に中国から輸入したものが自然に増殖して本州全土に広がった帰化鳥類である。狩猟の対象になっているが繁殖力も強く、各地で増えているようである。

いつも五〜六羽の群れになって農耕地や草むらの中で餌をついばんでいることが多い。地上での生活が多く、よほど驚いた時以外はめつたに飛び立つことがない。本村では夏季に少数が生活しているが、冬季になると暖地移動していなくなる。

(6) シギ科の鳥

シギやチドリの仲間は大らかな河川や湖沼に渡来するものが多く、日本では五十八種が確認されているが、高冷地ではほとんど見ることがなくヤマシギ一種だけが生息する。

ヤマシギは本村においては夏鳥で、冬季になると越冬のために、暖地へ移動していく。五月ごろになると再びも



キジバト

どつて来て、アカマツ林や雑木林に住みつき、木の根元や藪の中の地上の窪みに枯れ草や枯れ葉を敷いて営巣する。日中は林の中にひそみ、日没後に舞い立って水田や沼沢地でミミズや昆虫類を探して食う。地上にひそむ時はなかなか飛び立たず、腹を地上にびったりとつけて動かずにいるので、見つかりにくい。

(7) ハト科の鳥

キジバトは最近になって増えてきている鳥で、本村ではヤマバトと呼んでいる。この鳥の繁殖期は他の鳥に比べると大変長く、四月ころから十月まで続き、森林の樹枝上や人家の庭木の枝に粗末な巣をつくって雛を育てる。大抵は番で行動し、農耕地などに舞い下りて、二羽で仲よく餌をついばんだり、羽づくろいをしていることが多い。姿をよく見かけるが、冬季は暖地へ移動して少なくなる。

い。本村では全域に住んでいて、姿をよく見かけるが、冬季は暖地へ移動して少なくなる。
アオバトはキジバトに比べると数も少なく分布域も狭い。姿を見る機会は少ないが、無気味な声で「ウァオー・アオー」と長く鳴くので生息場所を知ることができる。本村では白樺台別荘地付近の森林中で、この鳴き声を何回か耳にしたし、精進登山道沿いでも聞いたことがある。十二月ころになると越冬のために暖地へ移動してしまう。

(8) ホトトギス科の鳥

日本にはこの科に属する種類が四種いるが、本村においても四種とも生息が確認されている。いずれも夏鳥として五月ころ南の国から渡ってきて、秋には渡去する。また、どの種類も自分では営巣・抱卵・育雛をすることがなく、他の鳥に托卵（たくらん）するという変わった習性をもっている。

ジュウイチは、その鳴き声が「ジュウイチー」と聞こえるところから、その名がつけられた鳥で、別名「慈悲心



カッコウのひな

鳥」とも呼ばれている。托卵する鳥(仮母鳥)は、コルリ・オオルリ・コマドリなどで、これらの鳥が多く生息する場所に住みつく。本村では、軽水林道沿いや樹海の中で鳴き声がよく聞かれる。

カッコウも五月ころ渡ってきて、山地や平地の林に住みつき、オオヨシキリをはじめ、モズ・ホオジロ・アオジ・キセキレイ・ヒバリ・ビンズイ・ノビタキなどの巢に托卵する。渡って来て間もないころ、電線や木の梢に止まって、尾羽を広げながら「クワッコー」を繰り返して、雌を呼ぶ光景がよく見られる。カッコウの餌は主としてスズメガ・ドクガ・ヤガ・マツケムシなど、森林の害虫である蛾(が)が多く、森林保護上に役立つ面もある。

ツツドリは、鳴き声が筒をたたいた時に出る音のように「ポッポン・ポッポン」と聞こえる。ホトトギス科の鳥の中では最も早く渡来し、木の梢に止まってよく鳴き続ける。仮母鳥としては、センダイムシクイ・メボソ・ヤブサメ・メジロ・キビタキ・オオルリ・ウグイス・モズなどであるが、センダイムシクイに托卵することが多い。カッコウに比べると、その数ははるかに少ない。

ホトトギスは、「ホツチョコカケタカ・キョッキョッキョッキョ」と鋭い声でよく鳴く。本村では、樹海や五湖台あたりでさかんに鳴くホトトギスの声がにぎやかである。

木に止まって鳴く場合もあるが、飛びながら鳴いたり、明け方の暗い空で鳴くことが多い。大変情熱的に鳴くというので、古くから文学の素材としてホトトギスの名が用いられてきている。

(9) フクロウ科の鳥

フクロウの仲間、夜の覇者(はしや)としてどう猛な鳥というイメージをもたれがちであるが、ネズミを捕食す

るおとなしい鳥である。日本には十種類が生息するが、いずれも夜行性で、昼間は木の洞や葉陰にひそんでおり、暮れから活動する。

トラフズクは、本州にいるフクロウの中では大型で、耳羽がめだつために虎の顔つきを思わせる鳥である。留鳥として亜高山帯から平地にかけての林に生息し、針葉樹林中にひそんでいることが多い。五月ころになると樹洞やタカノ古巣を利用して産卵育雛をするが、時には地上に営巣することもある。餌は主にネズミ類であるが、モグラや小鳥類も捕食する。本村では、富士山の三合目あたりに生息しているが、数は大変少ない。

コノハズクは、声の仏法僧としてよく知られた鳥で、日本には五月初旬に南の国から渡って来る。よく繁った密林中の巨木に住みつき、夜になると「ブッポー・ブッポー」とさかんに鳴く。声の大きい割に体は小さく、ムクドリほどしかない。日中は巨木の繁みにひそんで眠っており、夕方から活動をはじめ、主として昆虫類を捕食する。本村では、富士の二合目、三合目あたりで鳴き声が聞かれる。

オオコノハズクは、コノハズクを一まわり大きくしたくらいの大きさで、姿や形は大変よく似ている。夏の間は山地のスギやヒノキ林に生息しており、寒くなると平地に移動するものが多い。鳴き声は「ポウポウポウ」と低く、夕



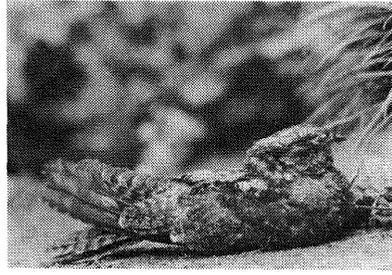
オオコノハズク



フクロウ

暮れから夜半ころまで鳴き続ける。餌は小鳥類やネズミ類が多いが、カエルや昆虫類も好んで食う。秋から冬にかけては平地や暖地に移動して越冬する。

フクロウは、標高千六百メートル



いまでの森林に住む留鳥で、二月中旬ころになるとゴロッホ・ホッホー・ゴロッホ・ホーコ」などと低い声で鳴く。最近ハクロウが繁殖できる大きな樹洞が少なくなっているためか、数が大変少なくなってきた。夜間に活動し、ネズミ類や小鳥類を捕食する。本村では、旧学林あたりで鳴き声が聞かれる。

カ
タ
ヨ (9) ヨタカ科の鳥

ヨタカは一科一種の鳥で、日本には四月下旬から五月にかけて渡ってくる。朝方や夕暮れ時に、木魚でもたたく音のように「キヨキヨキヨキヨキヨキヨ……」とリズムカルに長く鳴く。暗やみの中で音もなく飛びまわり、空中で蛾を捕らえて食う習性があり、車のライトに照らされると、ルビーのような目玉が大きく光って見えるので、はじめて出会った人は大変驚くことが多い。

日中は体を木の枝に平行にして止まっており、じっとしているので見つけにくい。本村内では、標高の低い地域に生息しており、あちこちの林から鳴き声が聞こえてくる。

(10) ブッポウソウ科の鳥

ブッポウソウは一科一種の夏鳥で、五月ころ日本に渡ってくる。全身が鮮やかな青緑色で、嘴と脚は深紅色で美しい。名前は仏法僧であるが、キノハズクのように「ブッポウソウ」とは鳴かずに「ゲエツ、ゲエツ」と濁った悪声で鳴く。

生息場所はキノハズクと同じで、巨木のある社寺林や樹齢の高い木のある森林である。餌は昆虫類であるが、特に甲虫類を好んで食う。最近ハ巨木が少なくなってきたために渡来数も少なくなっている。



アオゲラ

(1) キツツキ科の鳥

この科に属するものはアリスイを除く他は留鳥で、一年中同じ場所に生息している。

アオゲラは、低山帯から亜高山帯にかけての森林に生息するキツツキで、体はムクドリを一まわり大きくした程の大きさである。体の色は明るい緑色であり、腹側にV字形をした黒い斑がたくさんある。また雄の後頭

部は鮮やかな紅色をしている。

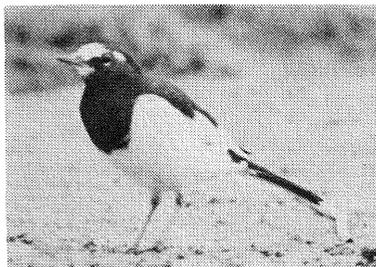
木の幹をぐるぐる回りながらアリやハチ、ゴミムシ、クモなどをついばんでいることが多い。本村内では富士山四合目以下の林に住み、人が近づくと「ケラケラケラ」と激しく鳴きながら遠くへ飛び去る。

アカゲラは、ムクドリほどの大きさで体の背面は青みがかった黒色で、その中に白い斑点がみられる。また雄では後頭に紅色の帯が見られるほか、下尾筒（下腹部にあたる部分）にも紅色の部分がある。

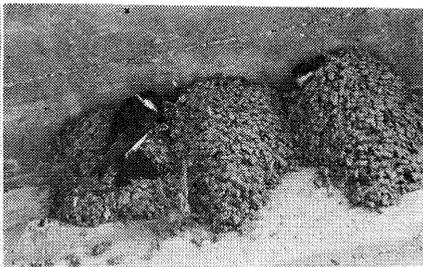
木の幹を上がつたり下がつたりしながら、ハチ、アリのほか、カミキリの幼虫、ガの幼虫を頑丈な嘴で捕食している。本村では、どの林道沿いでも幹をたたくアカゲラのドラミングを聞くことができる。

コゲラは、スズメ程の大きさのキツツキで、体の色は褐色や黒色で、その中に白の幅広い横縞がたくさんある地味な色の鳥である。

アカマツ林に多く、小枝から小枝へと移動しながらハチ・アリをはじめゾウムシ・ガの幼虫・クモなどの小動物を捕食している。一本の木を下から上まで回り終わると、次の木へ飛び移るが、その際に「ギーギー」と鳴くことが多い。本村ではどこの林でも普通に見られ、冬季にはシジュウカラやメジロと混群になり、林の中を移動している。



キセキレイ



イワツバメ

(12) ツバメ科の鳥

日本には五種のツバメが渡ってくるが、普通見られる種類といえば、ツバメとイワツバメの二種である。

イワツバメは、かつて亜高山帯の岩場に住みついて繁殖していたが、近年は低地へ進出してきて市街地でもツバメを追い出し、自由に繁殖するようになった。

ツバメに比べると、体は一まわり小さく、尾の先端が分かれていないで凹尾型をしている。飛んでいる時には、腰の白い部分がよく目立つから容易に区別できる。本村では、大きな建物のある場所ではどこでも住みついていて、壁に泥を主材としたドンブリ型の巣をつくる。

(13) セキレイ科の鳥

セキレイ科の鳥の特徴は、いつも尾をふることで、飛翔が波状であることの二つである。

キセキレイはその代表種であり、長い尾をいつも振っている。普段は標高の低い河川や水田、湖沼、村落に生息しているが、七月ころから溪流をさかのぼって高冷地にまで移動する。

その名のようには胸から腹にかけて黄色であり、一見して識別することができる。水辺にすることが多くガガンボやゴミムシ、ヒメバエなどの昆虫を捕食する。

繁殖期には石垣の間、屋根の隙間、樹木の凹みなどに営巣して雛を育てる。本村で

は主に夏季に低地から漂行してきたものを多く見かける。

セグロセキレイは、背面は黒く、腹側が白というツートンカラーの鳥で、留鳥として河川や湖沼・水田・溪流・湿地などに生息する。この鳥は三月ころから繁殖をはじめ、水辺の崖地、土手の凹み、石垣の間などに営巣するが、時には駐車中の車の隙間や大勢の人の出入りする場所の物陰にも営巣して、新聞をにぎわすこともある。

餌はカワゲラ・トビケラ・ゴミムシ・ミズマシ・ガガンボといった水生昆虫が多い。本村では、村落付近やジラゴンノ地内でよく見られる。

ビンズイは、低山から亜高山にかけての草原や低木の疎生する林、登山道沿いなどでよく見かける鳥である。

繁殖期になると高い木の梢に止まって「ビン・ビン・ビンズイーズイー」などとよく鳴き、時々舞い上がってはまた元の梢に戻るといったしぐさを繰り返す。

五月中旬ころから七月にかけて、地上の凹みや登山道わきのかげに枯れ草・藓類（こけ）などを使ってお椀形の巣をつくる。地上を歩いていることが多く、よく目につく鳥で、本村では比較的多く見られる。

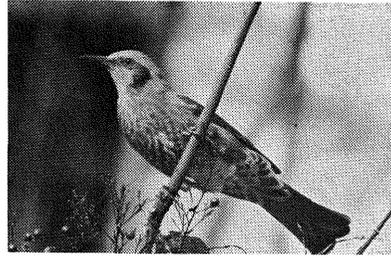
(14) サンショウウクイ科の鳥

この科の鳥の名は、その鳴き声が「ヒリヒリン、ヒリヒリン」と聞こえるために鳥が辛いサンショウを食って、ヒリヒリ鳴くという意味からつけられたと言われている。

サンショウウクイは、モズくらいの大きさで夏鳥として四月下旬ころ南の国から渡ってくる。この鳥は木の梢近くにいることが多く、餌をとる場合や巢の材料を集める時以外は、いつも高い枝にいる。

数が少なく分布も限られているので、見る機会の少ない鳥である。

餌はハムシやゴミムシ、テントウムシなどの昆虫が主で、繁殖期には番で行動するが、渡りの時には大群でいるこ



ヒヨドリ

とが多い。

(15) ヒヨドリ科の鳥

最近になって増えて来た鳥の一種で、山地から村落付近まで、どこでも普通に見られるようになった。

ヒヨドリの名のおこりは、その鳴き声が、「ヒィーヨ、ヒィーヨ」と聞こえるところから名づけられたものである。夫婦仲のよい鳥でいつも二羽で行動していることが多い。また一羽が梢で甲高く鳴くと周囲にいた仲間が寄ってきて群れになり、にぎやかに鳴き交うこともある。

本村では夏季には数も多いが、冬になると暖地へ漂行するため極端に少なくなる。

(16) モズ科の鳥

普通見られるものには、モズのほかアカモズとチゴモズがいる。

モズは夏には山地に多いが、寒くなると平地へ漂行するものが多い。

モズの繁殖期は早く三月下旬ころから始まり五月には雛が巣立つ。肉食性であるためにカエルやトカゲ、バッタなどのほかにスズメやカワラヒワ、アオジなどの小鳥を襲うこともある。夏の終わりがちから家族生活を解き、それぞれ分散してなわばりを持つようになるが、この時のなわばり宣言が「モズの高鳴き」である。本村では、夏季には疎林や草原、村落付近で生活しているが、冬季には暖地へ移動して少なくなる。

(17) ミソサザイ科の鳥

ミソサザイは、俗にミソツチョとかミソクグリとか言われている小型の鳥で、夏は亜高山帯に生息しており、冬に

なると平地へ漂行して越冬する。

本村では、樹海内やよく繁った密林中に多く、四月ころから繁殖のために囀（さえず）る声をよく聞く。大変美声

で「チチ、チチツ、チヨツ、チヨツ、チチ・チチ・チチ・チヨツ・チヨツ・チチヨロ・チチチヨロ・チヨロリ・チイチヨロロ：」などと長く鳴き続ける。

高木の根本や溶岩の岩陰に藓（こけ）を使って球形の巣をつくり、一度に四〜五羽の雛を育てる。六月ころ巣立ちする若鳥を捕らえて飼う密猟者が後を絶たないのは残念である。

(18) イワヒバリ科の鳥

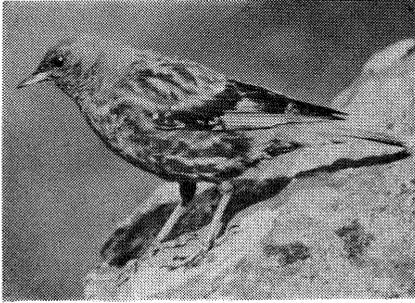
富士山頂のように標高が高くなると、植物もほとんど生育しなくなるため、鳥類は住まなくなるが、それでも二〜三種類の鳥が姿を見せる。その一つがイワヒバリである。

この鳥は、夏の間、高山の登山道沿いに群れていて、岩礫（れき）の間やお花畑の中で餌をあさる。富士山では五合目から八合目あたりに多く、登山者の近くにも寄ってきて、残パンをついばむこともある。岩頭から岩峰へと飛び移りながら、美声で囀っていることが多い。

冬季になると平地へ移動して来て越冬する。

(19) ヒタキ科の鳥

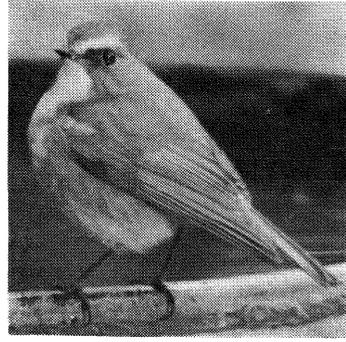
この科に属する鳥は五十二種と最も多く、大別すると、ツグミ亜科、ウグイス亜科、ヒタキ亜科などに分けられる。



イワヒバリ



ミソサザイ



ルリビタキ

本村に生息するツグミ亜科の鳥には、コマドリをはじめ、コルリ・ルリビタキなどの小型の鳥と、マミジロ、トラツグミなどの中型の鳥とがあり、合わせて十種類である。

コルリは、スズメくらいの大さきで、背面がるり色をしている。夏鳥として五月初ろ渡来し、低山帯から亜高山帯にかけての密林中に住みつく。大変美声で「チツチツチツ・チルーチルーチルー、ジョリ、ジョリ、ジョリ」とよく鳴く。

警戒心が強く、藪の中に潜んでいて、めつたに姿を見せることがない。本村では、林道沿いの叢林中で鳴き声を耳にする。

ルリビタキは、亜高山帯から高山帯にかけて生息している漂鳥で、冬季には低山や平地に移動して生活する。雄の頭部や背面は暗いあい色で、目の上の白い眉斑（びはん）がよく目立つ。

富士山の四合目から五合目にかけては、数も多くて繁殖期にここを訪れると「ヒヨロロヒヨロロ・ヒヨロロ・ヒヨロロ」という涼しげな囀りが、にぎやかに聞こえてくる。

コマドリは、鳴き声特に美しく、日本三名鳥の一種に数えられている。その鳴き声は駒のいななきに似ていて張りがありつややかである。この鳥は沢沿いの密林中に生息して雛を育てるが、美声であるために密猟者に捕らえられて小鳥屋に売られるケースが多い、そのために数が少なく、よほど山奥に行かないと声を聞くことができない。

ジョウビタキは、冬鳥として十月下旬ころ北国から渡ってくる。雄では頭が銀白色で、背中が黒く、腹側は鮮やかな橙色をしており、風切羽に一对の白い斑が見られる。

あまり寒い地域には姿を見せないが、日だまりの暖かな場所には毎冬訪れて、春まで住みつく。いつも単独で生活しており生け垣や低い枝に止まって、地上の餌を見つけている。時々頭をビョコと下げたり、体をピクッとふるわせるしぐさをする。本村では村落付近や開けた林で見られる。

ノビタキは、夏鳥として高冷地の草原などに渡ってくる。雌は頭と背面が黒く、腹側が白いトーンカラーで低木

の頂などに止まって「ヒッヒッ、チャッチャツ」と体を動かしながら鳴いている。本村では、富士山三合目の草原で見られる。

マミジロは、ムクドリほどの大きさで、雄では全身が黒く、眉の上に白くてよく目立つ眉斑がある鳥である。

夏鳥として四月下旬から五月にかけて渡来し、主に亜高山帯の密林中に住みつく。地上にいることが多く、木の枝に止まることが少ない鳥で落ち葉をひっくり返して昆虫を啄んでいる。警戒心が強く、めったに姿を見せない。本村では、富士山四合目の密林中で声を聞く。

トラツグミは、全身に虎の模様似た斑のある鳥で、主に低山帯から亜高山帯にかけて生息している。大変無気味な声で鳴く鳥として、古くから「鶴」（ぬえ）として知られている。その鳴き声は「ヒョーッ、ヒョーッ」と消えてしまうような淋しい感じのもので主に夜明けに鳴くことが多い。

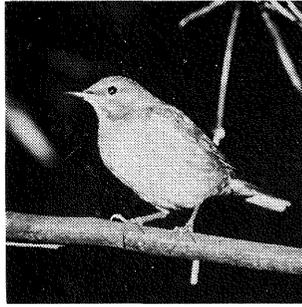
冬になると越冬のために低地へ移動し、人家近くのゴミ場などにも姿を見せるようになる。



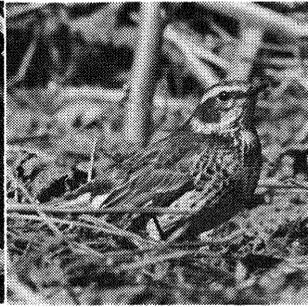
トラツグミ



ノビタキ



シロハラ



ツグミ

が多く、地上でゴミムシやハサミムシなどの昆虫のほか、ノイバラやサルトリイバラなどの実も食う。本村では、ジラゴンノ付近で見られる。

ツグミは、冬鳥として十月下旬ころ、大群で渡ってくる。晩秋に熟れた柿の実に集まるツグミの群れを見ることが多い。厳冬期になると分散して農耕地や草原に出て餌をあさるようになる。雑食性であり、昆虫類をはじめ雑草の種

クロツグミは、夏鳥として五月ころ渡ってくる鳥で、低山帯から亜高山帯にかけての広葉樹林中に住みつく。

森一番の歌い手といわれるほどの鳴き上手な鳥で、キヨロ・キヨロ・キヨイ・キヨイ・キヨキヨ・キヨコ・キヨコピイなどと変化に富んだ美しい声で鳴く。本村では林道沿いの密林中に生息している。

アカハラは、名のように腹が橙赤色で背中がオリーブ褐色をしている漂鳥である。本村では数も多く、各地の森林中に住み早朝より「キヨロン・キヨロンチュリー」とにぎやかに鳴く声がよく聞かれる。

地上で餌をあさることが多く、ひよこひよこ歩いては立ち止まるといふしぐさを繰り返す。餌は昆虫類が主で、コガネムシの仲間やハネカクシ・ハンミョウなどを捕食する。

シロハラは、背面はオリーブ褐色だが、腹側は汚白色をしている。冬鳥としてシベリヤやウスリー地方から渡って来て日本で越冬する。大変警戒心の強い鳥で、日中は藪の中で餌をとり、日没ころになると開けた場所に出てくる。単独でいること

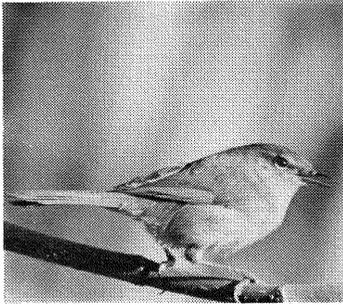
子、木の漿果や果実なども好んで食う。外敵が近づくと「クエツ、クエツ」と二声鳴いて飛び立つことが多い。本村では村落付近や開けた草原、農耕地などに多く、俗にチョウマと呼んでいる。

(2) ウグイス亜科の鳥

この鳥のグループは、体の色がいわゆるウグイス色で、どの種類もよく似ているが、鳴き声は大きく違って区別が付きやすい。

ヤブサメは、夏鳥として四月下旬ころ南の国から渡ってくる。体が小さいうえに、いつも藪の中にいるから姿を見る機会は少ないが、「シイ・シイ・シイ・シイ・シイ」という虫の声に似たか細い声でよく鳴くので、住み場所が容易にわかる。六月から七月にかけての繁殖期には、各地の林でこの声を聞くことができる。

ウグイスは、冬の間低地へ移動していたものが、初夏になるとだんだん高冷地に移って来る。平地では五月ころが囀りの最盛期であるが、本村では少しずれて六月ごろになる。

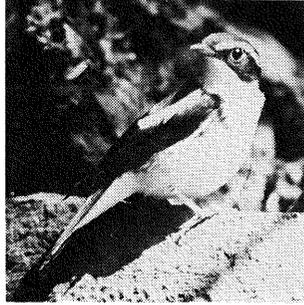


ウグイス

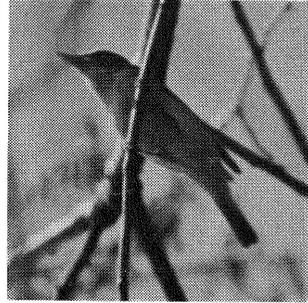
この鳥は四季を通じて雌雄が単独で生活するが、巣づくりや育雛は、二羽が協力して行う。繁殖期以外はいつも森林中の下生えの中や繁みを移り歩き、小虫などをついばんでいる。

メボソムシクイは、夏季に亜高山帯に渡ってくる夏鳥で、渡ってくると間もなく「チョリ・チョリ・チョリ・チョリ・チョリ」と涼しげな声で、リズムカルに囀るようになる。

体は大きさも色彩もウグイスによく似ており、鳴き声を出さないと見違えてしまうほどである。六月ごろ、森林中の崖や草間に藓類を使って球形の巣をつくり雛を



キビタキ



センダイムシクイ

(2) ヒタキ亜科の鳥

キビタキは、夏鳥として五月ころ渡ってくる。低山帯の広葉樹林や針広葉混交林に住みつき「ピーピー・ピョコピョコ・ピリヒョコピー・チツチリリ・ツク・ツク・オーシーシクシク」などと複雑な美声で鳴く。雄の頭部は黒く、目の上に鮮黄色の眉斑がある。背面は黒色であるが、喉や胸、腰は鮮やかな橙黄色をしている。

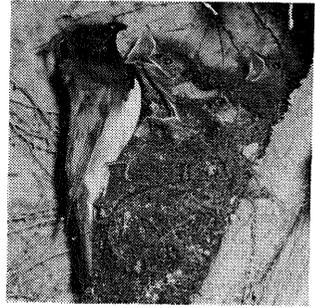
育てる。本村では特に富士山五合目あたりに多く生息している。

センダイムシクイは、四月下旬から五月にかけて渡って来る夏鳥で、低山帯から標高千四百メートルあたりの森林に住みつき、まだ新しい若葉が伸び切らない木の枝で「チイチヨチイチヨ・ビー」などと鳴き出す。囀るのは専ら雄で、雌は巣づくりや抱卵、育雛などを担当する。

大きさは形、色彩などは、ウグイスに酷似しているが、目の上の眉斑がウグイスより白っぽいので区別はつく。本村では、ジラゴンノ周辺の林には比較的多い。

クイタダキは、日本に住む鳥のなかでは最も小さい鳥で、夏季には亜高山帯から高山帯にかけて生息している。その名のように頭頂にキクの花を思わせる黄色の斑がある。

五月下旬ころシラビソやコメツガなどの枝にクモの糸でつり下げた巣をつくり、雛を育てる。冬期になると低地へ移動して、シジュウカラやコガラと交じって、林の中を巡回するようになる。本村では、四合目から五合目にかけて分布しており、冬季には平地へ下る。



オオルリ

本村では富士山に通ずる富士山各登山道沿いの林で鳴き声が聞かれる。

オオルリは、声の三名鳥の一種である上に、色彩も美しい鳥で、雄は頭から背にかけてはコバルト色で、顔や喉、胸は黒色、腹側は白い。夏鳥として五月ころ渡って来て、高く突き出た梢に止まって「ピキーリ、ポペーレ・ポピル・ピル・リ……」などと美声を張り上げて終日囀る。平坦な林には住まず、崖や溪谷に沿った林を好み、崖の窪みや木の根元に藓を使って皿型の巣をつくる。本村では富士山四合目付近にたくさん渡ってきたが、飼鳥として売買する密猟者の横行で大変減っ

てきている。

コサメビタキは、目立たない色彩の鳥で、スズメを一まわり小さくしたくらい大きさである。

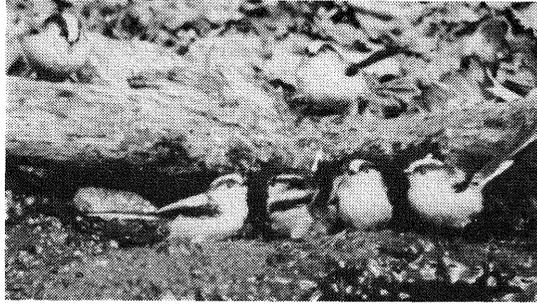
夏鳥として四月下旬ころ渡来し、雑木林や落葉広葉樹林に住みつく、六月ころ木の梢近くや、長く横にのびた枝上に、ウメノキゴケを使ってお椀型の巣をつくる。巣は木のこぶのようにしか見えないので発見することがむずかしい。本村では、標高千躰付近の林の林縁で繁殖している。

(22) エナガ科の鳥

この科に属するものとしてはエナガ一種だけである。

この鳥は、真綿を丸めて作ったぬいぐるみのような愛らしい鳥で体は白っぽく、背中や眉斑は黒いが、背面はブドウ色をしている。特徴としては尾が長く、それが柄杓（ひしゃく）の形を思わせるところから柄長（えなが）と名づけられたといわれている。

この鳥の繁殖は四月ころから始まり、藓を使って長楕円形の球型の巣をつくり、内部にたくさん鳥の羽毛を敷き



エナガ

つめる。巣づくりには、親鳥以外の仲間のエナガもヘルパーとして協力することが知られている。本村では、標高千五百呎以下の林なら、どこでも住みついており、「ジュリ・ジュリ」と濁った声で鳴き交いながら、餌を探している群れを見ることが出来る。

(2) シジュウカラ科の鳥

この科に属する鳥の名前は、どれも〇〇カラで終わることから、俗にカラ類とも呼ばれている。

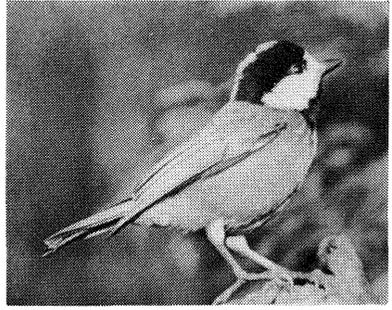
コガラは、カラ類の中では体が小さいということで、小雀(こがら)と呼ばれるのだが、留鳥として低山帯から亜高山帯にかけて生息している。頭は黒くベレー帽をかぶったように見え、胸から腹にかけては白色で、喉には蝶ネクタイをつけたような黒い模様が見られる。

繁殖期になると「フチー・フチー・フチー」と金属的な声で囀る。冬季になると、シジュウカラやエナガに交じって群れをつくり、各地の林をまわりあわく。

ヒガラは、体の色彩がシジュウカラによく似ているが、体が小さく、頭に小さな冠羽があることや、喉の模様が三角形の蝶ネクタイ型であることなどで区別ができる。

また鳴き声も「ツピン・ツピン」とか「チペチペチペ」などと早口で、かなり違っている。主に低山帯から亜高山帯にかけての針葉樹林や混合林に住んでいて、森林の害虫を捕食している。本村では、比較的数の多い鳥である。

ヤマガラは、カラ類の中では体が最も大きく、色彩も豊かで、頭や喉が黒い。額や頬は淡い褐色で、腹側や肩のあ



ヤマガラ

たりは栗色で美しい。鳴き声は「ツーツーピーーツーツーピーー」と少し濁った感じに聞こえる。

主に低山帯の広葉樹林に住み、木の幹をぐるぐる回りながら餌をとっている。餌はゴミムシやガの幼虫が多いが、サクランボやツルマサキの実、マツヤスギの種子なども食う。

キツツキの古巣や樹洞に藓を運び入れて巣をつくるが、巣箱をかけてやるとよく利用する。本村では樹海内に特に多い。

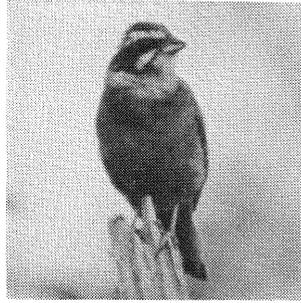
シジュウカラは、亜高山帯以下の林ならどこでも見られる鳥で、森のレンジャーといわれているように、森林の害虫を駆除するのに大きく役立っている。一年間にシジュウカラが雛に与える害虫の数は十万匹にもなるという。

この鳥の背面は青灰色で、腹は白く、喉から腹にかけて黒のネクタイをつけているような模様が目立つ。春になるといち早く木の枝で「ツツピーー・ツツピーー」と声を張りあげて囀り始める。

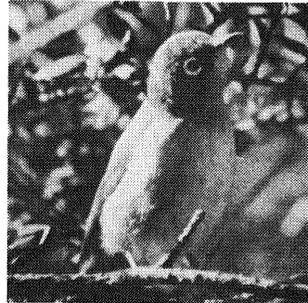
巣箱をかけてやるとよく利用し、中にたくさん藓を運び入れて巣づくりをする。繁殖期以外は群れでいることが多く、冬季になれば、ヒガラやメジロ、コゲラなどと一緒の混群をつくる。

(24) ゴジュウカラ科の鳥

ゴジュウカラは一科一種で、山地の落葉広葉樹林に多く見られる鳥である。平地の林には住まず、ブナやミズナラの林を好み、太い幹の周囲を上ったり下りたりしながら、幹についている虫を探している。背面は青灰色で腹側は白く、下尾筒（腹の側で尾に近い部分）は栗色をしている。



ホオジロ



メジロ

春先になると、大きな声で「フィー・フィー・フィー・フィー・フィー」と何度も続けて囀る。本村では、富士山の三合目から四合目あたりに多い。

(25) メジロ科の鳥

この科に属する種はメジロ一種である。

目のまわりにはつきりした白い輪があり、遠くからでもよく目立つ。主に常緑広葉樹林や落葉広葉樹林に住んでおり、樹木につく虫を捕食している。そのほか、甘いものが好きで、ツバキやサクラの花の蜜を吸ったり、よく熟れた柿の実やイチジクに集まったりする。

五月ころ、低木の小枝に蘚やイネ科の茎や穂、鳥の羽毛などを綴って、ハンモック式の巣をつくる。冬は平地に移動し、シジュウカラやヒガラなどに交じって、林をまわりあるく。

(26) ホオジロ科の鳥

この科に属する鳥は、大きさや形がスズメによく似ていて、餌も育雛期以外は植物質が主なものになる。

ホオジロは、名のように頬にあたる部分(頬線)が白く、全身は赤みがかった褐色で、尾が長く、尾の外側の白い羽が、飛び立つ時によく目立つ。繁殖期以外には群れていることが多く、農耕地や草原、よく開けた林などに住んでいる。春先になると、木の梢や電線に止まって「チョン・チン・ピーツツ・チョン・チュリーチョン」などと、よく通る声で囀り始める。それまでは、地味な色で目立たなかったのに、この季節になると、にわかに人々の注目をあび

るようになる。本村では俗にセツトウと呼んでおり、普通に見ることができない。

ホオアカは、頬が赤いほかは、色彩がホオジロに似ており、区別しにくい。鳴き声が大きく違っていることと、住んでいる場所が山地の高原や低木草原などであることから判別できる。鳴き声は「チョン・ピチー、チョン・ピチー」と短く、ホオジロのように声を張り上げない。

夏の間は主に昆虫類を食っているが、冬季には雑草の種子などをついばむ。ホオジロに比べると、数も少なく、住んでいる範囲も広くはない。

カシラダカは、姿・形・色彩がホオジロに酷似していて、近づいて見ないと誤認することもある。ただし、ホオジロやホオアカが留鳥・漂鳥であるのに対して、カシラダカは冬鳥であり、晩秋にならないと姿を見せないことや、必ず大きな群れになっていることなどが識別のポイントになる。また頭の上には、短い冠羽があり、驚いた時などには、これを立てる習性がある。

主に農耕地や休耕地に群れていて、雑草の種子や落穂などを探しているが、警戒心の強い鳥で、一羽が飛び立つと次々に舞い上がり、「チツ・チツ・チツ」と鳴き交いながら遠くへ飛び去ってしまう。

ミヤマホオジロは、冬鳥として北国から十二月ころ渡ってくる。四〜五羽から数十羽の群れになっていることが多く「チチツ・チツ」と小声で鳴きながら、地上にこぼれた雑草の種子や木の実を啄んでいる。

ホオジロとの区別は、頭に冠羽のあることと、顔に淡い黄色の部分があることである。カシラダカに比べると数は少なく、見る機会も少ない。本村では別荘地帯に少数のものが姿を見せる。

アオジは、頭が暗緑色で、背面は緑褐色、腹側は淡黄色の中に黒い斑点のある鳥である。漂鳥として、夏は高原や標高の高い草原などに住んでいるが、冬には平地に下って冬を越す。

「ン・チュイーン」と鳴き交うことが多い。

四月ころになると、いくつかの群れが寄り集まって大群をつくり、北国へ戻っていく。

ハギマシコは、冬鳥として十一月ころ北国から渡ってくる。雌は全身が黒っぽく、背や腰・肩羽などが暗紫色で、腹にはハギの花のような模様が見られる。

渡って来た時から群れで生活し、雑草類の種子をついばんでいることが多い。あまり人を恐れず餌を探している時は、かなり近くまでやってくる、本村では、富士山三合目から四合目あたりのよく開けた林や草原に飛来する。

オオマシコは、ハギマシコを一まわり大きくしたくらいの大きさで、雌は体全体がピンクがかった赤色。翼と尾は濃い褐色で腹は白っぽい。背中には黒の縦斑がたくさんある。

山地の雑木林や林縁の草原に、五〜六羽の群れでやってきて、地上にこぼれた雑草の種子などをついばんでいる。数は大変少なく、警戒心も強いので、めったに見られない鳥である。

ベニマシコは、スズメよりやや小さめで、雌では、胸や腰、額がバラ色で、頭や喉は赤味がかった銀白色の美しい鳥である。冬鳥として北国からやってくるが、北海道でも繁殖の知られている鳥である。



ベニマシコ

いつも五〜六羽の群れで藪の中をくぐりながら雑草の種子をついばんでいる。中でもイノコヅチの実が大好物で、この鳥を探す場合にはイノコヅチのある場所を待っているといふ。警戒心の強い鳥で、人が近づくと「ピイピッ、ピイピッ」と甘い鳴き声を出しながら、遠くへ飛び去ってしまう。本村では富士山の二合目から三合目にかけての草原や雑木林の中で姿を見かける。

ウソは、亜高山帯をすみかとしている漂鳥で、頭がやや大きく、嘴が太めでブンチョウに似た体つきをしている。雄では体が青灰色で、頭・翼・尾は黒く、頬と喉が赤い。鳴き声が人の吹く口笛によく似ており「フィー・フィー」と聞こえる。口笛の古語はオソだから、この言葉がなまってウソと名づけられたようである。

この鳥は春先に、サクラの花芽を好んで食うという習性があり、被害を与えることもある。冬になると低山や平地の山に移動する。本村では、富士山の三合目から四合目に多く住む。

イカルは、体がずんぐりしていて、黄色の大きな嘴をもっている。頭は黒く、翼と尾が紺色をしている。低山帯の広葉樹林をすみかとするが、亜高山帯にも姿を見せることもある。よく澄んだ声で「キイーコ・キイー」と鳴き、二〜三羽で群れをつくり、高木の梢を渡りあっている。

冬になると平地に移動し、学校や公園の樹にも姿を見せる。本村では、樹海内に少数が生息している。

シメは、イカルによく似たずんぐり型の鳥であるが、体は二まわりほど小さく、尾も短い。冬鳥として十月ころ渡ってくるが、群れていることはなく、いつも単独である。体は褐色をしておりピンク色の大きな嘴をもっている。

マツやモミジ・エゴノキ・ムクノキなどの種子をついばむほか、ブドウの枯れ葉なども食う。「チツチツ」と鋭い声で鳴き、枝上から飛び去ることが多い。

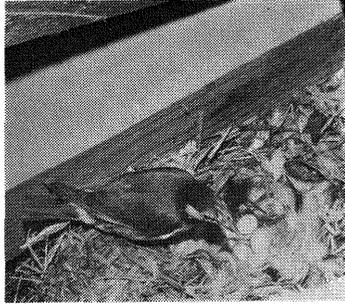
(28) ハタオリドリ科の鳥

かつてこの科はキンバラ科となっていたが、近年になって名称が現在のように変わった。

スズメは、この科を代表する鳥で、人間とのかかわりも深く、よく知られているので記述は省略する。

(29) ムクドリ科の鳥

この科の鳥は日本には二種類がいるが、本村においても、次の二種が確認されている。



ムクドリ

コムクドリは、本州中部以北の山地に夏鳥として渡ってくる。背面は黒褐色をしているが、頭から胸にかけてと、腰の部分が汚白色である。また雄の頬には赤褐色の斑がある。繁殖期には樹洞やキツツキの古巣などを使って営巣し、一回に五〜六羽の雛を育てる。本村では数は少ないが、夏季に小さな群れが見られる。

ムクドリは、山地よりも平地に多い鳥で、繁殖期には人家の屋根や建物の隙間などに、たぐさんの藁や羽毛を運び入れて営巣する。八月ころになると、巣立ちした雛が親とともに大群をつくり、空いっぱいには乱舞する。

秋には果樹に被害を与えるので、農家からは害鳥として追われるようになる。本村では、平地より数は少ないが、小さな群れが、三三、五五と飛びまわっている。

(30) カラス科の鳥

この科の鳥は、環境への適応性が強い上に、他の小鳥の巣を襲って、卵や雛を食うなど性質の荒い面もある。

カケスは、平地から亜高山帯にかけて生息している漂鳥で、繁殖期以外は群れで生活している。雑食性の鳥で、ナラ・クヌギの実のほか、昆虫類、両生類なども好んで食う。

秋になると、冬の餌不足に備えてドングリやナラの実を蓄える習性があり、樹の洞や土中に「埋めぐり」をする。冬季になると平地へ移動し、社寺林や雑木林に群れで生活するようになる。本村では、どこの林にも生息しているが、十二月ころから低地へ移動して、数が少なくなる。

オナガは、近年になって数が増えてきた鳥で、主に村落付近に生息するものが多い。

頭が黒く、ベレー帽をかぶったようで、背面は青灰色をしており、腹側が白い。長い尾をいつも動かしており、



ホシガラス

五ノ六羽の群れで「ゲェーイ・ゲェーイ」と鳴き交っているのをよく見かける。本村では、夏の間姿を見かけるが、冬季には暖地へ移動してしまうようである。

ホシガラスは、高山帯に住む鳥で黒褐色の地に白い斑点が体全体に見られる。夏の間は五合目付近に多く、梢で「ガァー・ガァー」と、しわがれ声でよく鳴いている。シラビソ・コマツガ・トウヒなどの種子を主食としているが、昆虫類や両生類なども食う。時として登山者の捨てた残飯をあさることもある。秋の終わりごろから山を下り、低山や平地の林に飛来し、マツの種子やナラの実を探して食う。

ハシボソガラス・ハシブドガラスは、嘴の太さで区別するが、前者は嘴が細く、後者は太い。生息場所は同じで、農耕地や山林のどこにでも住んでいる。時に両者が入り交じっている場合もあり、両者の間にはつきりした「すみわけ」は見られない。

どちらも雑食性で生活力が強く、外敵も少ないところから各地で増え続けている。しばしば農作物を荒し、人間のひんしゆくを買っている。本村でも、いたる場所に現れ、ゴミ箱をあさったり、トウモロコシに被害を与えたりする。

両生類

両生類には有尾目（イモリ・サンショウウオ）と無尾目（カエル）とがあるが、本村ではイモリやサンショウウオの生息については情報もないので、カエル類についてのみ記述することとする。カエルの生活は水に大きく依存しているが本村の場合、常時水をたたえた沼や流れがほとんどないので、種類数・個体数ともに少ない。

- (1) ヒキガエル



ヒキガエル

湿気が多い森林中に生息しており、雨天の時や雨上がりによく林道に姿を現す。詳しくはアズマヒキガエルであるが、繁殖期以外は水に入らず、陸上で生活している。

日中は草むらや倒木の下などにひそみ、夕方から夜にかけて活動をはじめ、昆虫や小動物を捕食している。

(2) ヤマアカガエル

個体数は大変少ないが、山沿いの地域に生息する種類で、晩春から秋までは主として森林の地上で生活していて、雨上がりには林道でもよく見られる。産卵場所はどこか不明だが、日当たりの良い水田や湿原などが選ばれる。

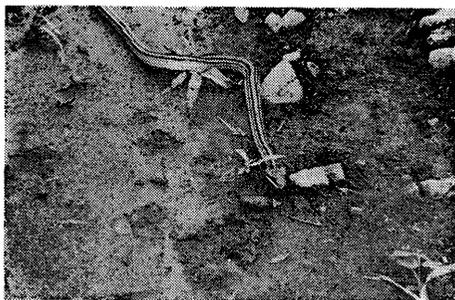
(3) アマガエル

標高の低い山や村落付近で普通に見られる種類で、低木や草の上で生活している。五、七月にかけて水田などの浅い上水に産卵し、ふ化したオタマジャクシは夏には子ガエルになって上陸する。アマガエルの体色は、周囲の色に合わせて変化し、保護色になる。雨が降り出す時には「クアァクァッ」と一斉に鳴き出す。本村では集落付近に生息している。

は虫類

この仲間には、ヘビ類・トカゲ類・カメ類が含まれるが、本村では野生のカメは生息しておらず、トカゲ類も大変少ない。ヘビ類ではアオダイショウをはじめ、シマヘビ・ヤマカガシ・ジムグリ・マムシなどが生息している。

(1) アオダイショウ



シマヘビ

人家の周囲、農耕地、草原などどこでも住んでいる。大きなものになると全長一・五〜一・八メートルにもなる。

餌はネズミ類や鳥類が主で、農家の天井裏や高い木にのぼって獲物をとる。寒くなると冬眠に入るが、本村は高地であるため平地より早く冬ごもりする。

(2) シマヘビ

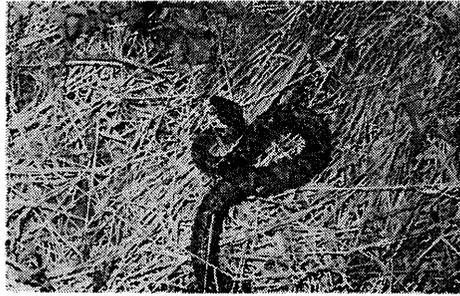
麦わら色の体に四本の黒い条が見られるところから縞ヘビと名づけられた。敏捷なヘビで、外敵に合うとすばやく逃げて姿をくらます。

主食は両生類、鳥類、小型ほ乳類などだが他種の小型のヘビまで食う。気が荒く、人間に対しても攻撃ポーズをとってかみつくこともある。村内の低地に分布しているが、数は少ない。

(3) ヤマカガシ

体長は六〇〜一二〇センチくらいになる。主に水田や河川の周辺にいて、カエルや小魚を食う。時に水中にもぐり、獲物を捕えることもある。シマヘビのように人を攻撃することはないが、追いつめられると頸の部分を広げて頭を下げ威嚇態勢をとる。

ヤマカガシは毒ヘビ扱いをされてはいないが、深くかみついた場合には頸部にある毒腺から奥歯に沿って毒が注入されることがあり、咬症被害によって死亡した例もある。本村内では、カエルの多い地域に分布しているが数は多くない。



マムシ

(4) マムシ

毒ヘビとして恐れられている半面、強壯薬として珍重する習慣があるため、発見されたものはほとんど捕獲されて薬ヤクにされてしまう。

マムシは見つかっても他のヘビのように逃げ足が早くないし、逃げないでうずくまるものもいる。鼻孔と眼の間にあるピット器官で外敵の体温を感じると、すばやくかみついて毒を注入する。

とぐろを巻いて攻撃態勢をとった時は危険である。村内では溶岩地帯に多く分布している。

(5) ジムグリ

日陰のやや湿った所を好んで住んでいる。臆病なヘビで人を見るとすぐものかげに隠れたり、地中にもぐったりする。ハタネズミやヒミズが主食で夜間活動するこ

とが多い。

山地帯では体の色が赤っぽいアカジムグリが見つかることがあるが、これはジムグリの個体変異であると思われる。ジムグリは暗い森林中に分布している。

(6) シロマダラ

背中にある黒褐色の横斑がマムシの斑とまちがえられることが多く、俗ぞくにニタリ（マムシに似た）とも呼ばれている。数は大変少ないが分布は広く、各地で発見されている。本村でも魔王神社の周辺では何匹かが捕えられたとの報告がある。

この蛇は夜行性でものかげに潜んでいることが多く、餌は主としてトカゲ類であると言われている。

(7) トカゲ

日当たりのよいガレ場や石垣、土手などに住みついていて、日光浴をしているものをよく見かける。背中の鱗が細かく滑らかでよく光る。

幼体は黒地の背中に黄白色の五本の条があり、尾のつけ根から先端にかけて鮮やかな青色をしている。これらの斑や色彩は成長するに従って消失し、やがて明るい茶色に変わる。

トカゲの餌はミミズや小昆虫で、物かげにかくれていて近づいた獲物に飛びかかってこれを捕食する。本村内では低地で普通に見られる。

(依田正直)

第四節 鳴沢村の昆虫類

昆虫類は、国内においても、毎年といつていいほど新種が発見されているように、まだまだ未解明の部分が多い。それは、その種類があまりにも多く、調査が追いつかないのが大きな要因である。

鳴沢村に限つてみても同じことがいえ、比較的調べられている蝶類やカミキリムシ類でさえも、まだ確認される可能性のある種も多い。他の昆虫にいたつては一部が記録されているにすぎない。そこでここでは、蝶類・カミキリムシ類を中心として、他は記録のあるもののみをまとめておくこととする。*印は未発表記録で、(M)は宮下泰典氏の記録を、無記入は筆者の記録を表わす。なお、富士山のカミキリムシ相についてご教示頂きました山梨大学の池田清彦助教、甲虫類の未発表記録を教えて頂いた宮下泰典氏をはじめ、いつもお世話頂いている甲州昆虫同好会の会員諸氏に深謝したい。

I 蝶類

本村の蝶相は大きく分けると、足和田山塊と富士山北部一帯に分けることが出来る。

足和田山塊は、地質的には新第三紀の地層で、御坂山系の出島の色彩が強い。それは、富士山の一部にしか分布していないツマジロウラジャノメやウスバシロチョウが分布していることにも現れている。しかし、その種類組成をみるとすべて富士山の蝶相と一致し、その分布が御坂山脈または天子山脈に達しているが、富士山におよんでいないものとして挙げられているキバネセセリ・スジグロチャバネセセリ・ヒメギフチョウ・ウラミスジジミ・ウラクロシジミ・ジョウザンミドリシジミ・クロツバメシジミ・コヒョウモンモドキ・ヒョウモンモドキ・コヒオドシ・ウラジャ



チャマダラセセリ

セセリチョウ科

1 チャマダラセセリ

標高一千七百呎以下に広く分布する

が、個体数は少ない。春型と夏型があるが、夏型は標高の低い所だけで発見されており、数も非常に少ない。

2 ミヤマセセリ

亜高山帯以上を除く全域に広く分布。足和田山塊は特に多い。

3 ダイミョウセセリ

部落付近を中心に、標高一千呎以下に普通にみられる。

4 アオバセセリ

一千三百呎以下に広く分布すると思われるが、富士桜高原と大田和に記録があるのみである。

5 ギンイチモンジセセリ

標高一千五百呎以下に広く分布。春型のみで夏型はみられない。

6 ホシチャバネセセリ

足和田山塊で記録されているのみ。コチャバネセセリ 標高一千七百呎以下のササ類のみ

7

れる所に多い。春型が多く夏型は少ない。

8

ヘリグロチャバネセセリ 標高一千五百呎以下に分布。数は多くない。

9 アカセセリ

記録は少なく軽水林道と大沢（二千九百呎

ノメ・クロヒカゲモドキの12種（高橋真弓・一九七一より、スギタニルリシジミを除く）は、富士山同様まだ記録がない。そうした点では、御坂系要素と富士山の要素が互いに影響し合っている地域ともいえ興味深い。

富士山は、日本一の高山であるが、地質的な新しさから高山性の蝶（いわゆる高山蝶）は分布していない。しかし、蝶相は豊かで特に標高一千六百呎以下の地域は豊富な蝶相を持つ。富士山の蝶相の特徴としては、温帯非森林性の蝶類が多いことが挙げられる。これらの種のほとんどは御坂山系にも分布するが、富士山における個体数の多さは特筆される。また富士山の鳴沢村地域だけで百種に近い種が分布しているが、これは山梨県内での百四十六種の約三分の二にあたり、これからも富士山の蝶相は山梨県を代表する蝶相といえよう。

以下、鳴沢村内で記録された種名とその分布の概略について述べる。

地点)から記録されている程度。大沢のものは下から吹き上げられたものと考えられる。

10 コキマダラセセリ 標高一千五百呺以下の草地に普通に見られる。

11 ヒメキマダラセセリ 標高一千七百呺以下の森林周辺にみられる。

12 キマダラセセリ 部落周辺のみにもみられる。

13 オオチャバネセセリ 富士山西部二ツ山周辺に多くみられた。他では少ない。

14 チャバネセセリ 静岡方面から飛来した個体のみが見られるようで、九月〜十月に部落周辺でみかける。

15 イチモンジセセリ 全域に広く分布し、個体数も多い。移動性も強く、亜高山帯上部のお花畑でも見られ、富士山頂でも記録がある。

アゲハチョウ科

16 ウスバシロチョウ 大田和く鳴沢の足和田山塊の山裾に生息している。以前は富士山には分布していなかったが、

富士桜高原で発見されるなど、分布を広げている。

17 アオスジアゲハ 暖地系の種で静岡方面から飛来したと考えられる個体が大田和で目撃されているのみ。

18 キアゲハ 草原に広く分布。雄は小高い丘に集まる性質があり、足和田山頂や紅葉台などに集まるのを見ることが

出来る。

19 アゲハ 標高一千六百呺以下に広く分布。

20 モンキアゲハ 暖地系の種で、鳴沢林道と富士林道に記録があるのみ。

21 クロアゲハ 標高一千呺以下の部落付近に分布。本村では数は少ない。



オナガアゲハ

22 オナガアゲハ 標高一千七百呺以下の森林地帯に広く分布。富士桜高原付近に多い。

23 カラスアゲハ 標高一千七百呺以下の森林地帯に広く分布。アゲハチョウ科

では最も普通にみられる。

24 ミヤマカラスアゲハ 前種と同様に広く分布するが、前種より少なく低標高地では稀となる。

シロチョウ科

25 ヒメシロチョウ 標高一千四百呺以下に分布するが、局的であまり大きな移動はないようである。

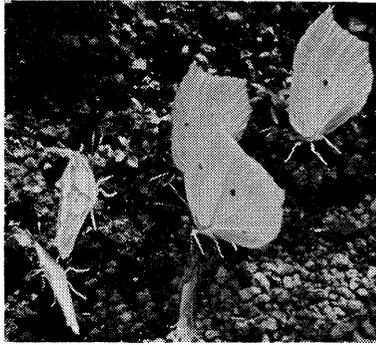
26 モンキチョウ 各地の草原に広く分布するが、耕作地周

辺に多い。移動性も強く富士山五合目付近でも確認されている。

27 ツマグロキチヨウ 暖地系の種で、秋型のみが大田和付近で記録されている。

28 キチヨウ 標高一千五百呺以下に広く分布する。富士山頂でも記録がある。

29 ヤマキチヨウ 春には越冬個体が標高一千七百呺以下に広く見られるが、夏型はあまりみられない。



スジボソヤマキチヨウ

30 スジボソヤマ

キチヨウ 標高一千九百呺以下

に広く分布し、個体数も多い。

31 エゾスジグロ

シロチヨウ 次の二種を含むシ

ロチヨウ属の中で最も個体数が多く、ほぼ全

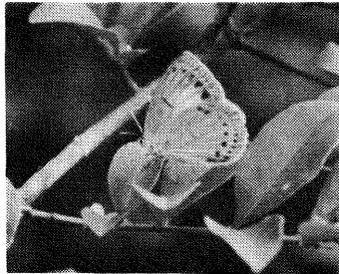
32 に分布。富士山御中道付近で見られるのはほとんど本種。

スジグロシロチヨウ 前種について多く、標高一千七百呺以下に普通にみられる。耕作地周辺では前種より多い。

33 モンシロチヨウ 鳴沢・大田和両部落周辺の耕作地に集

中してみられ、他では少ないが、富士山頂でも記録がある。

34 ツマキチヨウ 標高一千六百呺以下の林縁にみられる。シジミチヨウ科



ウラゴマダラシジミ

35 ウラゴマダラシジ

ミ 標高一千六百呺以下の落葉広葉樹林帯に広く分布するが、数はあまり多くない。

36 ウラキンシジミ 前

種と同様な地域に分布すると思われるが、軽水林道で記録されているだけで、数は少ない。

37

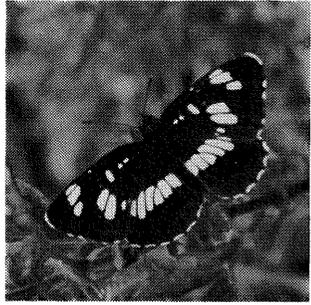
アカシジミ 標高一千百呺以下で記録されているが、分布はもう少し広いと思われる。

38 ミズイロオナガシジミ 前種と同様な範囲に分布し、前種より個体数が多い。

39 ミドリシジミ 標高一千二百呺以下のハンノキ類の林周辺にみられる。

- 40 アイノミドリシジミ ミズナラを主とする落葉広葉樹林に広く分布すると思われるが、大田和林地二合目付近に記録があるのみ。
- 41 メスアカミドリシジミ 標高一千七百呎以下の落葉広葉樹林に広く分布。ミドリシジミ類の中では最も良くみられる。フジザクラからも幼虫が見つかった。
- 42 エゾミドリシジミ ミズナラを主とする落葉広葉樹林に広く分布すると思われるが、数は少なく精進口二〜一合目と富士桜高原付近に記録があるだけである。
- 43 オオミドリシジミ 落葉広葉樹林に広く分布すると思われるが、精進口三合目、大田和付近などで確認されている。特に紅葉台付近のカシワ林で見られるミドリシジミ類はほとんどが本種。
- 44 フジミドリシジミ 日本国内において富士山ではじめて発見された種。ブナ林に広く分布すると思われるが数は少なく、精進口二合目付近で二例の記録があるのみ。
- 45 カラスシジミ 軽水林道入口のハルニレ数本から卵が発見されているだけで非常に少ない。
- 46 ミヤマカラスシジミ 標高一千六百呎以下の陽地に広く分布。ヒヨドリバナで吸蜜する個体をよく見る。
- 47 トラフシジミ 前種と似た環境に見られるが、数は前種より少ない。
- 48 ヌツバメ 標高一千七百呎以下の落葉広葉樹林に広く分布する。
- 49 ベニシジミ 耕作地周辺に多いが、精進口一合目などの草地でも少数みられる。
- 50 ゴイシジミ 落葉広葉樹林のササ類が生える所に生息すると考えられるが、個体数は少なく、精進口二合目、鳴沢林地、大田和で記録がある。
- 51 ウラナミシジミ 伊豆半島などの暖地で越冬したものが北上しながら繁殖しているものと考えられ、本村で確認されるものは移動個体か二次的に発生したものと思う。移動性が強いので全域に分布し、富士山の五合目付近でも見ることがあるが、耕作地付近（特にマメ類の畑）に多い。
- 52 ヤマトシジミ 部落周辺の耕作地に集中してみられるが、精進口二合目でも記録がある。
- 53 ゴマシジミ 標高一千五百呎以下のワレモコウを含む草地に点々と分布。部落付近に多い。
- 54 ルリシジミ 標高一千六百呎以下の林の周辺に広く分布。
- 55 スギタニルシジミ 以前は本村付近には分布しないと考えられていたが、紅葉台から足和田山にかけての尾根で発見された。最近では富士山西部からも見つかった。
- 56 ツバメシジミ 標高一千八百呎以下の陽地に広く分布し

- ている。耕作地付近に多い。
- 57 ヒメシジミ 標高二千百呎以下の草地に分布する。
 スバルライン四合目駐車場上の草地（標高二千六十呎）
 が、現在までの県下最高標高地点となっている。
- 58 ミヤマシジミ 標高一千呎以下のコマツナギを含む草地
 に分布すると思われるが、大田和付近で記録があるのみ。
- 59 アサマシジミ 標高一千五百呎以下の草地に広く分布。
テングチヨウ科
- 60 テングチヨウ 亜高山帯以下の全域に分布するが個体数
 は多くない。
マダラチヨウ科
- 61 アサギマダラ 標高一千二百呎から亜高山帯にかけて広
 く見られ、特に中腹に多い。山麓で見かけるのは稀であ
 る。ヒヨドリバナに好んで吸蜜に来る。
タテハチヨウ科
- 62 ヒヨウモンチヨウ ゴマシジミと同様な草地にみられる
 が、ゴマシジミより個体数は多い。紅葉台付近や天神峠に
 多くみられる。
- 63 ウラギンスジヒヨウモン 標高一千七百呎以下に広く分
 布するが、次種より数は少ない。
 オオウラギンスジヒヨウモン 前種と同様な地域に分布
 し、個体数も普通である。県内においては、富士山は本種
- の多産地である。
- 65 メスグロヒヨウモン 数が少なく鳴沢林道で記録がある
 のみ。
- 66 クモガタヒヨウモン 標高一千七百呎以下に広く分布す
 るが個体数は少ない。移動性も強いようで、御中道でも記
 録されている。
- 67 ミドリヒヨウモン 標高二千呎以下に広く分布。個体数
 も多い。
- 68 ギンボシヒヨウモン ヒヨウモン類の中で最も個体数が
 多く、亜高山帯以下のほぼ全域に広く分布するが、草地に
 多い。移動性も強く、富士山頂にも記録がある。
- 69 ウラギンヒヨウモン 前種同様に広く分布するが、前種
 より個体数は少ない。
- 70 アサマイチモンジ 標高一千四百呎以下の森林周辺に分
 布するが、数は少ない。
- 71 イチモンジチヨウ 標高一千五百呎以下の森林周辺に広
 く分布。個体数は普通。
- 72 コミスジ 標高一千四百呎以下の森林周辺に普通にみら
 れる。
- 73 オオミスジ ウメの木で発生しているようで、部落付近
 にみられる。
- 74 ホシミスジ 標高一千六百呎以下の森林周辺に広く分



フタスジチヨウ

布。

75 フタスジチヨウ

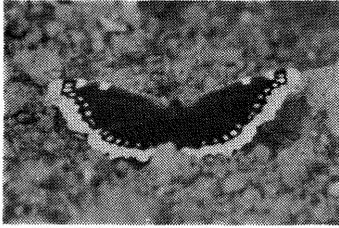
標高九百八十呎〜一千六百呎の範囲に広く分布。中腹に特に多い。足和田山塊からは未発見。

76 サカハチチヨウ

標高一千七百呎以下

に広く分布。

77 キタテハ 標高一千六百呎以下に分布するが、耕作地周辺に多い。



キベソタテハ

78 シータテハ 亜高山帯以下

に広く分布するが、数は多くない。

79 エルタテハ 亜高山帯以下

に広く分布するが、前種より更に数は少ない。

80 ルリタテハ 亜高山帯以下

に広く分布し、中腹では普通。夕方、林道上にナワバリを形成する性質を持つ。

81 キベリタテハ 亜高山帯を中心に分布し、低標高地では稀である。

82 ヒオドシチヨウ 亜高山帯以下のほぼ全域に分布する

が、数は多くない。

83 クジャクチヨウ 前種と同様の地域に、普通にみられる

が、低標高地では少ない。

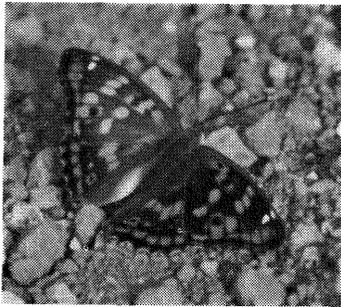
84 ヒメアカタテハ 標高一千七百呎以下に記録があるが、

数は少ない。

85 アカタテハ 標高一千七百呎以下に広く分布。数は多く

ない。

86 スミナガシ 亜高山帯以下に広く分布すると思われるが、数は少ない。御中道でも記録されている。



コムラサキ

87 コムラサキ 標高

一千七百呎以下に広く分布するが、数は多くない。

88 オオムラサキ 標

高一千呎以下の鳴沢・大田和両部落付近に少数みられる。鳴沢のエノキから越冬幼虫が見つかった

いる。
 ジャノメチヨウ科

89 ヒメウラナミジャノメ 標高一千七百呎以下の森林周辺に普通にみられる。

90 ジャノメチヨウ 標高一千五百呎以下の草地に普通にみられる。

91 ツマジロウジャノメ 足和田山頂付近と大田和で記録されているのみ。

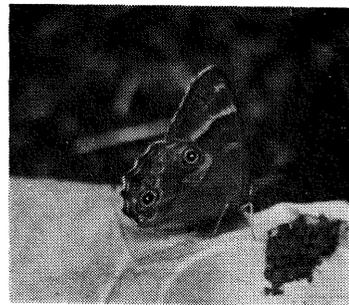
92 ヒメキマダラヒカゲ 標高一千七百呎以下の落葉広葉樹林に広く分布。特に精進口登山道等のササ類の群落には多産する。

93 キマダラモドキ 数が少なく、大田和付近の落葉広葉樹林内での記録があるのみ。

94 クロヒカゲ 落葉広葉樹林帯に広く分布。
 95 ヒカゲチヨウ 落葉広葉樹林帯に広く分布。前種より数

Ⅱ カミキリムシ類

富士山のカミキリムシ相の特徴は、山梨大学の池田助教教授によると、紀伊半島から南アルプスをへて富士山まで分布をのびし、富士山がその北限に近いような種（コウヤホソハナカミキリ・タケウチホソハナカミキリ・イガブチヒゲハナカミキリ・ヒメヨツスジハナカミキリ・ソボリンゴカミキリなど）と、北方から分布をのびし、富士山がその南限に近いような種（アラメハナカミキリ・カラマツカミキリ・キジマトラカミキリなど）との両方が見られ、それらがカミキリムシ相を豊富にしていることである。また、フジヒメハナカミキリのように、分布がほとんど富士山に集中するような種が



ヒカゲチヨウ

高地でも記録されている。

98 ヒメジャノメ 標高一千呎以下に分布するようで、大田和付近で記録されている。

99 コジャノメ 前種同様標高一千呎以下に分布するようで、大田和と鳴沢で記録されている。

は多く、特にニッ山周辺には多産する。

96 ヤマキマダラヒカゲ 標高一千八百呎以下のササ類の群落

周辺にみられる。

97 サトキマダラヒカゲ 前種と同様の地域にみられるが、大田和部落などの低標

みられることも、さらに複雑なものとしている。

それに、周辺地域にも分布するが、富士山にその個体数が特に多いものとして、フジコブヤハズカミキリ・オオトラカミキリ・ケブカマルクビカミキリ・ヤツボシカミキリ・エゾトゲムネカミキリ・ミヤマモモブトカミキリ等があり、全国的にみても珍しいものとして、サドチビカミキリ・ヒゲブトハナカミキリが挙げられるという。

加えて、他地域に比べ特化しているものが多いことも特徴で、フタスジハナカミキリ（黒化したものはハスジハナカミキリとも呼ばれる）や、ヤツボンハナカミキリは特に黒化したものが多い。また、*Pidonia* 属にも特化しているものが多いという。種数からみても一つの地域だけで百八十一（百八十六）種というのは、池田助教教授の指摘するように、奥日光の二百三十〜二百四十種、高尾山の百九十九種にひけを取らない豊かなカミキリ相を持っているといえよう。

このように豊かなカミキリ相を持つ富士山は、県内でも大菩薩嶺と並んで、最も調査者の入っている地域である。しかし、県内だけでも三百種というカミキリムシ類の種数の多さと、これまでの記録が、富士山・青木ヶ原・富士林道といった広域的な記載が多く、調査も特定地域に集中していたこともあつて、詳しい分布はまだよくわかっていない。そこでここでは、鳴沢村と明記された記録以外に、富士山（山梨県側）あるいは青木ヶ原と記載された種も含め、種名と記録地を挙げてリストとした。

足和田山塊については、まだほとんど調査されておらず、今後どのような記録が出るか楽しみな地域である。

カミキリムシ科

ノコギリカミキリ亜科

- 1 ノコギリカミキリ 富士山、*大田和林地道

クロカミキリ亜科

- 2 クロカミキリ 富士山

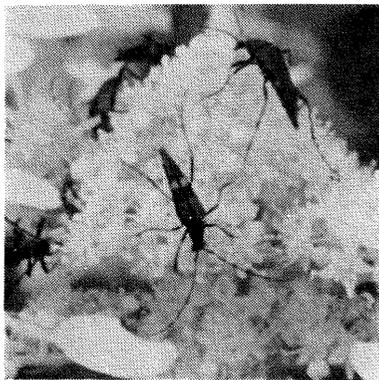
マルクビカミキリ亜科

第三章 動植物

- 3 サビカミキリ 富士桜高原、富士山
- 4 ツシマムナクボカミキリ 富士山
- 5 オオクロカミキリ 富士林道
- 6 ヒメマルクビヒラタカミキリ 富士林道
- 7 トドマツカミキリ 富士林道
- 8 ケブカマルクビカミキリ 富士山
- 9 ホソカミキリ 富士山
- ハナカミキリ亜科**
- 10 テツイロハナカミキリ 青木ヶ原
- 11 ニセハイイロハナカミキリ 富士林道、富士桜高原
- 12 アラメハナカミキリ 富士林道
- 13 フタコブルリハナカミキリ 富士山、*大田和林道、緑の休暇村
- 14 モモグロハナカミキリ 紅葉台
- 15 キベリカタビロハナカミキリ 富士林道 *大田和林道
- 16 フタスジカタビロハナカミキリ 富士山
- 17 カラカネハナカミキリ 富士山、富士林道
- 18 クビアカハナカミキリ 鳴沢林道、富士(山)林道
- 19 キバネニセハムシハナカミキリ 富士山
- 20 ピックニセハムシハナカミキリ 富士山
- 21 アカイロニセハムシハナカミキリ 富士山
- 22 ヒナルリハナカミキリ 富士山
- 23 チャイロヒメコブハナカミキリ 富士林道
- 24 ホソガタヒメハナカミキリ 富士林道、精進口三合目
- 25 カクムネヒメハナカミキリ 富士林道
- 26 ヒメハナカミキリ 富士林道
- 27 ミヤマヒメハナカミキリ 富士山
- 28 ナガバヒメハナカミキリ 青木ヶ原
- 29 キベリクロヒメハナカミキリ 富士山
- 30 オオヒメハナカミキリ 富士山、精進口三合目、*大田和林道
- 31 ヨコモンヒメハナカミキリ 富士林道
- 32 ムネアカヨコモンヒメハナカミキリ 富士林道
- 33 ニセヨコモンヒメハナカミキリ 富士山
- 34 セスジヒメハナカミキリ 富士山
- 35 オヤマヒメハナカミキリ 富士林道
- 36 フジヒメハナカミキリ 富士林道
- 37 チャイロヒメハナカミキリ 富士山、精進口三合目
- 38 フタオビノミハナカミキリ 富士林道、青木ヶ原
- 39 ニセフタオビノミハナカミキリ 富士林道
- 40 チビハナカミキリ 富士林道
- 41 ヒゲブトハナカミキリ 青木ヶ原
- 42 ムナミゾハナカミキリ 富士林道、青木ヶ原
- 43 マルガタハナカミキリ 富士山、富士林道、*大和田林道

- 44 スバタマハナカミキリ 青木ヶ原、富士林道
 45 チャボハナカミキリ 富士林道、軽水林道、精進口三合
 目
 46 ミヤマルリハナカミキリ 富士山
 47 クロルリハナカミキリ 富士山
 48 ルリハナカミキリ 富士山
 49 ヒメアカハナカミキリ 富士山
 50 ツヤケシハナカミキリ 富士林道、スバルライン三合
 目、*大田和林道
 51 アカハナカミキリ 青木ヶ原、*大田和林道
 52 ブチヒゲハナカミキリ 珍木林道
 53 イガブチヒゲハナカミキリ 富士林道、珍木林道、青木
 ケ原
 54 クロハナカミキリ 富士林道、緑の休暇村付近
 55 ヤツボシハナカミキリ 富士林道
 56 ヨツスジハナカミキリ 青木ヶ原、*大田和林道
 57 ヤマトヨツスジハナカミキリ 青木ヶ原、富士林道
 58 ヒメヨツスジハナカミキリ 珍木林道、富士林道
 59 ハネビロハナカミキリ 富士林道
 60 フタスジハナカミキリ 富士林道、珍木林道、青木ヶ
 原、*大田和林道
 61 カタキハナカミキリ 青木ヶ原
 62 オオヨツスジハナカミキリ 富士林道、青木ヶ原

- 63 セアカハナカミキリ 富士林道
 64 ヒゲジロハナカミキリ 青木ヶ原
 65 アオバホソハナカミキリ 富士山
 66 ニョウホウホソハナカミキリ 富士林道、青木ヶ原
 67 ホソハナカミキリ 青木ヶ原
 68 タテジマホソハナカミキリ 青木ヶ原
 69 ニンフホソハナカミキリ 青木ヶ原、鳴沢村、*大田和
 林道
 70 ミヤマホソハナカミキリ 富士林道、青木ヶ原
 71 ハコネホソハナカミキリ 富士林道
 72 ウコヤホソハナカミキリ 珍木林道、青木ヶ原



フタスジハナカミキリ
 (黒化した個体が多い)

- 73 タケウチホソハナカミキリ 青木ヶ原、
 74 ジャコウホソハナカミキリ 富士林道、青木ヶ原
 75 ベニバハナカミキリ 富士林道
 76 キヌツヤハナカミキリ 青木ヶ原
 77 クロホソコバネカミキリ 富士山スバルライン
 78 トガリバホソコバネカミキリ 青木ヶ原
カミキリ亜科
 79 トビイロカミキリ 青木ヶ原
 80 サドチビアメイロカミキリ 青木ヶ原
 81 コジマヒゲナガコバネカミキリ 青木ヶ原、富士山
 82 クスベニカミキリ 青木ヶ原
 83 ルリボシカミキリ 青木ヶ原、精進口三合目
 84 アオカミキリ 青木ヶ原
 85 チャイロホソヒラタカミキリ 富士山
 86 オオトラカミキリ 富士林道、軽水林道
 87 トラフカミキリ 富士山
 88 キジマトラカミキリ 富士林道、スバルライン二、三合目
目
 89 ブドウトラカミキリ 鳴沢村
 90 ウスイロトラカミキリ 軽水林道
 91 ツマキトラカミキリ 富士山
 92 ムネマダラトラカミキリ 青木ヶ原
 93 シラケトラカミキリ 青木ヶ原
 94 アカネトラカミキリ 富士山
 95 キスジトラカミキリ *大田和林道
 96 ハセガワトラカミキリ 富士林道、青木ヶ原
 97 エグリトラカミキリ 富士林道、*大田和林道
 98 クロトラカミキリ 富士山
 99 ホソトラカミキリ 富士林道、青木ヶ原、*大田和林道
 100 ヒメクロトラカミキリ 富士山
 101 キイロトラカミキリ スバルライン三合目付近
 102 トゲヒゲトラカミキリ 青木ヶ原
 103 シロトラカミキリ 富士山
 104 アカジマトラカミキリ 富士山
 105 マツシタトラカミキリ 軽水林道
 106 エゾトラカミキリ 富士林道
 107 ホタルカミキリ *奥八軒(M)
フトカミキリ亜科
 108 ゴマフカミキリ 富士山
 109 キクスイモドキカミキリ 青木ヶ原
 110 クビジロカミキリ 富士林道
 111 ヒシカミキリ 富士山
 112 クリチビカミキリ 青木ヶ原、富士林道
 113 キボシチビカミキリ 富士林道
 114 シロオビチビカミキリ 青木ヶ原

- 115 アトジロサビカミキリ 大田和
 116 ヒメナガサビカミキリ 富士山
 117 エゾサビカミキリ 富士林道
 118 アトモンサビカミキリ 富士林道
 119 クワサビカミキリ *奥八軒(M)
 120 セダカコブヤハズカミキリ 富士林道
 121 フジコブヤハズカミキリ 富士林道
 122 イタヤカミキリ 青木ヶ原
 123 シラフヒゲナガカミキリ 富士山
 124 ヒゲナガカミキリ 紅葉台
 125 カラフトヒゲナガカミキリ 青木ヶ原、富士林道
 126 マツノマダラカミキリ 紅葉台、富士山
 127 ゴマダラカミキリ 富士山
 128 センノキカミキリ 青木ヶ原
 129 ビロウドカミキリ 富士林道
 130 ニセビロウドカミキリ 富士林道、青木ヶ原
 131 ヒメビロウドカミキリ 富士林道
 132 ヤハズカミキリ 富士山
 133 ゴマフキマダラカミキリ 富士林道
 134 チャボヒゲナガカミキリ 青木ヶ原
 135 クリイロシラホシカミキリ 富士林道
 136 ヒゲナガゴマフカミキリ 富士林道

- 137 セミスジコブヒゲカミキリ 富士山
 138 フタモンアラゲカミキリ 青木ヶ原
 139 フタオビアラゲカミキリ 富士山
 140 ヒトオビアラゲカミキリ 富士山
 141 ジュウジクロカミキリ 富士林道
 142 カッコウカミキリ 富士山
 143 チビコブカミキリ 富士林道
 144 クモノスモンサビカミキリ 富士山
 145 クリイロチビケブカカミキリ 富士林道
 146 ホソヒゲケブカカミキリ 富士山
 147 ハイイロツクビカミキリ 青木ヶ原
 148 シロオビドイカミキリ 富士林道
 149 ドイカミキリ 精進口登山道
 150 エゾトゲムネカミキリ 富士林道
 151 ネジロカミキリ 青木ヶ原、富士林道
 152 ゴイシモモブトカミキリ 青木ヶ原
 153 スジマダラモモブトカミキリ 富士山
 154 ナカバヤシモモブトカミキリ 富士林道
 155 ゴマダラモモブトカミキリ 富士林道、青木ヶ原
 156 ミヤマモモブトカミキリ 富士林道
 157 トゲバカミキリ 青木ヶ原
 158 ホウノキトゲバカミキリ 鳴沢村

- | | | | | | |
|-----|--------------|------|--|-----------------------------|------|
| 159 | キッコウモンケシカミキリ | 富士山 | 173 | シラホシカミキリ | 富士山 |
| 160 | ガロアケシカミキリ | 青木ヶ原 | 174 | セミスジニセリンゴカミキリ | 富士山 |
| 161 | アトモンマルケシカミキリ | 富士山 | 175 | ヒゲナガシラホシカミキリ | 富士山 |
| 162 | クモガタケシカミキリ | 富士山 | 176 | クロニセリンゴカミキリ | 富士山 |
| 163 | ヘリグロアオカミキリ | 富士山 | 177 | カツラカミキリ | 富士山 |
| 164 | ヤツボシカミキリ | 富士山 | 178 | ヨツキボシカミキリ | 青木ヶ原 |
| 165 | シナカミキリ | 富士山 | 179 | ヘリグロリンゴカミキリ | 富士山 |
| 166 | ヤツメカミキリ | 富士山 | 180 | ヒメリンゴカミキリ | 富士山 |
| 167 | ハンノアオカミキリ | 富士林道 | 181 | ソボリンゴカミキリ | 青木ヶ原 |
| 168 | ニセシラホシカミキリ | 富士山 | 記録はないが分布している可能性の大きいカミキリムシ類
(宮下氏の御教示による) | | |
| 169 | ハンノキカミキリ | 富士山 | | | |
| 170 | キモンカミキリ | 富士山 | | ヒラヤマコブハナカミキリ、マルクビケマダラカミキリ、 | |
| 171 | ジュウニキボシカミキリ | 富士山 | | ヒメスギカミキリ、ヒメヒゲナガカミキリ、シロスジカミキ | |
| 172 | カスガキモンカミキリ | 青木ヶ原 | | | |

Ⅲ 蛾類

富士山には、高山蛾としてソウンクロオビナミシヤクが分布するとされていたが、さらに、日本では赤石山脈北岳以外で採集されたことのないアトジロアルプスヤガの一匹が、一九八四年七月二十四日、白川邦臣氏によって山梨県側富士山五合目（標高二千四百餘）で採集された（雄としては日本初記録）ことよって、富士山は高山蛾の分布上注目される地域となっている。

その他、富士山五合目付近では、富士山の特産とされるフジシロミヤクヨトウの他、アオバヤガ・ミヤマアカヤガ・ウスイロカバスジャガ・キンタギンウワバ・シロジマシヤチホコ・ホシナカグロモクメシヤチホコなどが記録され

ている。

VI その他

ここでは、これまでに記録があるもののみ、科ごとに種名だけ挙げておく。

a 鞘翅目

オサムシ科

ホソヒメクロオサムシ、クロナガオサムシ、*クロロナガ(フジクロナガ)オサムシ(M) *ホソアカガネオサムシ(M)

*ルイスオサムシ(M) *ヒメマイマイカブリ(M)

ゴミムシ科

*クロズジュウジアトキリゴミムシ、オオミツアアトキリゴミムシ、ホソアトキリゴミムシ、ヤホシゴミムシ、カワチマルクビゴミムシ

クワガタムシ科

コルリクワガタ、ホソツヤルリクワガタ、*ノコギリクワガタ、*ミヤマクワガタ、*コクワガタ、*ヒメオオクワガタ

コガネムシ科

ヒメスジコガネ、ツヤコガネ、アオハナムグリ、ヒメハナムグリ、オオチャイロハナムグリ、ハイイロビロウドコガネ、アカビロウドコガネ、*セマダラコガネ、*オオトラフコガネ、*カプトムシ

センチコガネ科

センチコガネ

コメツキムシ科

ヒメシモフリコメツキ

ホタル科

オバポタル

ジョウカイボン科

ジヨウカイボン、ウスイロクビボソジヨウカイ

ベニボタル科

ムネアカホソベニボタル

テントウムシ科

ルイステントウ、ベニヘリテントウ

テントウダマシ科

ルリテントウダマシ

カツオブシムシ科

アカオビカツオブシムシ

クビナガムシ科

クビナガムシ

ハムシ科

アザミクビボソハムシ、トホシハムシ、キムネアオハムシ、ヒゲナガルリマルノミハムシ、チャバネツヤハムシ、キボシナガツツ(キボシルリ)ハムシ、ヨツボシナガツツハムシ、アオカメノコハムシ、*アザミハムシ

オトシブミ科

カシルリオトシブミ、ベニボシハマキチヨッキリ

ゾウムシ科

オオゾウムシ、イチゴハナゾウムシ、リンゴコフキゾウムシ

b トンボ目

トンボ科

アキアカネ、ウスバキトンボ

カワトンボ科

*ミヤマカワトンボ、

参考文献

- 「山梨の昆虫」No. 1～No. 26（甲州昆虫同好会。「駿河の昆虫」No. 1～No. 135（静岡昆虫同好会。「神奈川虫報」No. 53～No. 67（神奈川昆虫談話会。「さやばね」No. 1～No. 3（日本鞘翅目学会。「蛾類通信」No. 132（日本蛾類学会。「富士山」総合学術調査報告書（一九七一年、富士急行KK）。「山梨県の野生動物」（一九八〇年、山梨県

（渡 辺 通 人）